

兵庫県神戸市兵庫区

楠・荒田町遺跡(Ⅲ)

財団法人兵庫県健康財団新施設建設に伴う発掘調査報告書

平成20年3月

兵庫県教育委員会

兵庫県神戸市兵庫区

楠・荒田町遺跡(Ⅲ)

財団法人兵庫県健康財団新施設建設に伴う発掘調査報告書

平成 20 年 3 月

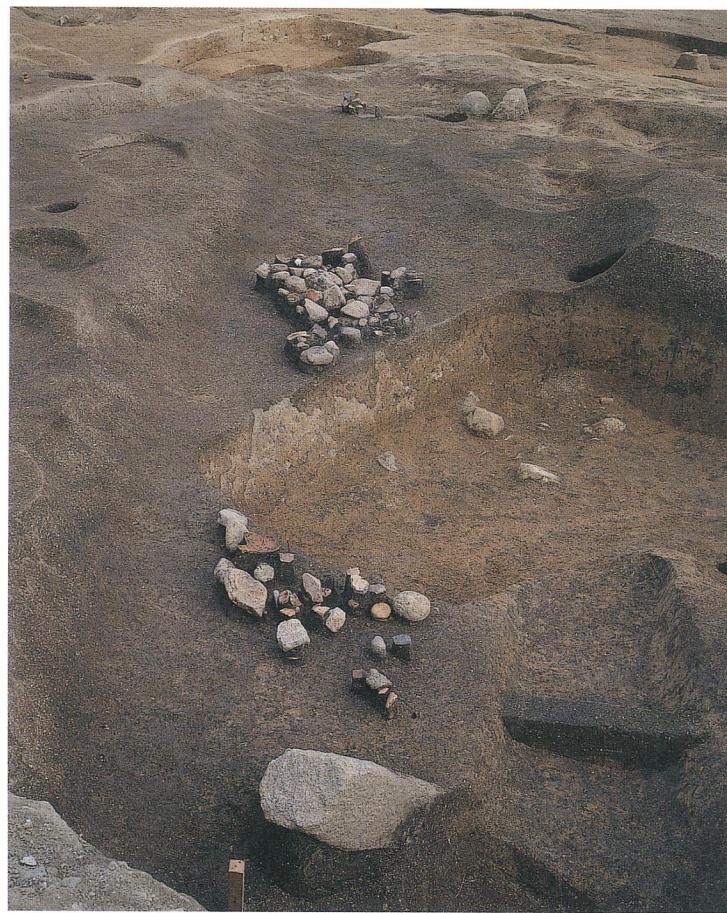
兵庫県教育委員会



2区 全景空中写真



2区 弥生時代遺構全景（南から）



2区 弥生時代溝（SD052）全景



2区 室町時代・江戸時代以降の遺構全景（東から）



2区 室町時代・江戸時代以降井戸（SE022）遺物出土状況（東から）



室町時代の遺物（土師器皿・土製品煮炊具）

例　　言

1. 本書は、兵庫県神戸市兵庫区荒田町に所在する、楠・荒田町遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、財団法人兵庫県健康財団新施設建設に関連して、財団法人兵庫県健康財団の依頼を受け、平成11年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（現：兵庫県立考古博物館）が実施した。
3. 整理作業についても、財団法人兵庫県健康財団の依頼を受け、平成19年度に兵庫県立考古博物館（旧：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所）が実施した。
4. 本書の執筆は、兵庫県立考古博物館職員が行った。分担は本文目次に示した。
5. 本書の編集は藤田が担当し、山本・松本の協力を得た。
6. 本書で使用した引用文献・参考文献は各章末に掲載した。
7. 遺物写真の撮影にあたっては、タニグチフォトと委託契約を交わして、兵庫県立考古博物館において実施した。
8. 本書で使用した方位は国土座標V系を基準にし、水準は東京湾平均水準（T.P.）を使用した。また各遺構図面で使用している方位は、座標北を示す。
9. 楠・荒田町遺跡の調査成果は、既に年報・現地説明会資料等で公表している。これらと本報告では内容を異にする部分もあるが、本書が最新の担当者の見解と理解されたい。

目 次

1 章 遺跡を取り巻く環境	(別府 洋二) ... 1
2 章 調査に至る経過と経緯	(藤田 淳) ... 2
3 章 調査の方法	(藤田 淳) ... 3
4 章 調査の概略	(藤田 淳) ... 4
5 章 弥生時代の調査	4
1 節 遺構	(藤田 淳) ... 4
2 節 遺物	(菱田 淳子) ... 5
6 章 室町時代・江戸時代以降の調査	9
1 節 室町時代の遺構	(藤田 淳) ... 9
2 節 江戸時代以降の遺構	(藤田 淳) ... 9
3 節 遺物	(岡田 章一) ... 10
7 章 まとめ	(藤田 淳) ... 14

図 版 目 次

- 図版1 周辺の遺跡
- 図版2 遺跡の位置
- 図版3 確認調査位置
- 図版4 1区・2区 遺構の配置図・調査区北壁断面図
- 図版5 1区 遺構・土坑配置図
- 図版6 2区 遺構配置図・各遺構断面図
- 図版7 2区 遺構配置図
- 図版8 2区 弥生時代遺構（溝SD052）平面・断面図
- 図版9 2区 弥生時代遺構（溝SD052・SD054）平面・断面図
- 図版10 室町時代遺構（井戸SE022）上部平面・断面図
- 図版11 室町時代遺構（井戸SE022）平面・断面図①
- 図版12 室町時代遺構（井戸SE022）平面・断面図②
- 図版13 室町時代遺構（井戸SE022）平面・断面図③
- 図版14 弥生時代の遺物①
- 図版15 弥生時代の遺物②
- 図版16 弥生時代の遺物③
- 図版17 室町時代・江戸時代以降の遺物①
- 図版18 室町時代・江戸時代以降の遺物②
- 図版19 室町時代・江戸時代以降の遺物③
- 図版20 室町時代・江戸時代以降の遺物④
- 図版21 室町時代・江戸時代以降の遺物⑤
- 図版22 弥生時代の遺物（石器）①
- 図版23 弥生時代の遺物（石器）②
- 図版24 室町時代・江戸時代以降の遺物（石器）①

写真図版目次

- 卷頭カラー図版 1 2区 全景空中写真
- 卷頭カラー図版 2 2区 弥生時代遺構全景（南から）
2区 弥生時代溝(SD052) 全景
- 卷頭カラー図版 3 2区 室町時代・江戸時代以降の遺構全景（東から）
2区 室町時代・江戸時代以降井戸(SE022) 遺物出土状況（東から）
- 卷頭カラー図版 4 室町時代の遺物（土師器皿・土製品煮炊具）
写真図版 1 楠・荒田町遺跡遠景（西から）
楠・荒田町遺跡（西から）
- 写真図版 2 1区 全景（北から）
1区 土坑(SK002) 断面（北から）
1区 土坑(SK005) 断面（南から）
1区 土坑(SK006) 断面（南から）
1区 土坑(SK007) 断面（東から）
- 写真図版 3 2区 全景（空中写真）
2区 北壁（南西から）
2区 東壁（西から）
- 写真図版 4 2区 弥生時代遺構全景（南から）
2区 弥生時代遺構全景（東から）
- 写真図版 5 2区 弥生時代遺構 溝(SD052・SD054) 全景（南西から）
2区 弥生時代遺構 溝(SD052) 断面（北東から）
2区 弥生時代遺構 溝(SD052)（北東から）
2区 弥生時代遺構 溝(SD052)（南西から）
- 写真図版 6 2区 弥生時代遺構 溝(SD052) 土器群2（北西から）
2区 弥生時代遺構 溝(SD052) 土器群2（南西から）
- 写真図版 7 2区 弥生時代遺構 溝(SD052) 土器群1
2区 弥生時代遺構 溝(SD052) 土器群2（東から）
2区 弥生時代遺構 溝(SD052) 土器群3（北西から）
2区 弥生時代遺構 溝(SD052) 土器群3（東から）
2区 弥生時代遺構 溝(SD052) 土器群3（南西から）
- 写真図版 8 2区 弥生時代遺構 溝(SD052) 断面2（東から）
2区 弥生時代遺構 溝(SK058) 断面（南から）
2区 弥生時代遺構 溝(SD054)（南から）
2区 弥生時代遺構 溝(SD054) 断面（南から）
2区 弥生時代遺構 溝(SD054)（北東から）
2区 弥生時代遺構 溝(SD054)（南東から）

写真図版9	2区 室町時代・江戸時代以降遺構全景（南から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構全景（東から）
写真図版10	2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022) 断面（北から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022) 中層遺物出土状況（北から）
写真図版11	2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022) 中層遺物出土状況1（東から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022) 中層遺物出土状況2（南から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022) 中層遺物出土状況2部分（南から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022) 中層遺物出土状況2部分（南から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022) 中層遺物出土状況3（南から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022) 中層遺物出土状況3（南から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022) 中層遺物出土状況3（南から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022) 下層遺物出土状況
写真図版12	2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022) 中層遺物出土状況3（南から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022) 中層遺物出土状況3（南から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022) 中層遺物出土状況3（南から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022) 完掘
写真図版13	2区 室町時代・江戸時代以降遺構 溝(SD030・SD031)（南から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構 溝(SD030・SD031) 断面（南西から）
写真図版14	2区 室町時代・江戸時代以降遺構 土坑(SK012)（北から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構 土坑(SK012) 断面（東から）
写真図版15	2区 室町時代・江戸時代以降遺構 柱穴(P027) 断面（南から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構 土坑(SK032) 断面（北から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構 土坑(SK059) 断面（南から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE024) 断面（北西から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE024)（北西から） 2区 室町時代・江戸時代以降遺構 土坑(SK020)（東から）
写真図版16	弥生時代の遺物①
写真図版17	弥生時代の遺物② 弥生時代の遺物③
写真図版18	弥生時代の遺物④ 弥生時代の遺物⑤
写真図版19	弥生時代の遺物⑥ 弥生時代の遺物⑦
写真図版20	室町時代・江戸時代以降の遺物①（2区 SE024） 室町時代・江戸時代以降の遺物②（2区 SK020） 室町時代・江戸時代以降の遺物③（2区 SK022）
写真図版21	室町時代・江戸時代以降の遺物④（2区 SK022）
写真図版22	室町時代・江戸時代以降の遺物⑤（2区 SK022）
写真図版23	室町時代・江戸時代以降の遺物⑥
写真図版24	室町時代・江戸時代以降の遺物⑦（土師器皿・土製煮炊具） 室町時代・江戸時代以降の遺物⑧（土製煮炊具）
写真図版25	室町時代・江戸時代以降の遺物⑨（土製煮炊具）

- 室町時代・江戸時代以降の遺物⑩（土製煮炊具）
写真図版26 室町時代・江戸時代以降の遺物⑪（備前焼擂鉢・甕）
室町時代・江戸時代以降の遺物⑫（備前焼擂鉢・甕）
写真図版27 室町時代・江戸時代以降の遺物⑬（青磁碗・灰釉碗）
室町時代・江戸時代以降の遺物⑭（近世陶磁器）
写真図版28 室町時代・江戸時代以降の遺物⑮（瓦）
室町時代・江戸時代以降の遺物⑯（瓦）
写真図版29 弥生時代の遺物（石器）
写真図版30 弥生時代・室町時代・江戸時代以降の遺物（石器）

1章 遺跡を取り巻く環境

近隣で旧石器時代まで遡る遺跡は会下山遺跡（014019：兵庫県遺跡番号 以下同じ）などしかなく、きわめて少ない。

縄紋時代になると、楠・荒田町遺跡（014023）でも縄紋早期以前まで遡る尖頭器が出土しており、中期から晩期にかけての土坑や貯蔵穴も検出している。また、宇治川南遺跡（013023）では早期から晩期にかけての遺物が出土しており、黒曜石の石器や石棒・土偶などのほか、山麓の祇園遺跡（014007）でも早期・前期の遺物が出土している。低地では大開遺跡（014030）や上沢遺跡（014031）、五番町遺跡（016012）などが挙げられる。

弥生時代になると、遺跡は爆発的に増える。楠・荒田町遺跡では前期から中期初頭の貯蔵穴を検出し、宇治川南遺跡や大開遺跡では前期の住居を検出している。また、大開遺跡は前期前半の環濠集落である。次に中期になると楠・荒田町遺跡でも竪穴住居や掘立柱建物、方形周溝墓などが存在し、宇治川南遺跡では木棺墓群を検出している。後期には長田神社境内遺跡（016005）や長田南遺跡（016011）に集落が営まれる。また、中期や後期には熊野遺跡（014012）・会下山遺跡、河原遺跡（014013）、天王谷遺跡（014002）、祇園神社裏山遺跡（014003）などの丘陵上にも高地性集落が営まれるようになる。

周辺は市街化が著しいため、古墳は消滅や埋没したものが多い推定できる。夢野丸山古墳・会下山二本松古墳・念佛山古墳（016012）・池田古墳群（016006）などを周知しているにすぎない。荒田八幡神社境内も周囲から高くなっている、墳丘の可能性を考えるが、確認していない。一方、楠・荒田町遺跡で中期や後期の住居を検出しており、他に韓式土器が出土した上沢遺跡や、御藏遺跡（016018）、御船遺跡（016027）、神楽遺跡（016014）、湊川遺跡（014025）、三番町遺跡（016022）などが知られる。また、下山手北遺跡（013042）では7世紀前半の倉庫を含む掘立柱建物群が存在する。

奈良時代の遺跡には、銅椀が出土した上沢遺跡、8世紀末～9世紀の倉庫を含む掘立柱建物の存在から八部郡衙の推定地とする御藏遺跡や、神楽遺跡、御船遺跡などがあり、楠・荒田町遺跡、神戸大学医学部付属病院構内でも多くの土器が出土する土坑を検出したが、その他の地区では土器を散見するにすぎない。兵庫津遺跡（014024）では大輪田泊の時代にまで遡る遺構は、近年ようやく発見されはじめている。室内遺跡（016004）からは土製の仏像の一部や瓦が出土しており、寺院跡の存在が伺われる。

平安時代前半の遺跡には下山手北遺跡があり、貴族クラスの邸宅跡と考えられる園池を伴う掘立柱建物群が検出された。宇治川南遺跡では10世紀末から13世紀前半の遺物が出土している。神楽遺跡では平安時代中期の綠釉陶器・灰釉陶器などの遺物が出土している。

平安時代後半から鎌倉時代初頭の遺構・遺物の出土は増加する。楠・荒田町遺跡の南部地域では、地下鉄工事に伴う1978年度の調査で10～12世紀頃の遺物が出土する柱穴群を検出したが、大規模な建物を構成するものではない。また、周辺ではマンション建設などに伴った調査が行われているが、同時期の遺構・遺物は一般的な集落遺跡のものである。但し、橋小学校跡地で検出された幅4m以上、深さ1.4m以上の大溝を、古代山陽道を推定した場所で検出しており、12世紀後半から13世紀前半頃の遺物が出土している。また、神戸大学医学部の南側で実施された神戸地方検察庁楠町宿舎建設に伴う確認調査（兵庫県遺跡調査番号920283）では推定古代山陽道に直交する方向の幅約3mの溝を検出し、南端部では山陽道によって規定された地割りに大型の溝を設けていることがわかる。

楠・荒田町遺跡の西端部地域では、1992年度に荒田公園内で行われた調査で、柵によって区画された掘立柱建物群が検出され、11世紀後半から13世紀代の土器が出土している。また、石帯や瓦も出土している。柵列や建物の主軸はN29°～38°Wの角度をもつ。

雪御所遺跡（014016）は古く明治時代に礎石と考えられている花崗岩の巨石や瓦が出土しており、1987年度におこなわれた調査では、該当時期の遺構を検出できなかったものの、多量の土師器や須恵器・瓦器・瓦が出土している。

祇園遺跡（014007）は天王越えである有馬街道が山に分け入る山麓に広がる遺跡で、これまでの数次の調査で、園池遺構などを検出し、当時の貴族の邸宅の一部が現れた。多量の土師器、京都産を含む瓦、玳瑁天目茶碗を含む中国製磁器や石鍋などの滑石製品が出土しており、平重盛やその子維盛、資盛など平家一門の有力者の邸宅跡を推測させている。

この他、湊川遺跡・上沢遺跡・室内遺跡・御船遺跡でも同時期の遺物を検出している。

室町時代の遺構は楠・荒田町遺跡でも少ないが、平成11年度の調査（遺跡調査番号990226）では同時代の井戸や溝が検出され、湊川宿との関連が考えられている。

2章 調査に至る経過と経緯

財団法人兵庫県健康財団は、少子・高齢化社会の到来を迎えて、官民が協働して総合的に県民の健康づくり、生活習慣づくりを推進するための、新たな体制として創設された財団法人である。その活動拠点となる施設を、兵庫区荒田町2丁目に整備することとなった。

第1期整備事業としては、兵庫県荒田仮設庁舎跡地に、事務所、検診室、検査室などを含む新たな施設を建設することとなった。予定地は、弥生時代では六甲山南麓の拠点集落、平安時代後期には「福原京」の推定地として著名な、楠・荒田町遺跡の中にあり、近接する神戸大学附属病院内では、建物の改築等に伴い、数次にわたる発掘調査を実施している。

このため、新施設建設に先立ち、財団法人兵庫県健康財団の依頼（平成11年4月21日付け 兵健第24号）に基づいて、平成11年4月26～27日に確認調査（遺跡調査番号990141）を実施した。その結果、計画地内に遺構の存在が判明したため、改めて財団法人兵庫県健康財団の依頼（平成11年8月11日付け 兵健第142号）を受け、本発掘調査（遺跡調査番号990226）を実施した。

整理作業は平成18年度と19年度にわたって行った。初年度は水洗い・ネーミング・接合・補強・実測・拓本・復元・金属器の保存処理を行い、次年度は写真撮影・写真整理・図面補正・トレース・レイアウトを行った。

水洗い・ネーミングは兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所魚住分館（明石市魚住町清水）で行い、他の作業については、平成18年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区）、平成19年度は県立考古博物館（加古郡播磨町大中）で行った。

（金属器の保存処理にあたっては、事前にレントゲン写真を撮影し、水酸化リチウムで脱塩処理をした後、鍛取りを行った。強化にはアクリル系合成樹脂であるパラロイドN A D-10を利用した。）

確認調査（遺跡調査番号990141）

平成11年4月26～27日

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 企画調整班

山本 誠・多賀茂治

本発掘調査（遺跡調査番号990226）

平成11年10月19日～12月27日

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 復興調査班

藤田 淳・仁尾一人

整理作業体制

平成18年4月1日～平成19年3月31日

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 整理保存班

岡田章一・菱田淳子・藤田 淳・岸本一宏・池田悦子・松本嘉子・前川悦子・高瀬敬子

平成19年4月1日～平成20年3月31日

兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

岡田章一・菱田淳子・松本嘉子・古谷章子（以上整理保存班）・別府洋二（調査第1班）・

山本 誠（企画調整班）

同事業部

藤田 淳（学芸課）

3章 調査の方法

調査対象地は中程に東西方向の段差があり、北側が南側よりも約1m高くなっている。残土処置を考慮してこの段差を境に調査区を南北に2分割し、南側を1区、北側を2区とした（図版4）。

まず、1区の調査を行い、残土はすべて場外へ搬出し投棄処分した。次に2区の調査を行い、その残土は1区に横置きしたが、機械掘削土の一部は場外へ搬出処分した。

1区は現地表下約80cmの旧表土（耕作土）上面まで、以前に存在した建物のコンクリート基礎を除去しながら、重機で掘削した。その後、人力で遺構検出面（巨礫混じり黄褐色砂礫層）までの掘削を行い、遺構の検出と掘削、写真用足場からの全景写真撮影を行った。これらの作業が終了した後、遺構検出面の下位の土層の堆積状況を把握するために、調査区の中程を重機がとどく深さまで、立ち割りを実施した。同様な層が連続するのみで、大きな変化は認められなかった。

2区は確認調査の結果にもとづき現地表下40～50cmの黄褐色シルト混じり粗砂層（花崗岩風化バイラン土）の上面までの機械掘削を調査区東端から開始した。1区と同様にコンクリート基礎を除去しながら掘削を進めた。しかし、遺構が存在する状況ではなかったため、遺構検出面はさらに70～100cm下位の淡黄灰色砂混じりシルト層と判断し、その約10cm上位まで掘削することとした。ところが、西側に近づくと当初の黄褐色シルト混じり粗砂層の上位に土壤化した暗褐色シルト混じり粗砂層があり、この層を切り込んだ遺構が確認された。そこで急遽、機械掘削の深度を現地表下約50cmまで上げ、遺構面を直接検出していった。したがって、調査区東半では本来の遺構面よりも掘り下げてしまったことになる。人力で精査と遺構検出を進める過程で遺構の時期が中近世と弥生時代に大別されることが判明し

た。まず、中近世の遺構の掘削・写真用足場からの全景写真撮影・一部の遺構実測を行った後、弥生時代の遺構の調査を行った。

遺構全体の平面実測は、1区・2区ともクレーンを用いた写真測量を行った。2区ではクレーンの足場を西側に確保するために、工事範囲の全域を同時に調査することはできなかった。そこで、写真測量の終了後、調査期間の許す範囲で、西側への遺構の広がりの確認に努めた。さらに、ヘリコプターによる遺跡周辺の写真撮影も実施した。

調査終了間際の12月25日には現地説明会を行った。事前の記者発表による新聞報道の成果もあって120名の参加があり、その様子は地元TVでもニュース放映された。

4章 調査の概略

1区は2区との境の段差が旧地盤を大きく削平して生じたものであることが判明した。削平は近代の開墾および以前存在した建物の建設の際に行われたものである。したがって、遺物包含層は無く、巨礫混じり砂礫層上面で土坑数基を検出したに過ぎない。土坑はいずれも不整形で浅い。埋土の状況や出土遺物からいずれも近世以降のものである。

2区では、弥生時代、室町時代、近世の遺構を同一面で検出した。遺構の検出面は現地表下約50cmの暗褐色粗砂混じりシルト層で、この層の本来の上面は建物基礎などの攪乱によって削平されている。

各時代の遺構はすべて西側に集中しており、東側には存在しない。東側の遺構面の下位には層厚約70cmの洪水砂が堆積しており地盤の締まりが悪い。西側は砂混じりシルト層の固く締まった地盤であり、これが集落立地の選択要素となったと推定する。また、南側は旧地形が大きく削平され、遺構もすべて途切れてしまっている。

5章 弥生時代の調査

1節 遺構

中期中葉～後葉の溝、柱穴、土坑などを検出した。遺構は調査区の中央付近から南西の方向に延びる溝(SD052)を中心に、その北西側に柱穴が散在し、南東には幅の狭い溝(SD054)や土坑(SK058)などが分布する(図版7)。柱穴は出土遺物と溝埋土との類似性によって時期判断を行ったため、不確実な点があることは否めない。

SD052(図版8・9)

幅約3.0m～3.5m、延長は15m以上、ほぼ直線的に延びる溝である。北側から南側へしだいに深くなり、最深部の深さ約1.2mを測る。南側は旧地形の削平に伴って途切れている。北端はSE022や攪乱に切

られており、どのように続いていたのかよくわからない。この溝の底近くからは弥生土器片や石斧、石庖丁、焼けた礫などがまとまって出土した。時期を確認できたものはほとんどⅢ様式古段階のものであったが、I様式の木の葉紋の壺片(37)も確認している。

SD054（図版9）

上記のSD052に直交する溝で、幅約0.8m、延長は3.7m以上を測る。北端は浅いが急に深さを増す。溝の最上部からはIV様式の土器片がまとまって出土した。

2節 遺物

図版14から16は主に弥生時代の土器である。小片のため、径や傾きが推測の域を出ないものが多く含まれている。まとまって出土している遺構は2区の溝(SD052、SD054)であり、柱穴(P018)のほか、後世の遺構である井戸(SE024、SE022)からも弥生時代の土器が出土している。

SD052出土遺物（1～58・66）

遺物の多くは弥生時代Ⅲ様式古段階に属するものとみられるが、一部弥生時代前期のもの、また縄文時代の遺物もみとめられる。

1は鉢の口縁部である。外傾する端部外面にやや左下がりの刺突文をやや密に施す。2から4は壺の口縁である。2は外傾する端部外面に上下2段に上段は左下がり、下段は右下がりの刺突文を施す。3は端部外面に左下がりの刺突文、上面に波状文を施す。円孔は1つ穿たれている。4はラッパ状に開く口縁である。端部に装飾は無く、頸部に凹線を2条施す。

5は無頸壺である。口縁端部はほぼ水平でわずかに内傾し、内周・外周ともに刻みを施す。端部より少し下がった部位に3条の貼付突帯がめぐっており、縦方向の棒状浮文が剥離した痕跡が残る。体部には縦方向のハケメの後、横方向のハケメを施しており、その上に一部波状文をみとめる。

6～8は直口の壺である。6は2条の貼付突帯がめぐっている。上段の突帯には1～4mmの不規則な間隔で小さく押さえが施されるが、下段には1箇所のみ押さえをみとめるのみである。また下段の下には波状文の一部をみとめた。7の端部は断面3角形状に内側に張り出す。横方向に長い楕円形の指痕のある貼付突帯が巡る。8は口縁端部の少し下に幅に比べ縦方向の上下幅の大きい山の高い波状文、その下にごくわずかに2段目の波状文が残る。

9はハの字状に開く口縁の壺で、2段の櫛描直線文が巡る。10は口縁端部を欠くが、垂下すると推定する。内面に貼付突帯が巡る。

11～14は径・傾き等が不明な壺の破片である。11はおそらく頸部の破片で、6条の断面三角形状の貼り付け突帯を施すが、突帯が剥離または欠損する部分も多い。下端には櫛描文をみとめる。12～14は肩部の破片でいずれもハケメの上に櫛描文を施している。12は3段の櫛描直線文（8本1単位）を施す。13は最上部に断面三角形の突帯、その直下に直線文、その下に少し間を空けて緩やかな波状文を施す。14は2段の直線文、その上下と間に小さなピッチの波状文を施す。15も壺の胴部の破片で、櫛描直線文上に円形浮文を貼り付け、その上下に斜格子文を施す。斜格子の大きさは直線文の上下で異なり、上は

大きく下は小さい。

16は甕の胴部である。横からみた形状はおおむね縦長の楕円形で、底部は平底である。内面は板ナデのちヘラミガキで、部分的に細い工具痕がのこる。外面はヘラ削り後磨くものの、仕上げについては、内面の方が丁寧である。

17～21は甕の口縁である。くの字状に直線的に短く広がる口縁部で、端面はわずかにつまみ上げたような形状で、特に装飾はみとめられない。頸部以下の内外面はハケメであるが、17では外面は縦方向、内面は横方向であり、18の外面は右下がり斜め、内面はおおよそ縦方向、19は外面が縦方向、内面は不明、20では内外とも右下がりの斜め方向である。

22は高杯の杯部である。丸みを帯びた浅い椀状に大きく広がる。端面を拡張し、わずかに内傾する。端部外面に刻みが残る。そのわずかに下がったところに8本1単位の櫛描簾状文が巡る。その下に少し間を開けてやや雑な櫛描直線文がある。それ以下の外面は横方向のヘラミガキ、内面はハケメもしくはヨコナデである。

23・24は大型甕の口縁で、形態的な特徴や調整法は17～21と同様である。24には外面の頸部下に「十」字状のヘラ痕がある。

25～31は底部である。25～27、30は底面から急角度で立ち上がるもので、甕の底部かと思われる。25の外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデ。26の外面は指オサエと板ナデの後縦方向のヘラミガキ、内面は板ナデに近いケズリで中央は一段窪む。底面は指ナデ。また底面との屈曲部に黒斑をみとめる。27は器壁の残りがよく、特に底面から立ち上がる部分は薄い。外面は縦方向のナデ、内面は不定方向のナデと指オサエ。底面はナデ、その周縁は横方向のナデである。28・29は、底面から鈍角で緩やかに立ち上がる器形で、壺の底部か。28は外面縦方向のヘラミガキ後ナデ、内面はオサエのちナデ。29も外面は縦方向のヘラミガキ、内面は12本1単位のやや細かいハケメである。30は内外面ともハケメ、底面からの屈曲部は指オサエ、指ナデを施す。底面はナデ。31は外面板ナデ、内面及び底面はナデである。

32は口縁部で、無頸壺であろうか。端部は内側に肥厚し、面を持つ。やや雑な緩やかな波状文の下に2条の凹線文を巡らす。溝の中層からの出土である。

33～38は、溝の下部からの出土である。33は3条の横方向の貼り付け突帶（全周しない）の上に縦方向の棒状浮文を2本貼り付けている。貼り付け突帶の途切れた所に縦方向のハケメ、突帶より下段に波状文が一部みとめられる。34は2条の横方向の並行する沈線から、弥生時代前期の土器片と考える。外面はハケメもしくは擦痕の後ミガキ。35は壺の口縁で、端部はわずかに下方に拡張され、縦方向の刺突文が施されている。36の底部の破片は粘土の貼り足し痕が明瞭である。また、底面が極めて厚い。上部に黒斑が見られる。外面の器壁の残存は良好で、まず粗いハケを施した上から細かいハケメを行っている状況が明らかである。内面は表面の剥離や摩滅が著しい。底面は指オサエ、指ナデを行っているが平滑に仕上がっていない。37はほぼ平坦な破片であるため、傾き等は不明である。ヘラ描沈線による木の葉文の一部らしい弧状の文様がみとめられる。弥生時代前期に遡る遺物である。38は無頸壺である。端面は拡張されて面を持ち、わずかに内傾する。また外面に小さく刻み目を施す。外面は櫛描によるやや雑な波状文と直線文を施す。内面はごく一部にハケメを認める。

39～44は溝の最下層からの出土である。39は壺の口縁部で外反する口縁端部は上下に拡張されて面をもち、そこにヘラ描の密な斜格子文を施し、大きめの円形浮文を貼り足している。40は短く上方に直立気味に屈曲する口縁部である。屈曲部には刺突による刻み目を、それより上に円形浮文を貼り足し、そ

れより下には180度以上の角度を持つ櫛描扇方文、さらに1箇所だけではあるが円形浮文らしいものを見つめた。内面は摩滅のため調整は不明であるが、ナデであろう。41は無頸壺と推定される。外面には幅広の凹線2条があげられる。全体にヨコナデで仕上げている。42は甕の破片か。破片の下端に沈線をみとめ、全体の器形は釣り鐘を逆さにしたような形状ではなく、胴部が膨らんで口がすぼまる形態であろう。口縁端部には刻み目を施し、全体にヨコナデで仕上げている。43も甕の口縁部で、頸部の屈曲部に2条のヘラ描沈線が巡り、端部には刻み目を施す。弥生時代前期のものと考える。44は縄文土器である。波状口縁の器形と推定し、端部外面に細かな刻み目を、ヘラ描沈線の間に縄文を認める。

45～57は、調査時に番号をつけて取り上げた遺物である。45は大きく外反して開く口縁の壺である。内側に3条の断面三角形の突帯を同心円状に貼り付け、細かく刻み目を入れている。最外周の突帯と真ん中の突帯の間に円孔を2つ並べて穿っている。内面は横方向にヘラミガキ、外面下部は縦方向のハケメである。46は2と類似した外傾する端部外面に上下2段に上段は左下がり、下段は右下がりの刺突文を施す壺である。47はラッパ状に開く口縁の壺である。端面は上下にわずかに拡張して面を持ち、板の小口による刺突痕をほぼ垂直の縦方向に施している。頸部には2条の沈線が巡る。口縁端部付近は板ナデ後ヨコナデを施し、それ以下は、外部は縦方向のやや粗いハケメ、内面は横及び斜め方向の細かいハケメを施す。48は体部に比べ口縁部が小さい「とっくり」状の壺で、2段の櫛描直線文が巡る。頸部外面は斜め及び横方向のヘラ状工具が当たった痕跡が残る。口縁部外面はヨコナデ、胴部内面は粘土の継ぎ目がナデ消されずに残り、指オサエ痕も残る。49は壺の体部の破片である。最上部及び最下部に櫛描直線文に扇形文を加えた流水文が見られる。上の流水文の下はやや細かなピッチの波状文、その下は櫛描直線文で、その下は半截竹管による斜格子文を施す。内面は不定方向の板ナデ及び指オサエである。50は甕で、口縁は「く」の字状に屈曲し、端部は丸くおさめて終わる。内外面とも斜め方向のハケである。51は底部で壺か甕か判断しがたい。内外面ともハケメであるが、内面はやや粗い目でごく軽く施されている。52は高杯の脚柱部である。摩滅のため器壁の残りは悪く、調整は不明であるが外面は縦方向のハケメ、内面はヘラケズリ後ナデもしくは板ナデである。53は脚部を考えたが、上下逆で口縁部の可能性もある。端部外面は刻み目を巡らせ、外面は縦方向のハケメ、及び横方向のヘラミガキ、内面は横方向のハケメである。

54は壺の口縁である。端部上面に刻みを施し、全体をヨコナデで仕上げている。55は高杯の一部である。外面は縦方向にミガキを施し、内面はナデまたは板ナデである。56は甕の口縁部である。端部は上方につまみ上げている。57は底部の破片である。外部は概ね縦方向のヘラナデもしくはヘラケズリ後ヘラミガキ。内面は摩滅のため調整は不明であるが、ナデで仕上げられている。

58は土師器の甕の口縁である。口縁端部を内側に肥厚する古墳時代前期の布留式の範疇に入るものである。調整は残存している部分ではナデとヨコナデである。何らかの理由で混入したものか。

66は底部で、大きく開く角度から、壺の底部と考えた。外面は主に縦方向のヘラミガキ、内面は摩滅のため不明であるがナデまたはミガキであろう。

SD054出土遺物（59～64）

59はやや大型の壺で、口縁部から頸部にかけての破片である。口縁端部は凹線文を4条巡らし、頸部に櫛描直線文を4段施す。直線文は上下にやや波打っている。内面は左下がりのハケメを施す。60はほぼ完形に復元できる壺で、下膨れの器形である。文様は無く、口縁端部は上下にわずかに拡張してヨコナデを施す。体部は上半全体に縦方向のハケメを施した後、頸部付近を縦方向に、中位を横方向にヘラ

ミガキを施す。底部付近は縦方向にヘラケズリのちヘラミガキである。内面は斜め右下がりのハケメを施す。61も60に似た器形であるが、口縁端部に1条の凹線が巡る。胴部はヘラミガキを施し、一部にハケメを認める。頸部内面には粘土の絞り目が残り、一部にハケメ、指頭痕が残る。62は大型の壺の胴部下半である。最大径付近に2段の櫛描直線文、その下に櫛描波状文を施し、その下は水平に近い斜め方向のハケメがみられる。それ以下は横方向のヘラケズリの後、縦方向のヘラミガキ。底部付近に黒斑がみられる。内面は縦に近い斜め方向の粗いハケメである。また底面には糲痕が残る。63はほぼ完形に復元できる小型の甕である。胴部中央が膨らむ器形である。口縁部は上方につまみ上げ、沈線を1条めぐらした上に左下がりの列点文を施している。外面上半はハケメの単位不明、下半は幅広の単位の縦方向のヘラミガキ、内面は上半に横方向のハケメが残る。64は高杯の一部である。杯部と脚部の境に2条の貼り付け突帯を巡らす。摩滅のため、調整は不明である。時期としては、弥生時代IV様式を中心としている。

P018出土遺物（69）

69は弥生土器の破片である。刺突による列点文がみとめられる。内外面ともナデで仕上げている。

SE024出土遺物（65）

65は大型の壺の口縁である。口縁端部は下側にわずかに拡張され、上下2段に上段は左下がり、下段は右下がりの刺突文を施す。頸部には指頭圧痕文帯をめぐらせる。指頭痕には爪痕が残る。調整は内外面ともハケメ及びヨコナデである。

SE022出土遺物（67・68）

67は底部である。底面は上げ底で外面は指オサエ後ナデ、内面は摩滅のため調整不明である。弥生後期のものか。68は須恵器の杯身である。口縁端部を欠く。古墳時代後期のものと考えるが、何らかの理由でこの遺構に混入したものであろう。

石器（S1～S10）

図化した石器は10点で、いずれも溝（SD052）出土である。

S1はサヌカイト製の石鎌で、長さ18.9mm、幅15.3mm、厚さ3.9mm、重さ0.8gである。S2はサヌカイト製の削器で、長さ51.7mm、幅38.3mm、厚さ10.5mm、重さ22.2gである。S3は緑泥片岩製の石包丁で、長さ99mm、幅45.0mm、厚さ9.5mm、重さ56.5gである。S4は砂岩製の砥石で、長さ7.1cm、幅5.4cm、厚さ2.6cm、重さ126.5gである。表面には数条の溝を残す。S5は砂岩製の砥石で、長さ11.4cm、幅8.9cm、厚さ4.9cm、重さ519.1gである。S6は砂岩製の砥石で、長さ10.8cm、幅8.3cm、厚さ2.2cm、重さ271.4gである。S7は硬質砂岩製の太型蛤刃石斧の欠損品で、長さ9.4cm、幅6.7cm、厚さ5.5cm、重さ485.4gである。石斧製時の敲打痕を残す。研磨方向は一定でない。S8は砂岩製の磨石で、長さ14.6cm、幅7.6cm、厚さ5.5cm、重さ778.2gである。側縁に敲打痕を残している。表裏面は全体的に細かな研磨痕を残すため、砥石を転用したものと理解できる。S9は花崗岩製の石皿で、長さ23.3cm、幅14.0cm、厚さ7.3cm、重さ3100gである。表裏面の一部に、受熱の痕跡を残す。S10は砂岩製の石皿で、長さ20.0cm、幅11.8cm、厚さ6.8cm、重さ1750gである。

6章 室町時代・江戸時代以降の調査

1節 室町時代の遺構

15世紀後半の井戸、溝、土坑、柱穴を検出した。調査地の中央付近に南北方向にはば真っ直ぐに延びる溝(SD031)があり、その西側に井戸(SE022)と土坑、柱穴がある(図版7)。柱穴は列をなすものがあるが、攪乱などと重なり建物としては復元できなかった。

SD031(図版6)

南北方向にはば真っ直ぐに延びる溝で、深さ1.2mを測る。江戸時代の溝(SD030)に東半を切られているが、幅は4～5m以上と推定でき、屋敷地の東辺を区切る掘の一部と推定される。調査では本来の遺構面よりかなり下位で掘削した後に検出したため、底付近がかろうじて残存したにすぎない。

SE022(図版10～13)

上部は漏斗形に、下部は真っ直ぐに掘削された素掘りの井戸で、中程の直径約3m、検出面からの深さ約4mを測る。北側は不整形な土坑(SK034)と重複し、本来の遺構面よりかなり下位まで掘削した後に検出したため、お互いの関係は不明確である。

底から1mほど埋まったところで、底を抜いた瓦質の羽釜2点を逆さまに据え、その中や周囲に土師器の鍋・羽釜・小皿、備前すり鉢、瓦、石臼などの破片を散りばめていた。この状況は、井戸を放棄する際の祭祀行為と考えられるが、他の遺跡ではこのような例はあまりみない。遺物は15世紀後半のものであり、これ以下の埋土からは15世紀前半台の遺物が出土している。

井戸は巨礫混じりの砂礫層を掘削して作られているが、底に達するまで湧水は全くなかった。また、埋土は底付近でもやや枯質のあるシルト質砂層が主体で、長期間にわたって帶水していたような状況ではない。

2節 江戸時代以降の遺構

溝、穴倉、井戸、柱穴などが検出された。溝(SD031)(室町時代)と重複する南北方向の溝(SD030)を境に、西側に井戸(SE024)、穴倉(SK012)、便蒙、柱穴などがある(図版7)。柱穴は1列に並ぶものがあるが、攪乱を考慮しても建物ではなく柵のようなものであろう。

SD030(図版6)

室町時代の溝(SD031)とほぼ同じ位置にあり、幅約4.5m、深さ1.2mを測る。埋土からは幕末～近代の遺物も出土しており、埋没は明治初頭あたりまで下ろう。

SK012(図版6)

東西3.5m、南北3.2mの方形堅穴で深さ約1mである。西側の一角には出入り用のスロープが設けて

いる。SD052と重複していることから、壙土からは少量の陶磁器や鉄釘とともに、多くの弥生土器も出土している。18世紀代の遺構である。

SE024

平瓦を縦横みした井戸で内径0.78m、検出面からの深さ2.6m以上を測る。重機によって断ち割りを行ったが、底に達することはできなかった。1枚の瓦の大きさは24cm×25cm×4.5cmと一般の屋根瓦よりも一回り大きく、焼きは甘い。1周に11枚の瓦を使用し、確認できた深さまで11段を積む。なお、井戸瓦のうち4点を図示する(137～139)。

井戸の掘り方からは近世の磁器片が1片出土したにすぎないが、井戸内からは多量の屋根瓦に混じってプラスチック、ガラス瓶なども出土し、廃絶の時期は戦後あたりまで下ろう。

3節 遺物

SE024出土遺物 (137～139)

SE024からは井戸瓦が4(137～139)点出土している。いずれも型作り成形で、平面形状は方形を呈し、断面形状はやや円弧を描く。外面はヘラ描きのジクザク文を施文し、内面は板ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。近世後半～近代の製品と考えられる。

SK012出土遺物

SK012からは、無釉陶器擂鉢(74)と染付磁器碗(75)が出土している。74は口縁部が上下に拡張して、断面台形状の縁帯を形成し、口縁部内面には凸帯が1条廻る。体部内面には、櫛描きで10条1単位の擂目を施す。色調は明赤褐色を呈する。近世の備前焼擂鉢と考えられる。75は器壁は比較的厚い。外面には淡い呉須で草花文を、底部外面には大きく崩れた「大明年製」銘を施す。肥前系波佐見産のいわゆるくらわんか手碗で、18世紀後半の所産である。

SK020出土遺物

SK020からは、無釉陶器甕(76)、染付磁器湯呑み碗(77)、人形の土製品(78)が出土している。

76は平底で体部はほぼ直立する。底部内面と外面の底部から体部にかけては板ナデ調整を施す。産地は明確ではないが、近世の肥甕の底部と考えられる。77は高台がやや低い輪高台で、体部は直立し、口縁端部はやや尖り気味に收める。外面には青海波と「福寿福」を、また内面には瓔珞文をそれぞれ銅版転写で施文する。顔料は酸化コバルトで、濃い藍色に発色する。明治以降の製品である。78は笈を担った人物を象った人形で、見ざる、言わざる、聞かざるの三相のうち、見ざるを表現している。両型作りで、中央部に貼り合わせ痕が見られる。外面の彩色は剥落するが、白色の顔料のみが一部残る。

SE022出土遺物

SE022からは、大量の遺物が出土しており、種別では土師器、瓦質土器、無釉陶器、施釉陶器、青磁の他、瓦が出土している。

1 土師器

土師器には器種別では皿(79~88)と鍋(89~101)がある。

(1) 皿

皿には、小型のもの(79~85)と比較的大型のもの(86~88)がある。小型は底部がやや上げ底気味で、底部と体部の界が明瞭なもの(79~83・85)と、平底で底部と体部の界が不明瞭なもの(84)とに分類される。79~83・85の器形は全体に大きく歪み、底部を指で押させて、やや上げ底に成形する。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。非クロクロ成形で口縁部内外面には強いヨコナデ調整を加える。体部～底部外面にかけては、指おさえの後、ナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。色調は浅黄橙色からにぶい橙色を呈する。84は底部の器壁は非常に薄い。体部と底部の界は不明瞭で、体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。非クロクロ成形で、口縁部外面に僅かに指オサエ痕が残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。86~88はほぼ同形で、器形は比較的端整で、薄い。平底で体部と底部の界は明瞭で、体部は直線的に斜め上方に延びる。非クロクロ成形で、体部外面は指おさえの後、ナデ調整を加え、指頭圧痕が残る。色調は86・87がにぶい橙色、88が灰白色を呈する。いずれも京都系土師器と考えられ、15世紀代の所産であろう。

(2) 鍋

鍋は退化した断面三角形状の短い鍔を口縁部外面に貼り付けるいわゆる羽釜形(89~95)と、丸底で体部が外方にひらくいわゆる鉄かぶと形(96~101)とに大別される。

羽釜形はいずれもほぼ同形で、丸底で体部は大きく内彎する。口縁部は内傾し、口縁部外面に断面三角形状の退化した鍔を貼り付ける。粘土紐巻上げ成形で、口縁部内外面に強いヨコナデ調整を加える。体部内面にはヘラナデ調整を加え、体部外面は不調整で斜め方向の平行叩き目が残る。いずれも体部外面に煤が附着し、色調は橙色からにぶい橙色を呈する。長谷川分類播磨型IA類・IB類に相当し、15世紀代に比定される。

鉄かぶと形はいずれも丸底で、体部は底部との界で大きく屈曲して、ほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面橢円形状に肥厚する。粘土紐巻上げ成形で、口縁部内外面に強いヨコナデ調整を加える。体部内面にはヨコナデ調整を加え、橢円形状の当て具痕が僅かに残る。体部外面は不調整で、斜め方向の平行叩き目が残る。体部外面には煤が附着し、色調は橙色からにぶい橙色を呈する。長谷川分類鉄かぶと形I類・II類に相当し、15世紀代に比定される。

2 瓦質土器

瓦質土器には羽釜(102~108・130)と火舎(109)がある。

(1) 羽釜

羽釜はいずれも体部が僅かに内彎する。口縁部は僅かに内傾し、口縁部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付ける。粘土紐巻上げ成形で、口縁部外面にはヨコナデ調整を施す。体部外面は横方向・斜め方向のケズリ調整を施す。口縁部～体部内面には横方向の細かいハケ目調整が施される。長谷川分類羽釜II B類・II C類に相当し、15世紀代に比定される。

130の体部はほぼ直立し口縁部は僅かに内傾する。口縁部外面に断面台形状の比較的幅の広い鍔を貼り付ける。体部外面には横方向および縦方向のケズリ調整、内面の口縁部～体部は横方向

のハケ目調整を施す。色調は黒色を呈する。長谷川分類羽釜II C類に相当し、15世紀代に比定できる。

(2) 火舎

109の体部はほぼ直立し、口縁部は上面に水平に端面をもつ。口縁部外面には斜格子文をスタンプして施文する。さらに施文部の直下に、細い貼り付け凸帯を1条巡らせる。色調は灰色を呈する。

3 無釉陶器

無釉陶器には擂鉢(111～113・131)と壺(114)がある。

(1) 擂鉢

111の体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部は上下に拡張して断面三角形状の縁帶を形成する。口縁部の一部を捨って、片口を作り出す。体部内面には櫛描きの擂目を施文する。色調はにぶい赤褐色を呈する。112・113も同様の形態の擂鉢である。112は擂目が5条1単位で、口縁部外面には胡麻状に灰被りがある。3点とも備前焼IV期相当で、15世紀代に比定できる。

131の口縁部は上下に拡張して縁帶を作る。口縁端部は上方につまみ上げる。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部内外面に若干胡麻状の灰被りを認める。色調は暗灰黄色を呈し、備前焼IV期相当で15世紀代に比定できる。

(2) 壺

114は平底で体部は大きく内彎する。頸部は短く直立し、口縁部は玉縁状に肥厚する。粘土紐巻上げ成形で口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施す。体部外面の下半には指頭圧痕が存在し、備前焼としては調整が粗い。体部上面には僅かに灰被りが見られ、色調はにぶい赤褐色を呈する。備前焼III～IV期相当で、14～15世紀代に比定される。

4 施釉陶器

施釉陶器には椀(107)がある。

107は高台裏を蛇の目高台風に浅く削りだす。底部外面には糸切痕が残る。内面には灰釉を施釉し、オリーブ灰色に発色する。外面は露胎である。瀬戸・美濃系の灰釉平椀であろう。

5 青磁

青磁には碗(115)がある。

115は底部の器壁は比較的厚く、高台は比較的高い輪高台である。内外面とも青磁釉を施釉し、オリーブ灰色に発色する。施釉部位は高台畳付きから高台裏にまで及ぶが、高台裏の釉は輪状にかかる。龍泉窯系青磁碗で15世紀代の所産である。

6 瓦

132は軒平瓦である。型作り成形で、瓦当面には唐草文を施す。内外面とも板ナデ調整を施す。焼成は堅緻である。

SK030出土遺物

SK030からは土師器皿(122)・鍋(123)・羽釜(124)、無釉陶器擂鉢(125)、平瓦片(126)が出土している。

122は非ロクロ成形である。平底で体部は下位で屈曲し、口縁部は丸みをもつ。口縁部～体部内外面には強いヨコナデ調整を施す。色調は明赤褐色を呈する。123の体部は僅かに内彎し、口縁部は大きく「く」の字状に屈曲し外方にひらく。体部外面は不調整で、横方向の平行叩き目が残る。長谷川分類播丹型V類相当で、15世紀代に比定される。124の口縁部は内傾し、口縁部外面に断面台形状の退化した鍔がつく。体部外面は不調整で、横方向の平行叩き目が残る。長谷川分類播磨型IC類に相当し、15世紀代に比定される。125は口縁部が上下に肥厚して縁帯を形成する。内外面とも回転ナデ調整を施し、体部内面には櫛状工具で5条1単位の擂目を施文する。口縁部外面には胡麻状に灰被りが見られ、色調は赤褐色を呈する。備前焼IV期相当で15世紀代の所産である。126は平瓦片である。器面には板ナデ調整を施し、色調は灰白色を呈する。

SK034出土遺物

SK034からは土師器羽釜(127)と無釉陶器甕(128)が出土している。

127の口縁部は僅かに内傾し、口縁部外面に断面台形状の鍔を貼り付ける。体部外面には横方向のヘラ削り調整、口縁部内面には横方向のハケ目調整が施される。色調は橙色を呈する。長谷川分類羽釜II C類に相当し、15世紀代に比定できる。128の口縁部は断面橢円形状に肥厚し、内外面とも胡麻状に灰被りがある。焼成は非常に堅緻で、色調は赤褐色を呈する。備前焼IV期相当で、15世紀代に比定される。

SK053出土遺物

129は非ロクロ成形の土師器皿である。平底で体部と底部の界は不明瞭で、体部は緩やかに斜め上方に延びる。体部～底部外面は指おさえの後、ナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。

SE052出土遺物

133・134はいずれも非ロクロ成形の土師器皿である。全体に器形は大きく歪む。体部と底部の界は明瞭で、体部は直線的に斜め上方に延びる。体部～底部外面はナデ調整の後、指おさえを加え、指頭圧痕が残る。内面の底部と体部の界には強い指ナデ調整を加え、凹線状に窪む。色調は橙色を呈する。

包含層中出土遺物

包含層中からは土師器椀(135)、瓦(136)、寛永通宝(M2)、鉄製品(M3)などが出土している。

135は土師器椀である。高台は「ハ」の字状にひらく比較的高い輪高台で内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。136は軒平瓦で、瓦当に唐草文を施文する。瓦当面に灰釉が全面に附着する。

攪乱土中出土遺物

攪乱土中からは無釉陶器植木鉢(137)・蓋(138)の他、大觀通宝、鉄釘などが出土している。137は頸部は直線的に外上方に延び、口縁部は水平に外方に折り曲げる。内面にはロクロ目が明瞭に認められる。

138は型作り成形の蓋である。内面には布目痕が認められる。上面に手づくね成形の犬を貼り付ける。色調は黄橙色を呈する。

石器

S11は花崗岩製の石臼で、長さ17.6cm、幅16.2cm、厚さ10.4cm、重さ4380gである。

7章　まとめ

楠・荒田町遺跡は、神戸市兵庫区荒田町を中心に南北約1.2km、東西約0.8km、に広がる縄文時代～中世の複合遺跡で、昭和53年以降、地下鉄建設、神戸大学医学部附属病院の改築、マンション建設などに伴って20カ所以上の発掘調査を実施している。中でも、平安時代末には『福原京』あるいは平氏一族の邸宅の存在を推定しており、神戸大学附属病院地点や、調査地から北約1.7kmの祇園遺跡では、これらに関連すると考えられる遺構の一部を調査している。

弥生時代では六甲山南麓の拠点集落の一つと位置づけ、中期を中心とする堅穴住居址や掘立柱建物、方形周溝墓などを検出している。これまでの調査では、これらの遺構は、標高15m付近に点在して検出している。

今回の調査地はこれよりも5mほど標高が高く、明治初頭の地目は畠地であった。今回検出した弥生時代に属する溝(SD052)は地形からみて灌漑用水路とは考えられず、集落の東辺を区画する溝と考えるのが妥当であろう。あるいは西側に広がる集落を巡る環濠となる可能性も考慮に入れておきたい。ただし、周辺で検出できた方形周溝墓の周溝の一部である可能性も否定できず、その性格の判断は、今後の周辺の調査を待ちたい。

室町時代の遺構群は、神戸大学附属病院内地点での調査例を除いて、ほとんど確認できなかった。内部に井戸(SE022)や柱穴を伴う南北方向の深い溝(SD031)は、屋敷地の東辺を区画するものと考えられ、繁栄の最中にあった兵庫津の動向とも深い関係があったことが推定できる。また、井戸(SE022)から出土した土器はこの時代の一括資料として今後の研究に不可欠なものとなろう。

また、溝(SD030)は2回ほどの作り替えを行いながら、幕末か明治の初めころまではほぼ同じ場所に設け、その内側も屋敷地として、穴倉などを設けていたのであろう。

今回の調査は、限られた範囲内であったが、弥生時代、室町時代、江戸時代の各種遺構が検出でき、大きな成果があったといえる。周辺には阪神・淡路大震災の被害を免れた低層住宅が多数あり、これらの地下にも遺構が広がっていると容易に予想でき、今後、周辺の開発には十分な注意が必要である。

報 告 書 抄 錄

ふりがな	くすのき・あらたちょういせき 3							
書名	楠・荒田町遺跡 III							
副書名	財団法人兵庫県健康財団新施設建設に伴う発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第338冊							
編著者名	藤田 淳・別府洋二・菱田淳子・岡田章一・山本誠							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 加古郡播磨町大中500 Tel 079-437-5589							
発行年月日	西暦2008年(平成20年) 3月21日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
くすのき・あらたちょう 楠・荒田町遺跡 014023	ひょうごけんこうべし ひょうごく あらたちょう う2ちょう め 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目	28105	990141 990226	34度40分5 9秒	135度10分 10秒	確認調査 19990426 ~ 19990427 本発掘調査 19991019 ~ 19991227	86m ² 942m ²	財団法人兵庫県健康財団新施設建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
楠・荒田町遺跡	集落跡	弥生時代 室町時代 江戸時代	溝・井戸・土坑・柱穴	弥生土器・土師器・瓦質土器・無釉陶器・施釉陶器・青磁・石器	<ul style="list-style-type: none"> ・弥生時代の溝は、環濠の一部の可能性がある。 ・室町時代以降の遺構は、当時繁栄していた兵庫津遺跡との関連が高い。 			

中・近世遺物観察表

報告No.	実測No.	出土場所	種別	器種	口径	器高	底径	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
70	137	2区 SE024	瓦	井戸瓦	長25.75	厚 4.3	幅 24.0	平面形状は方形。やや円弧を描く形。	外面 ジグザク文施文。内面 板ナデ調整	色調 灰色。井戸瓦。近代。
71	136	2区 SE024	瓦	井戸瓦	長 25.4	厚4.15	幅 24.0	平面形状は方形。やや円弧を描く形。	外面 ジグザク文施文。内面 板ナデ調整	色調 灰色。井戸瓦。近代。
72	138	2区 SE024	瓦	井戸瓦	長 25.5	厚 4.1	幅24.05	平面形状は方形。やや円弧を描く形。	外面 ジグザク文施文。内面 板ナデ調整	色調 灰色。井戸瓦。近代。
73	139	2区 SE024	瓦	井戸瓦	長 25.1	厚 4.4	幅23.95	平面形状は方形。やや円弧を描く形。	外面 ジグザク文施文。内面 板ナデ調整	色調 灰色。井戸瓦。近代。
74	65	2区 SK012	無釉陶器	擂鉢	(31.30)	(4.10)		口縁部は上下に拡張して、断面台形状の縁帯を形成する。口縁部内面 凸帯が1条巡る。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。 口縁部外面に沈線2条。体部内面に櫛描きで10条1單位の播目施文。	色調 明赤褐色。備前系?。近世。
75	78	2区 SK012	染付磁器	碗		(2.40)	3.80	器壁は比較的の厚い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	外面 淡い呂須で草花文施文。底部外表面 極端にくすぐれた「大明年製」銘。	肥前系 波佐見産 くらわんか手碗。18世紀後半。
76	91	2区 SK020	無釉陶器	甕		(15.20)	40.80	平底。体部はほぼ直立。	体部外表面 板ナデ調整。底部外表面 ナデ調整。体部内面 ナデ調整。底部内面 板ナデ調整。	胎土中に砂粒を多く含む。近世の製品。肥鹽か?。
77	87	2区 SK020	染付磁器	湯呑み碗	(6.10)	(6.85)	(5.50)	高台は比較的の低い輪高台。体部は直立。口縁端部はやや尖り気味。	外面 青海波と「福壽福」を銅版転写で施文。内面 裸窓文を銅版転写で施文。酸化コバルトの発色は濃い藍色。	近代の製品
78	74	2区 SK020	土製品	人形	長 3.3	幅 2.15	厚 1.6	両型作り。中央部に貼り合わせ痕が見られる。	外面の彩色は剥落するが、白色の顔料のみが一部残る。	笈を背負った人物。見ざる、言わざる、聞かざるの見ざるを表現。
79	101	2区 SE022	土師器	皿	8.20	1.80		器形は全体に歪む。器壁は比較的の薄い。平底。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外側の体部～底部 指おさえの後、ナデ調整。内側の体部～底部 ヨコナデ調整。	色調 浅黄橙色。
80	109	2区 SE022南半	土師器	皿	8.40	1.65		器形は全体に大きく歪む。底部を指で押さえでヘソ皿状に形成。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。	体部内面 ヨコナデ調整。外側の体部～底部 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。底部内面 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。	色調 浅黄橙色。15世紀代
81	95	2区 SE022北半	土師器	皿	8.05	1.60	3.65	器形は全体にやや歪む。平底。やや上げ底気味。体部と底部の界は明瞭で、体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外側の体部～底部 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部～底部 内面 ヨコナデ調整。	色調 にぶい橙色。
82	102	2区 SE022北半	土師器	皿	8.80	1.80		器形は全体に大きく歪む。器壁は比較的の厚い。平底。若干上げ底気味。体部は部分的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外側の体部～底部 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部～底部 内面 ヨコナデ調整。指頭圧痕が残る。	色調 にぶい橙色。
83	108	2区 SE022北半	土師器	皿	9.80	2.65		器形は全体に大きく歪む。平底。若干上げ底気味。体部は部分的に中位で屈曲し、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外側の体部～底部 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が明瞭に残る。底部 内面 ナデ調整。	色調 にぶい黄橙色。15世紀代。
84	92	2区 SE022北半	土師器	皿	(10.40)	2.05		器形は全体に著しく歪む。底部の器壁は非常に薄い。底部と体部の界は不明瞭で、体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外側の体部～底部 指おさえの後、ナデ調整。口縁部外面に指頭圧痕が残る。体部～底部内面 ヨコナデの後、仕上げナデ調整。	色調 にぶい黄橙色。
85	99	2区 SE022	土師器	皿	10.20	(2.45)		器形は全体に大きく歪む。器壁は比較的の薄い。平底。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	器面は摩滅が著しい。口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外側の体部～底部 内面 ヨコナデ調整。	色調 灰黄褐色。
86	97	2区 SE022	土師器	皿	(15.15)	2.35	(7.70)	器形は比較的の端整。器壁は比較的の薄い。平底。底部と体部の界は明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部側面に僅かに端面が見られる。	器面は比較的の摩滅する。口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外側の体部～底部 内面 指おさえの後、ナデ調整。外側の体部～底部 内面 指頭圧痕が認められる。底部 内面 ナデ調整。内側の体部～底部 ナデ調整。	色調 にぶい黄橙色。京都系土師器皿。15世紀代。
87	96	2区 SE022 Po18・Po22	土師器	皿	(14.20)	2.30		器壁は比較的の薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、中位で屈曲。大きく外方にひらく。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外側の体部～底部 指おさえの後、ナデ調整。僅かに指頭圧痕が見られる。体部 内面 ヨコナデ調整。底部 内面 ナデ調整。	色調 にぶい橙色。京都系土師器皿。
88	94	2区 SE022	土師器	皿	15.2	3.00		器形は全体に端整。器壁は比較的の薄い。平底。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。	器面は摩滅する。口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外側の体部～底部 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。底部 内面 ナデ調整。外側の体部～底部 内面 指おさえの後、ナデ調整。	色調 灰白色。京都系土師器皿。15世紀代。
88	94	2区 SE022	土師器	皿	15.2	3.00		器形は全体に端整。器壁は比較的の薄い。平底。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。	器面は摩滅する。口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外側の体部～底部 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。底部 内面 ナデ調整。外側の体部～底部 内面 指おさえの後、ナデ調整。	色調 灰白色。京都系土師器皿。15世紀代。
89	131	2区 SE022 溝の基底部分	土師器	鍋	22.30	(5.40)		口縁部は大きく内傾する。口縁部外面に断面三角形状の退化した鍔を貼り付ける。	粘土紐巻上げ成形。口縁部内外面 強いヨコナデ調整。内側の口縁部～体部 板ナデ調整。体部外面 不調整。斜め方向の平行叩き目が残る。	体部外面 煙附着。色調 にぶい橙色。長谷川分類 播磨型 I B類。15世紀代。
90	123	2区 SE022	土師器	鍋	21.40	(5.40)		体部内縫。口縁部内傾。口縁端部は外上方にまみ上げる。口縁部外面に断面三角形状の退化した鍔を貼り付ける。	粘土紐巻上げ成形。口縁部内外面 強いヨコナデ調整。内側の口縁部～体部 板ナデ調整。体部外面 不調整。斜め方向の平行叩き目が残る。	外面に煙附着。長谷川分類 播磨型 I A類。15世紀代。
91	134	2区 SE022	土師器	鍋	(25.00)	(8.05)		体部は内巻。口縁部は内傾。口縁部外面に断面三角形状の退化した鍔を貼り付ける。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外側の体部～底部 指おさえの後、ナデ調整。	体部外面に煙附着。色調 にぶい橙色。長谷川分類 播磨型 I B類。15世紀代。
92	124	2区 SE022	土師器	鍋	20.70	(11.50)	(25.90)	丸底。体部は大きく内巻する。口縁部は内傾。口縁部外面に断面三角形状の退化した鍔を貼り付ける。	粘土紐巻上げ成形。口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外側の体部～底部 指おさえの後、ナデ調整。外側の体部～底部 内面 板ナデ調整。	外面 煙附着。色調 橙色。長谷川分類 播磨型 I A類。15世紀代。

報告No.	実測No.	出土場所	種別	器種	口径	器高	底径	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
93	132	2区 SE022	土師器	鍋	21.45	(12.20)		丸底。体部は大きく内彎する。口縁部は内傾。口縁部外面に断面三角形状の退化した鈎を貼り付ける。	粘土紐巻上げ成形。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面ナデ調整。体部外面不調整。斜め方向の平行叩き目が残る。口縁部外面に沈線1条。鈎の下方に沈線状の段が見られる。	体部外面に煤附着。色調 橙色。長谷川分類 撥磨型 I B類。15世紀代。
94	135	2区 SE022	土師器	鍋	(20.50)	(10.80)		体部は大きく内彎する。口縁部は内傾。口縁部外面に断面三角形状の退化した鈎を貼り付ける。	口縁部外面 強いヨコナデ調整。体部外面 不調整。斜め方向の平行叩き目が残る。体部内面 ナデ調整。	体部外面の全面に煤附着。色調 褐灰色。長谷川分類 撥磨型 I B類。15世紀代。
95	127	2区 SD054・SE022	土師器	鍋	22.90	(12.80)		丸底。体部は大きく内彎する。口縁部は大きく内傾。口縁部外面に断面台形状の退化した鈎を貼り付ける。	粘土紐巻上げ成形。口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内面ナデおよび板ナデ調整。体部外面 不調整。斜め方向の平行叩き目が残る	口縁部～体部外面 煤附着。色調 にぶい橙色。長谷川分類 撥磨型 II類。15世紀代。
96	129	2区 SE022	土師器	鍋	29.10	11.50		丸底。体部は体部と底部の界で大きく屈曲して、ほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面椭円形状に肥厚する。	粘土紐巻上げ成形。口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内面 ヨコナデ調整。横円形状の当具痕が僅かに残る。体部外面 不調整。斜め方向の平行叩き目が残る。	体部外面に煤附着。色調 橙色。長谷川分類 鉄かぶと形 II類。15世紀代。
97	126	2区 SE022	土師器	鍋	30.90	11.90		丸底。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は内側に玉縁状に肥厚する。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。内面に凹部をもつ。体部内面上方 ナデ調整。体部内面下方 橫方向の細かいハケ目調整。同心円状の叩き目が僅かに残る。体部外面 不調整。斜め方向の平行叩き目が残る。	外面 煤附着。色調 橙色。長谷川分類 鉄かぶと形 I類。15世紀代。
98	128	2区 SE022 溝の基底部部分	土師器	鍋	(29.40)	(8.85)		体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。	粘土紐巻上げ成形。口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内面 ヨコナデ調整。横円形状の当具痕が僅かに残る。体部外面 不調整。斜め方向の平行叩き目が残る。	色調 橙色。長谷川分類 鉄かぶと形 II類。15世紀代。
99	133	2区 SE022	土師器	鍋	28.40	11.50		丸底。体部と底部の界は不明瞭で、体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面椭円形状に肥厚する。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部一部外面 不調整。斜め方向の平行叩き目が残る。体部～底部内面 ナデ調整。	外面に煤附着。色調 にぶい橙色。長谷川分類 鉄かぶと形 II類。15世紀代。
100	130	2区 SE022	土師器	鍋	(30.20)	(11.45)		平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面台形状に肥厚する。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内面 ナデ調整。同心円状の叩き目が僅かに残る。体部外面 不調整。斜め方向の平行叩き目が残る。	色調 橙色。長谷川分類 鉄かぶと形 III類。15世紀代。
101	121	2区 SE022	土師器	鍋	26.00	(5.40)		器面は剥離が著しい。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は断面椭円形状に僅かに肥厚する。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内面 板ナデ調整。体部外面 不調整。斜め方向の平行叩き目が残る。	色調 にぶい橙色。長谷川分類 鉄かぶと形 III類。15世紀代。
102	98	2区 SE022	瓦質土器	羽釜	(21.90)	(6.40)	(27.90)	体部は僅かに内彎。口縁部僅かに内傾。口縁部外面に断面台形状の比較的幅の広い鈎を貼り付ける。	器面はやや摩滅する。体部内面～口縁部外面 ヨコナデ調整。口縁部外面に凹線3条。体部外面 橫方向のヘラケズリ調整。	色調 暗灰黄色。
103	119	2区 SE022 Po42	瓦質土器	羽釜	33.45	(20.80)		体部は僅かに内彎する。口縁部上面に水平に端面をもつ。口縁部外面に断面台形状の幅の広い鈎をもつ。	口縁部外面 ヨコナデ調整。体部外面上半 橫方向のケズリ調整。体部外面下半 斜め方向のケズリ調整。口縁部～体部内面 橫方向の細かいハケ目調整。	色調 黄灰色。
104	122	2区 SE022	瓦質土器	羽釜	22.30	15.40		体部は大きく内彎。口縁部内傾。口縁部外面に断面台形状の幅の広い鈎を貼り付ける。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。口縁部外面に凹線が3条ある。体部外面 ヘラケズリ調整。体部内面 細かいハケ目調整の後、ナデ調整。	色調 黒色。
105	93	2区 SE022	瓦質土器	羽釜	(25.70)	(17.00)	(33.30)	体部はやや内彎気味。口縁部外面に断面台形状の比較的幅の広い鈎を貼り付ける。	口縁部内外面 比較的強いヨコナデ調整。口縁部外面 橫方向のヘラケズリ調整。体部外面上位 橫方向のヘラケズリ調整。体部外下位 斜め方向のヘラケズリ調整。指押さえの後、ナデ調整。	色調 暗灰色。
106	120	2区 SE022	瓦質土器	羽釜	20.40	(12.30)		体部は僅かに内彎。口縁部も僅かに内傾する。口縁部外面に断面台形状の比較的幅の広い鈎を貼り付ける。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面 橫方向のヘラケズリか？（煤が附着しているため、不明瞭）。体部内面 橫斜め方向のナデ調整。口縁部外面に凹線2条。	体部外面に煤が多量に附着。色調 褐灰色。
107	100	2区 SE022 Po22	瓦質土器	羽釜	(24.30)	(12.95)	(31.70)	体部～口縁部は大きく内彎する。口縁部外面に凹線3条。口縁部外面に比較的幅の広い鈎を貼り付ける。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。体部外面上位 橫方向のヘラケズリ調整。体部外下位 斜め方向のヘラケズリ調整。口縁部内面 橫斜め方向のハケ目調整。体部内面 橫方向のナデ調整。	外面全面に煤附着。色調 黑色。
108	125	2区 SE022	瓦質土器	羽釜	(26.60)	(15.10)	(34.20)	体部内彎。口縁部 内傾。口縁部外面に断面台形状の幅の広い鈎を貼り付ける。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。口縁部外面 凹線3条。体部外面上方 橫方向のヘラケズリ調整。体部外面下方 斜め絶縁方向のヘラケズリ調整。体部内面 ナデ調整。	色調 黑色。
109	105	2区 SE022	瓦質土器	火舎		(5.45)		体部はほぼ直立。口縁部は上面に水平に端面をもつ。	口縁部外面に□内に斜め格子文帯をスタンプして施文。施文部の直下に、細い貼り付け凸帯を1条廻らせる。	色調 灰色。
110	107	2区 SE022北半	施釉陶器	椀		(1.80)	5.00	高台裏を蛇の目高台風に浅く削りだす。	内外面ともナデ調整。底部外面は ヘラケズリ調整。糸切痕が残る。内面 灰釉施釉。オリーブ灰色に発色。外面 露胎。	瀬戸・美濃系灰釉平椀。
111	118	2区 SE022南半	無釉陶器	擂鉢		(5.20)		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張して断面三角形状の縁帯を形成する。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ナデ調整。口縁部の一部を捻って片口を作りだす。体部内面 榻状工具で擂目施文。	色調 にぶい赤褐色。備前焼IV期。15世紀代。
112	115	2区 SE022 Po32	無釉陶器	擂鉢				体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ナデ調整。体部内面 榻状工具で5条1単位の擂目を施文した後、斜め横方向の擂目を施文。	外面 胡麻状に灰被り。色調 にぶい赤褐色。備前焼IV期。15世紀代。
113	106	2区 SE022	無釉陶器	擂鉢	(29.80)	(5.00)		口縁部は上下に拡張して、断面三角形状の縁帯を形成する。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。口縁部内面に櫛状工具で、擂目を施文。	色調 にぶい赤褐色。備前焼IV期。15世紀代。

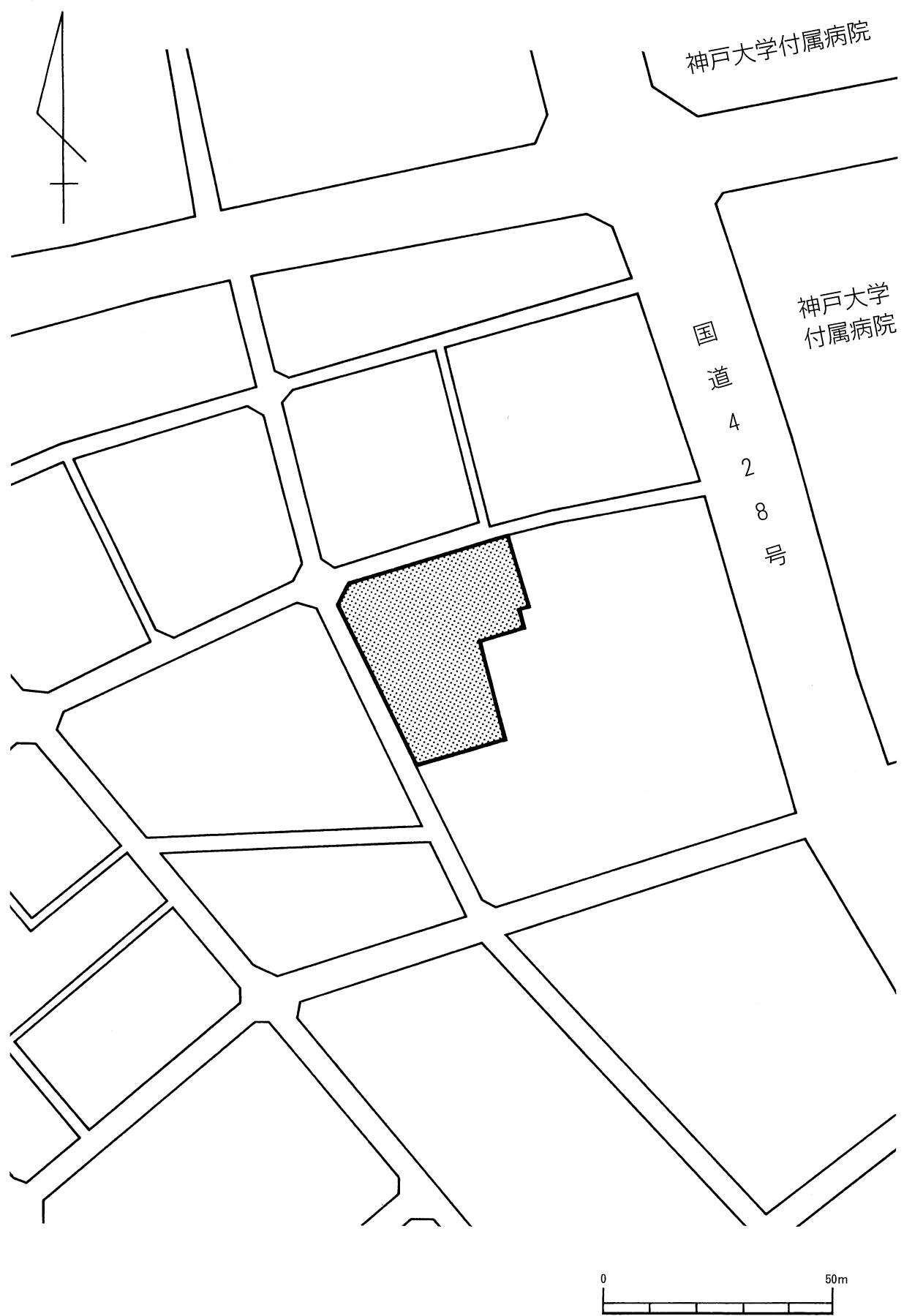
報告No.	実測No.	出土場所	種別	器種	口径	器高	底径	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
114	104	2区 SE022	無釉陶器	壺	(9.50)	17.50	(11.30)	平底。体部は大きく内彎する。頸部は短く直立。口縁部は玉縁状に肥厚する。	粘土紐巻上げ成形。口縁部内外面強い回転ナデ調整。体部内外面回転ナデ調整の後、多方向のナデ調整。底部外面不調整。外面の体部下半には指頭圧痕が明瞭に認められる。備前焼としては調整が粗い。	体部上面に僅かに胡麻状に灰被り。色調にぶい赤褐色。備前焼IV～V期。14～15世紀代。
115	103	2区 SE022	青磁	碗		3.50	(6.50)	底部の器壁は比較的厚い。高台は比較的高い輪高台。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	内外面とも青磁釉施釉。オリーブ施釉部位は高台畳付から高台裏にまでおよぶ。高台裏中央の袖はかきとる。	龍泉窯系青磁碗。15世紀代。
116	114	2区 SE022 K3	瓦	平瓦	長(11.3)	厚 2.2	幅(11.0)		縦方向および横方向のヘラケズリ調整。	色調 灰黄色。
117	117	2区 SE022	瓦	平瓦	長 (6.4)	厚 (1.5)	幅 (7.7)	型作り成形。	外面 格子状文施文。内面 粗いハケ目調整。	外面 胡麻状に灰被り。色調 灰色。
118	113	2区 SE022 K3	瓦	平瓦	長 (7.5)	厚 2.3	幅 (6.2)		ナデ調整・板ナデ調整。	色調 黄灰色。
119	111	2区 SE022 K1	瓦	丸瓦	長(22.45)	厚 2.4	幅(13.75)		外面 板ナデ調整。内面 板ナデ調整。布目圧痕が認められる。	色調 灰色。
120	110	2区 SE022 K1	瓦	平瓦	長(9.15)	厚 1.9	幅(13.7)		外面 板ナデ調整。内面 板ナデ調整。布目圧痕が認められる。	色調 黒褐色
121	84	2区 SE022	瓦	軒平瓦	長(8.35)	4.20	厚 (1.6)	焼瓦。瓦当面に唐草文施文。	内外面とも板ナデ調整。	色調 暗灰色。
122	83	2区 SK030	土師器	皿	(10.70)	(1.90)		非クロロ土師器。平底。体部は下位で屈曲。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部～体部外面 強いヨコナデ調整。底部内外面 ヨコナデ調整。	色調 明赤褐色。
123	76	2区 SK030	土師器	鍋	(22.80)	(5.90)		体部は僅かに内彎。口縁部は大きく「く」の字状に屈曲。外方にひらく。	口縁部外面 強いヨコナデ調整。体部内面 ヨコナデ調整。体部外面 不調整。横方向の平行叩き目が残る。	外面に煤附着。長谷川分類 播丹型類。
124	75	2区 SK032	土師器	鍋	(19.60)	(5.70)		口縁部は内傾。口縁部外面に断面台形状の退化した低い鈎を貼り付ける。	口縁部外面 強いヨコナデ調整。体部内面 斜め横方向のハケ目調整。体部外面 不調整。横方向の平行叩き目が残る。	体部外面 煤附着。色調にぶい褐色。長谷川分類 播磨型類。
125	90	2区 SK030	無釉陶器	擂鉢				体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に肥厚。縁帯を形成する。口縁部の一部を捻って片口を作りだす。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。体部内面に輪状工具で5条1単位の擂目施文。	焼成は非常に堅緻。口縁部内外面胡麻状に灰被り。色調 暗赤灰色。備前焼IV期。15世紀代。
126	89	2区 SK030	瓦	平瓦	長(17.45)	厚 2.2	幅(12.15)		器面は摩滅。板ナデ調整。	色調 灰白色。
127	80	2区 SK034	土師器	羽釜	(28.70)	(6.60)		口縁部は僅かに内傾する。口縁部外面に断面台形状の鈎を貼り付ける。	口縁部外面 強いヨコナデ調整。体部外面 横方向のヘラケズリ調整。口縁部内面 横方向のハケ目調整。	色調 橙色。
128	88	2区 SK034	無釉陶器	甕		(7.00)		口縁部は断面橈円形状に肥厚。	内外面とも回転ナデ調整。内外面とも胡麻状に灰被り。	焼成は非常に堅緻。色調 暗赤褐色。備前焼IV期。15世紀代。
129	85	2区 SK053	土師器	皿	(8.20)	(1.80)		平底。体部と底部の界は不明瞭で、体部は緩やかに斜め上方に延びる。	口縁部外面 強いヨコナデ調整。体部～底部外面 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部～底部内面 ヨコナデ調整。	色調 にぶい黄橙色。
130	66	2区 SE022	瓦質土器	羽釜	(24.80)	(8.20)		体部はほぼ直立。口縁部は僅かに内傾する。口縁部外面に断面台形状の比較的幅の広い鈎を貼り付ける。	口縁部外面 ヨコナデ調整。体部外面 横方向および縦方向のケズリ調整。内面の口縁部～体部 横方向のハケ目調整。	色調 黒色。
131	63	2区 SE022	無釉陶器	擂鉢	(29.40)	(6.30)		口縁部は上下に拡張して、縁帯を形成する。口縁端部は上方につまみ上げる。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 指おさえの後、回転ナデ調整。指頭圧痕が見られる。体部内面 回転ナデ調整。	口縁部内外面 若干胡麻状に灰被り。色調 暗灰褐色。備前焼IV期。15世紀代。
132	67	2区 SE022	瓦	軒平瓦	長(10.0)	(4.15)	厚(1.8)	型作り成形。瓦当面 唐草文。	内外面とも板ナデ調整。	焼成は堅緻。唐草文瓦。
133	27	2区 SE052	土師器	皿	7.75	1.45	4.40	全体に器形は歪む。非クロロ成形。平底。体部と底部の界は明瞭で、体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。体部～底部外面 ナデ調整の後、指おさえ。内面の底部と体部の界 強い指ナデ調整。凹線状に窪む。	色調 浅黄橙色。
134	26	2区 SE052	土師器	皿	7.45	(1.55)		全体に器形は歪む。非クロロ成形。平底。体部と底部の界は明瞭で、体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。体部～底部外面 ナデ調整の後、指おさえ。指頭圧痕が残る。内面の底部と体部の界 指ナデ調整。凹部が認められる	色調 橙色。
135	81	No2溝の検出面まで	土師器	鉢or碗?		(2.65)	(11.40)	高台は「ハ」の字状にひらく、比較的細く高い貼り付け高台。	内外面とも回転ナデ調整。	色調 橙色。
136	86	No2溝の検出面まで	瓦	軒平瓦	(2.20)	5.50		瓦当面に唐草文施文。	瓦当面に灰釉が全面に附着。	唐草文軒平瓦。
137	79	1区 暗褐色土	無釉陶器	鉢or植木鉢	(13.20)	(7.40)		頸部は直線的に外上方に延びる。口縁部は水平に外方に折り曲げる。	内外面とも回転ナデ調整。内面にロクロ目跡が明瞭に認められる。	色調 灰色。
138	82	1区 暗褐色土	無釉陶器	蓋	(10.50)	3.85		型作り成形。形態は山笠形。	形作りのため、内面に布目痕が残る。上面に手づくね成形の犬(?)を貼り付ける。口縁部外面に指頭痕。	色調 にぶい黄橙色。

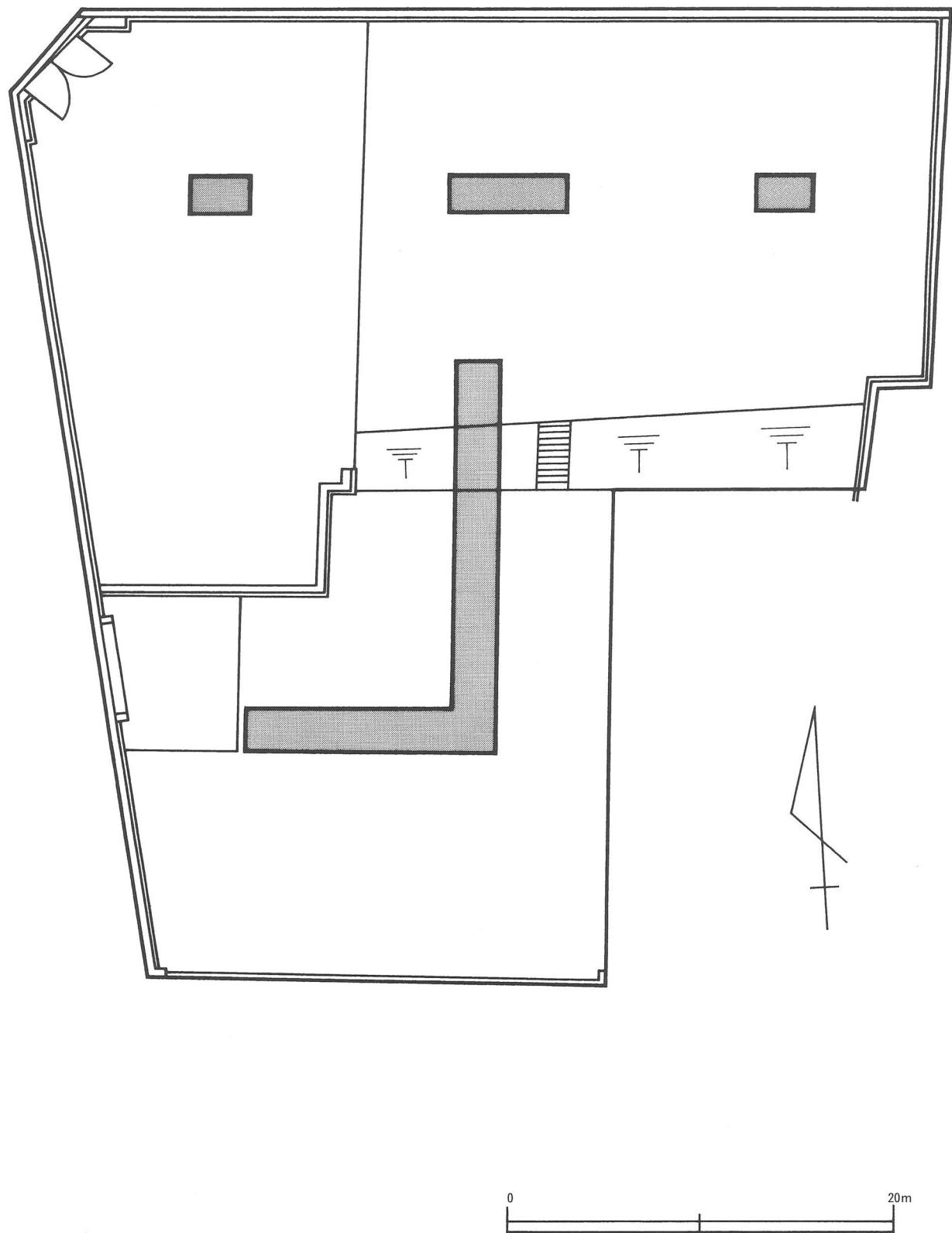
図版



周辺の遺跡

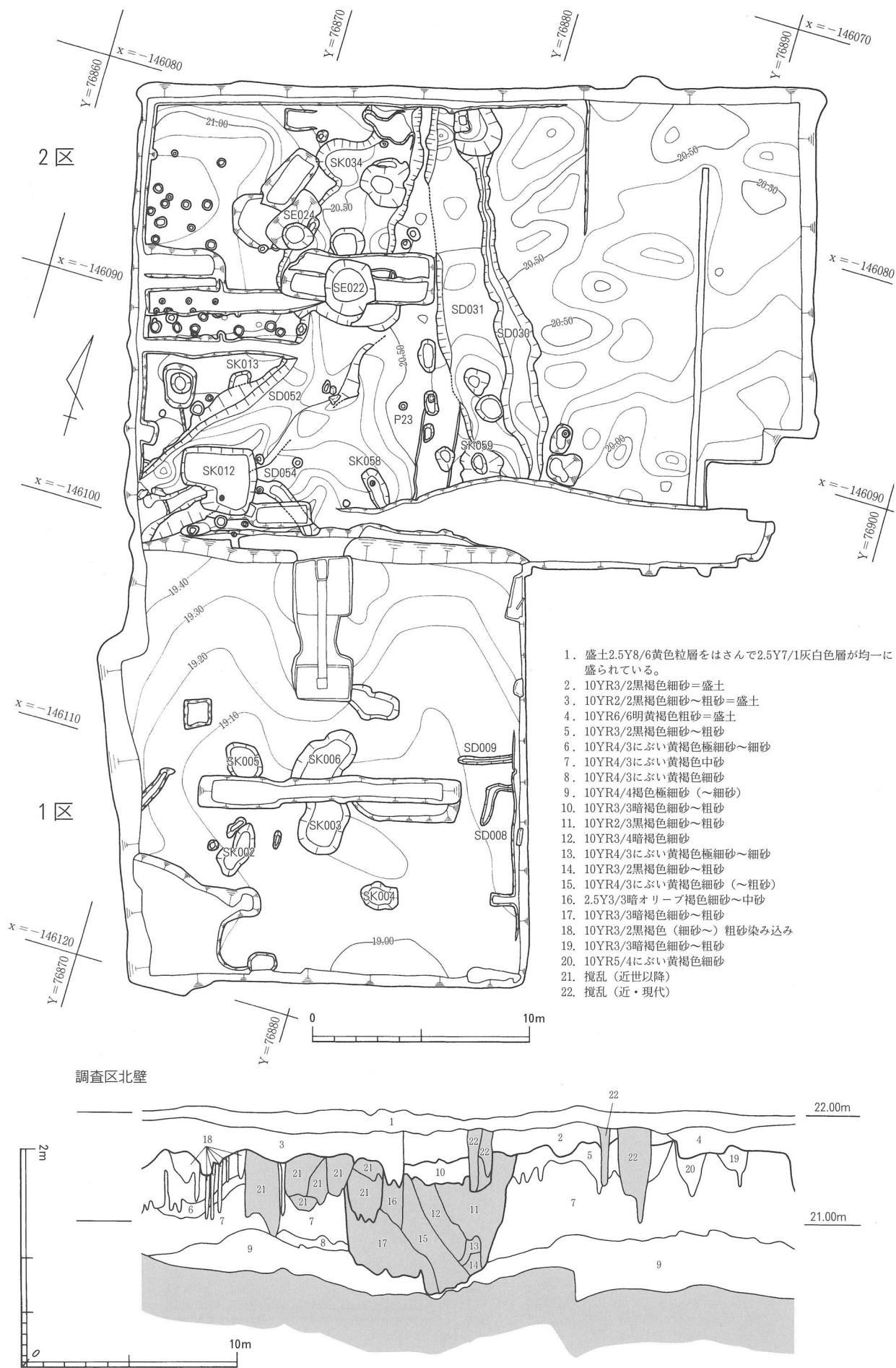
図版 2



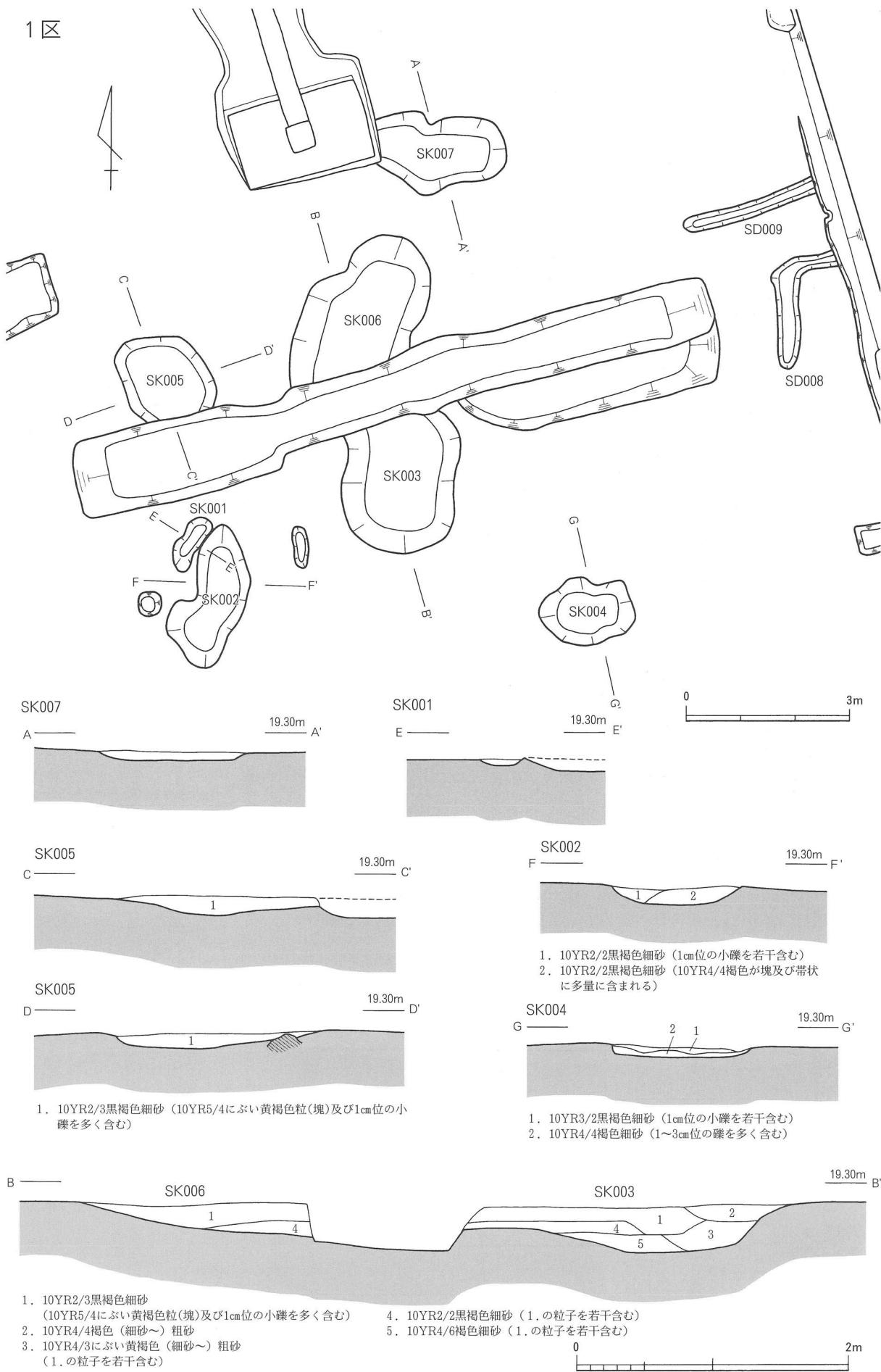


確認調査位置

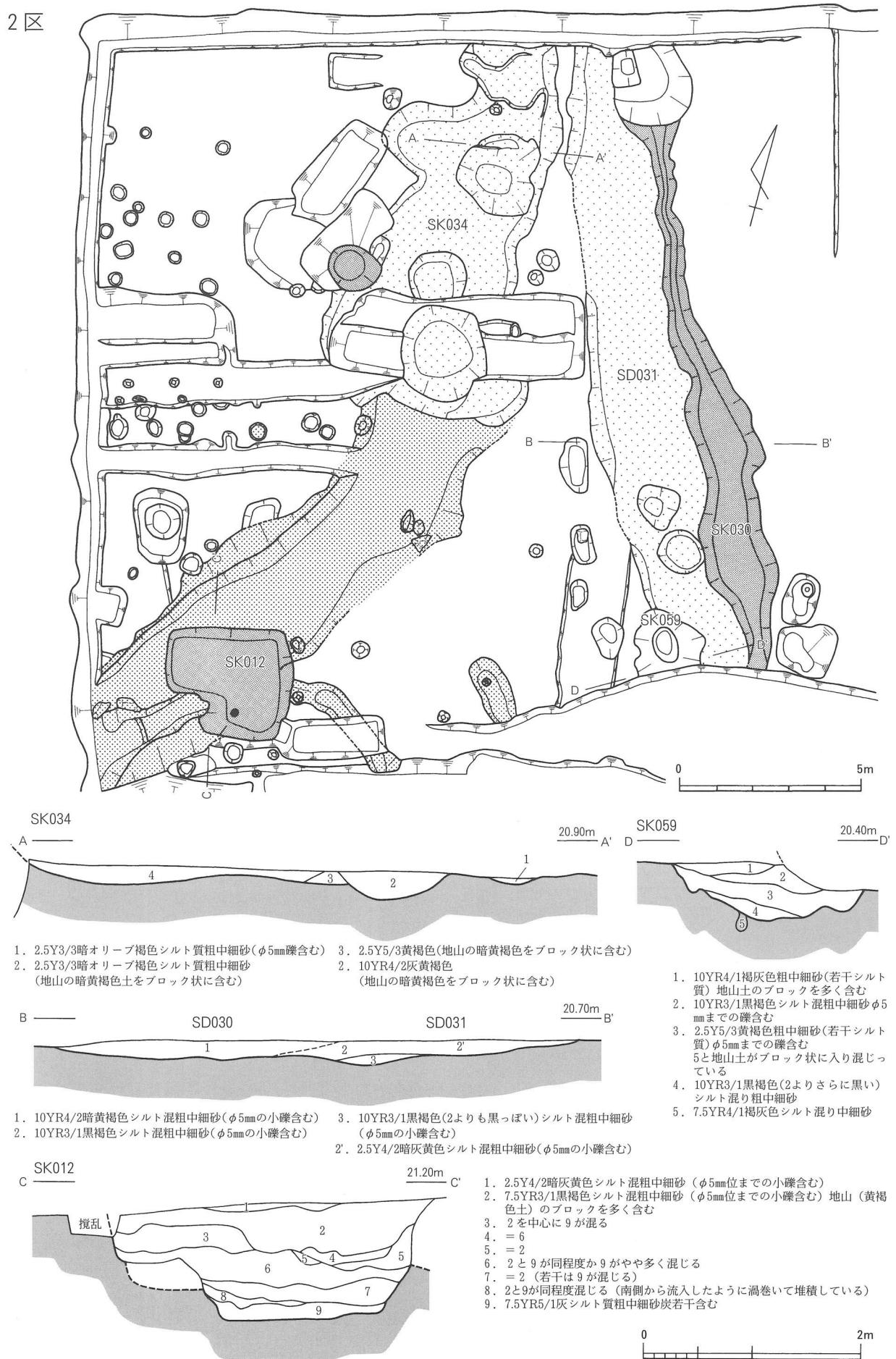
図版4



1区・2区 遺構の配置図・調査区北壁断面図

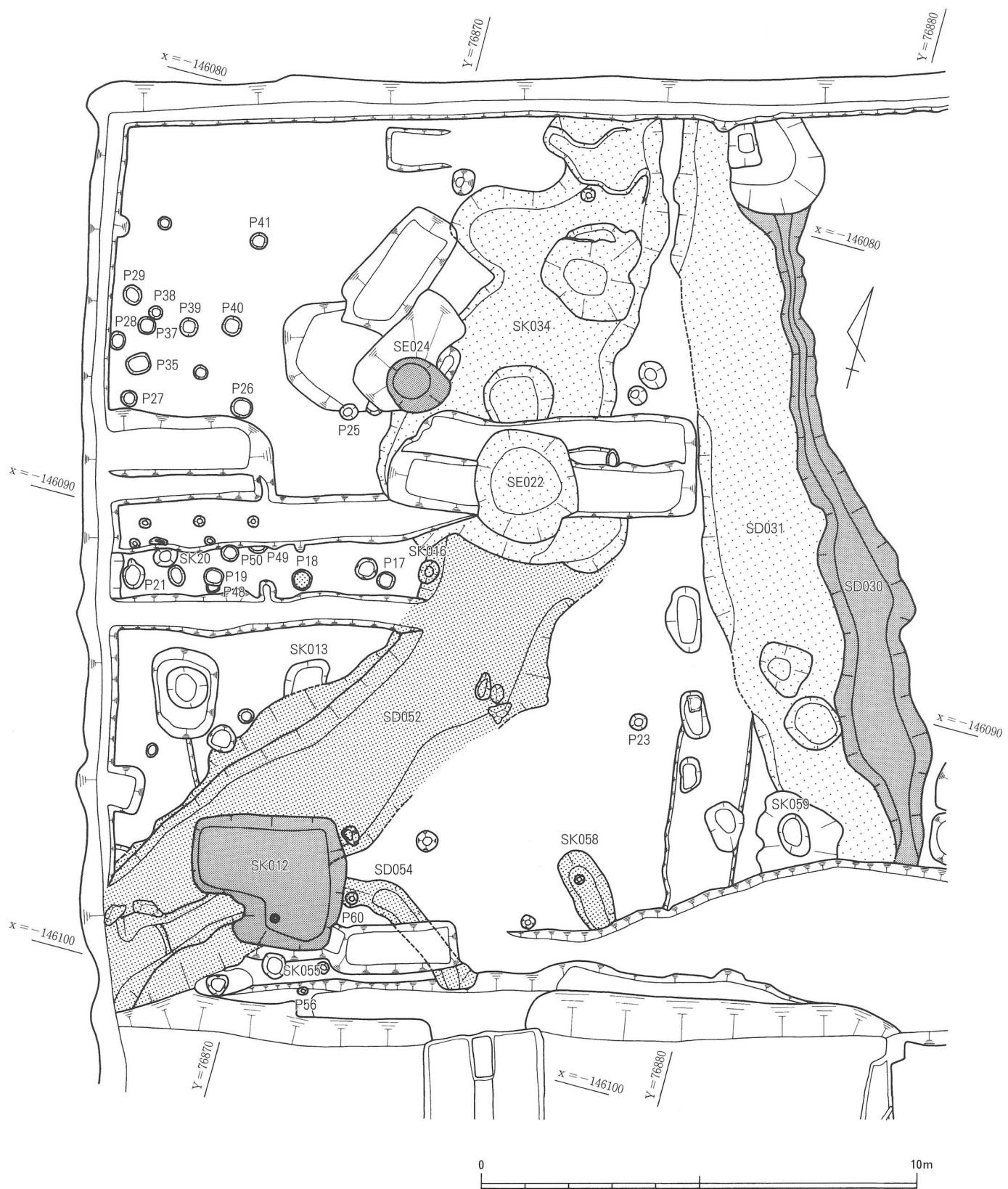


1 区 遺構・土坑配置図



2区 遺構配置図・各遺構断面図

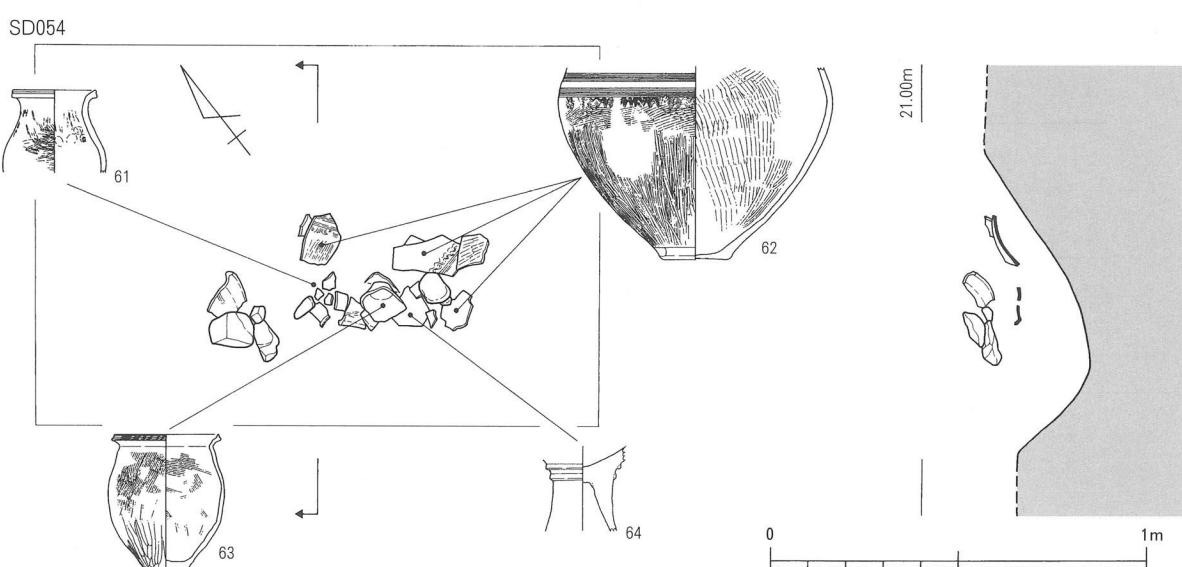
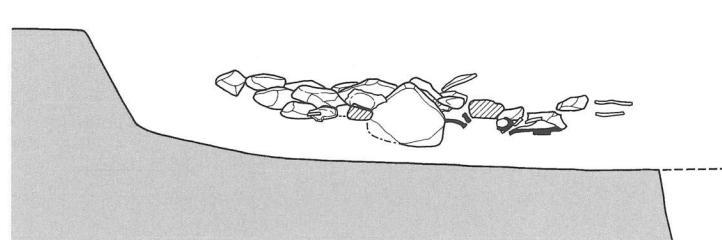
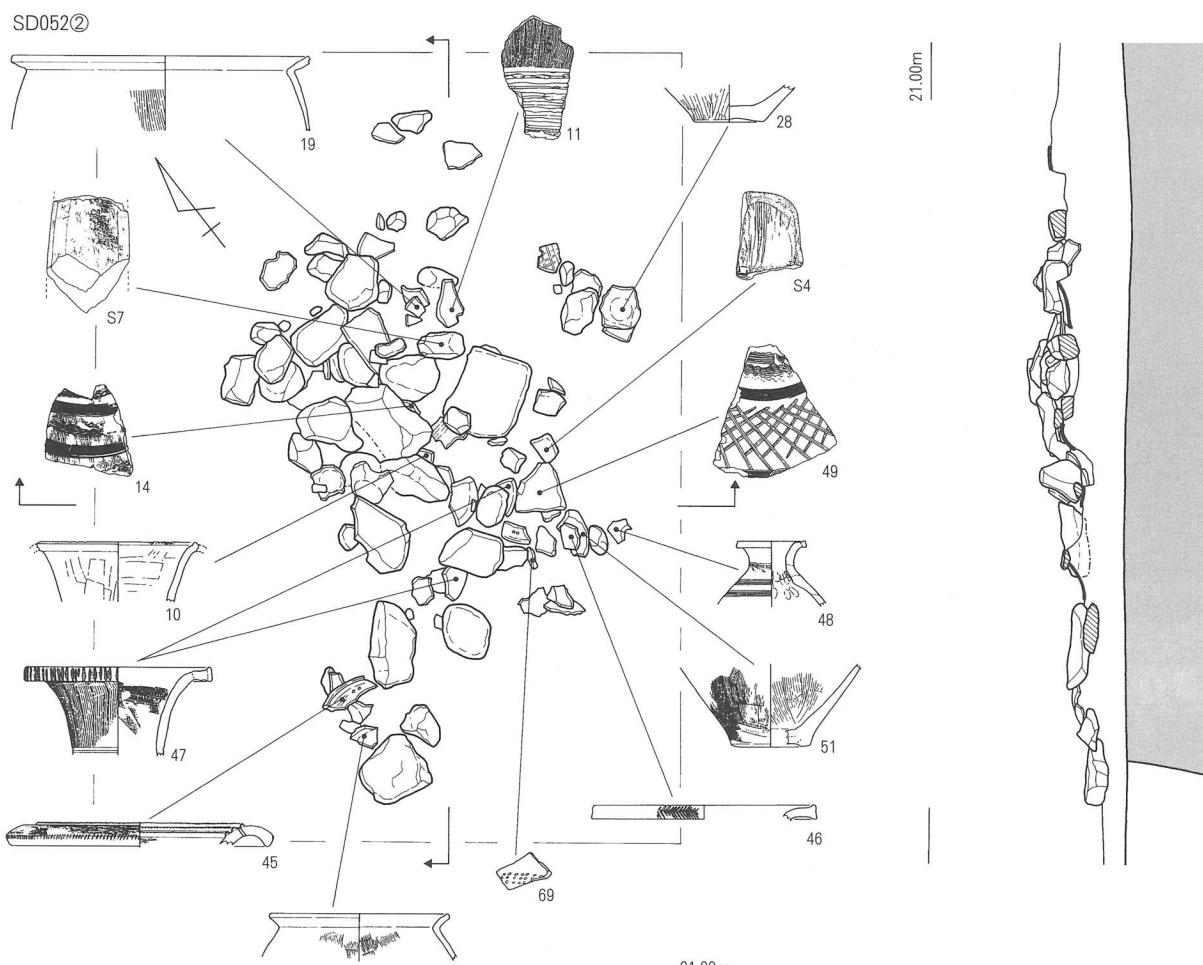
2 区



2 区 遺構配置図

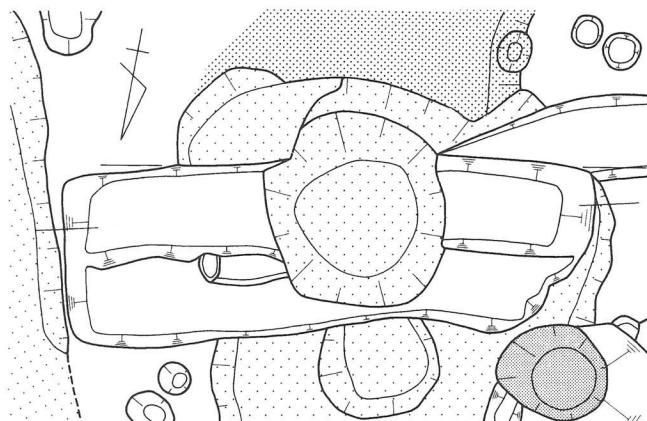


2 区 弥生時代遺構（溝SD052）平面・断面図

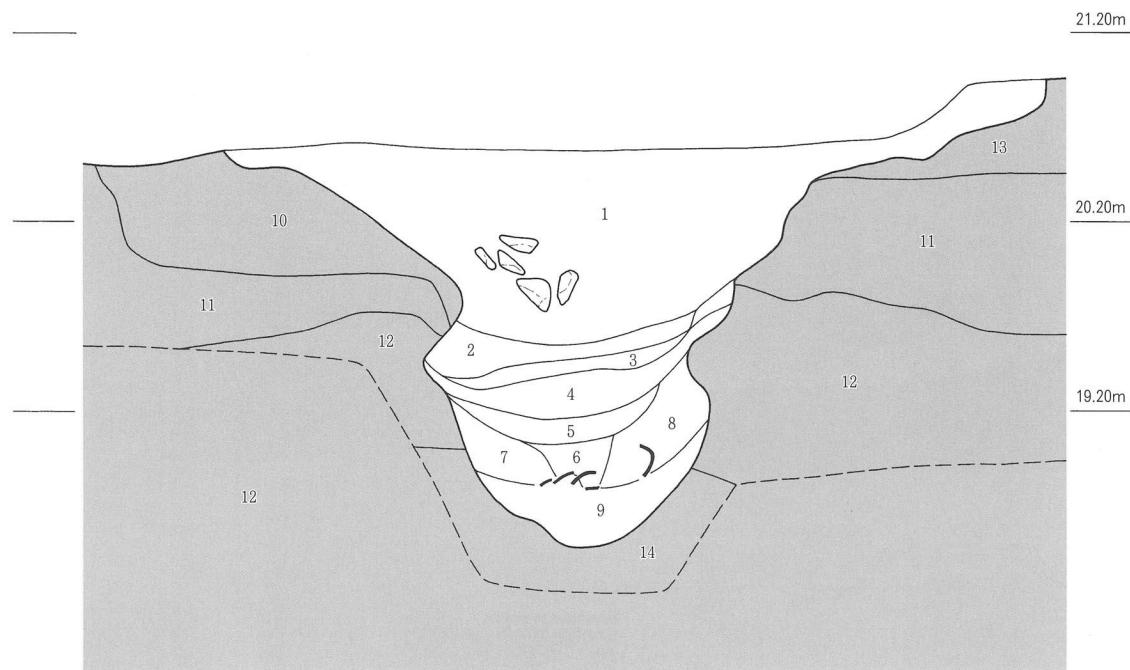


2区 弥生時代遺構（溝SD052・SD054）平面・断面図

SE022



0 5m

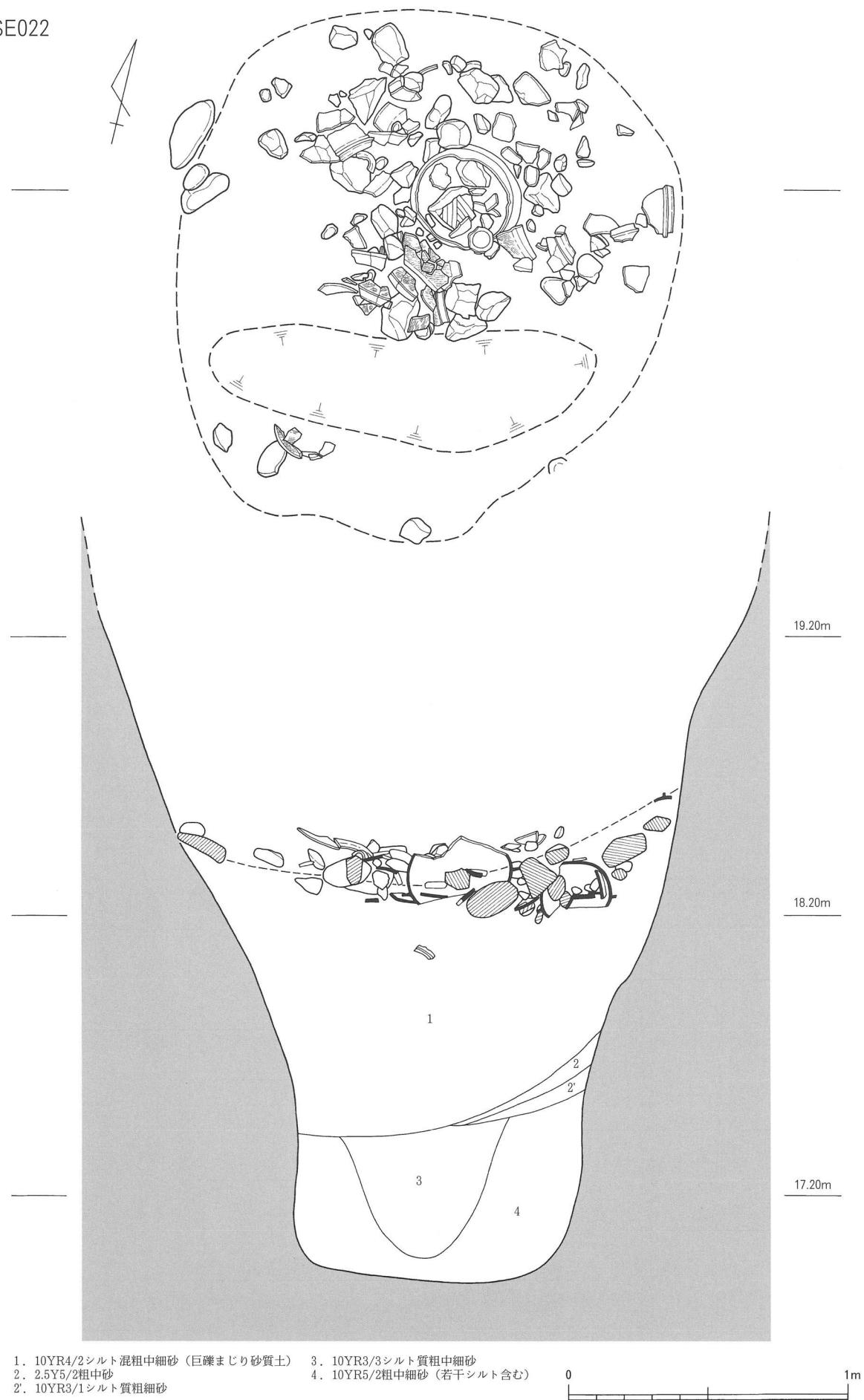


1. 10YR3/2黒褐色細砂～粗砂（シルト混り～φ5mm位の小礫を多く含む）下部を中心に人頭大の礫が投入されている
2. 10YR3/3暗褐色シルト混り中細砂（粗砂～φ5mm位の小礫含むが1より少ない）
3. 10YR3/2黒褐色シルト質細砂～粗砂（φ5mm位の小礫まで含む）11（地山）のブロックを比較的多く含む
4. 10YR3/3黒褐色シルト質細砂～粗砂（φ5mm位の小礫まで含む）11のブロックは含まない。炭化物少量含む
5. 10YR4/2灰黄褐色シルト混細砂～粗砂（φ5mm位の小礫まで含む）1～4に比べ明るい土色
6. 10YR2/1黒シルト混細砂～粗砂（φ5mm位の小礫まで含む）
7. 10YR4/2灰黄褐色シルト混り細砂～小礫（φ2cmまで）φ15cm位の礫も若干入っている。5に似るが5よりも少し明るく礫の混入が多い
8. = 7
9. 10YR5/3にぶい黄褐色細砂～粗砂（シルト若干含む）
10. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト混り細砂～小礫（φ5mm位まで）暗灰色土の11（地山）の黄褐色土が入り混じっている
11. 10YR4/6褐色細砂
12. 10YR5/4にぶい黄褐色細砂～粗砂
13. 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂～中砂（φ5mm位の小礫層、φ20cm位の礫を若干含む）ラミナ
14. 10YR6/6明黄褐色粗中細砂と10YR5/2灰黄褐色細砂（シルト若干含む）ラミナ

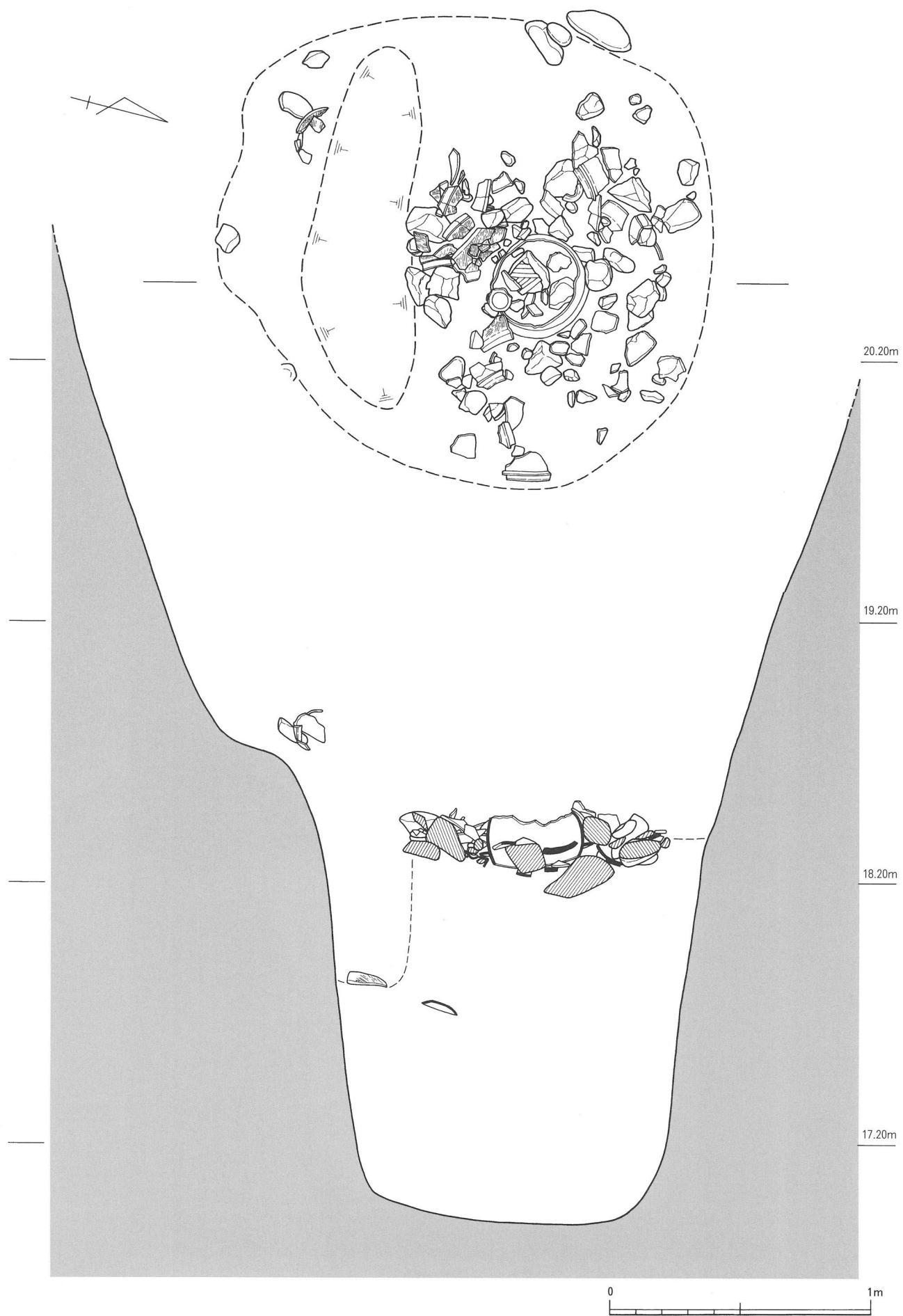
0 2m

室町時代遺構（井戸SE022）上部平面・断面図

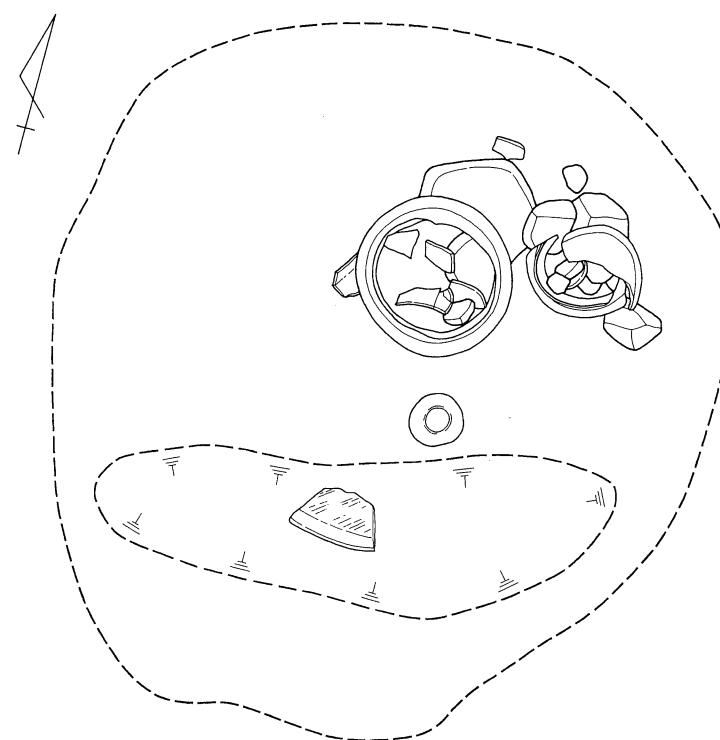
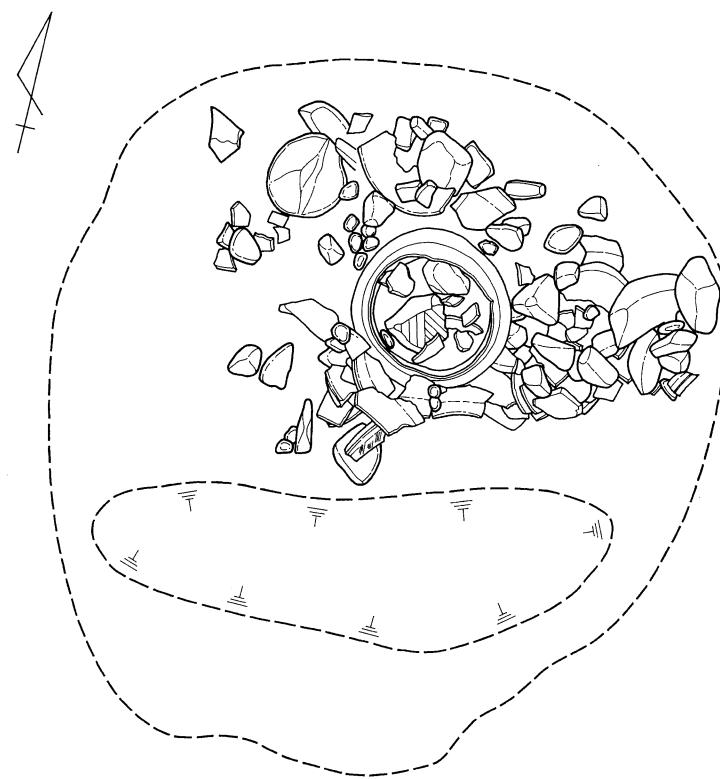
SE022



室町時代遺構（井戸SE022）平面・断面図①



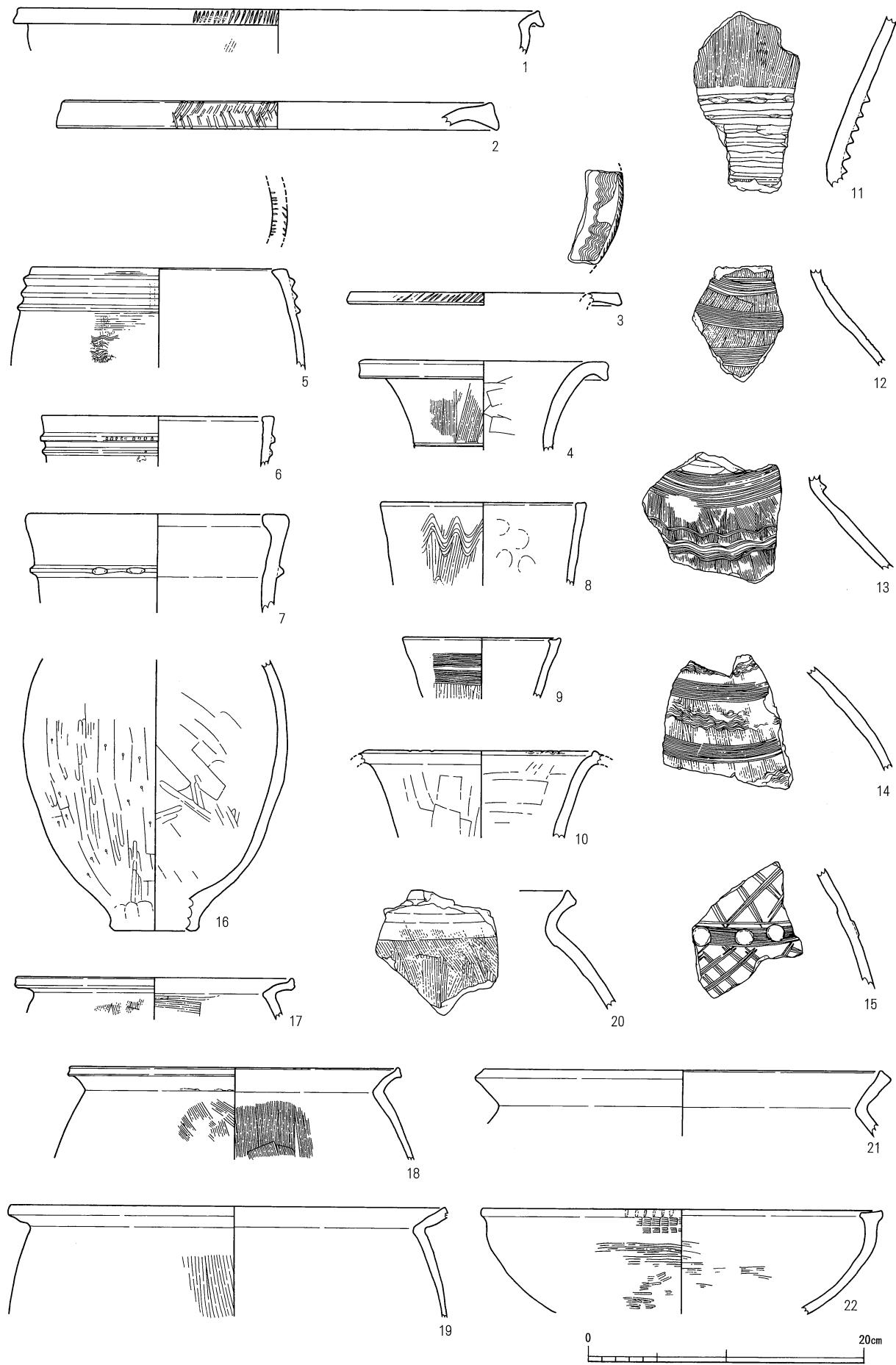
室町時代遺構（井戸SE022）平面・断面図②



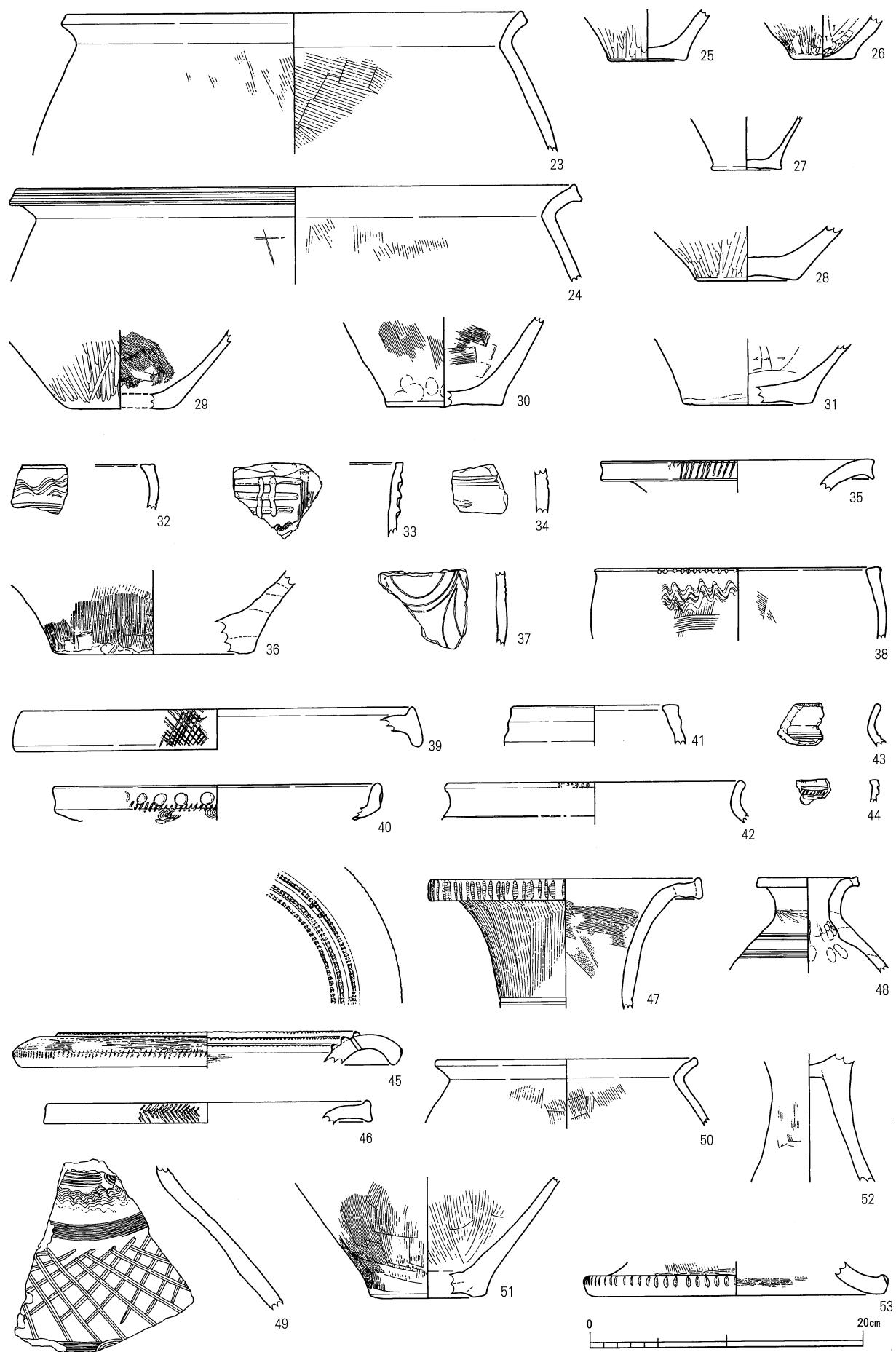
0 1m

室町時代遺構（井戸SE022）平面・断面図③

SD052

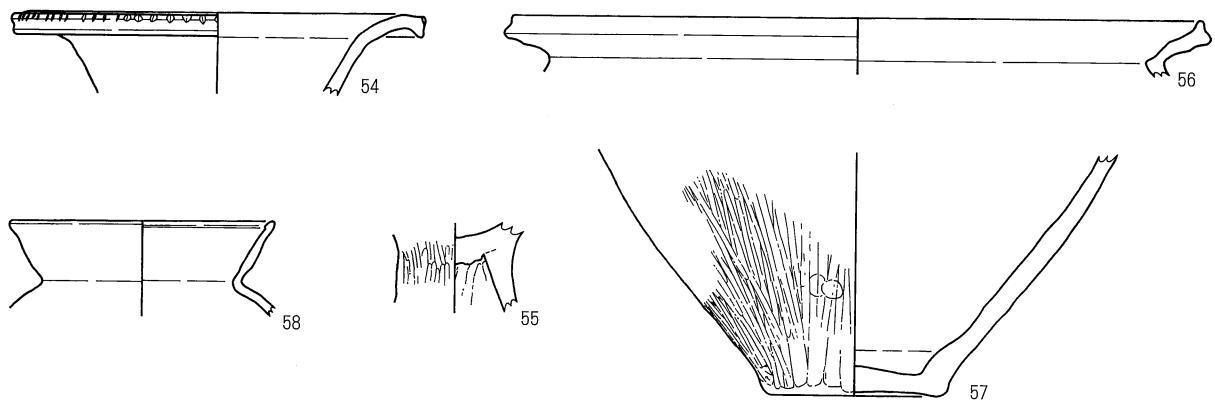


弥生時代の遺物①

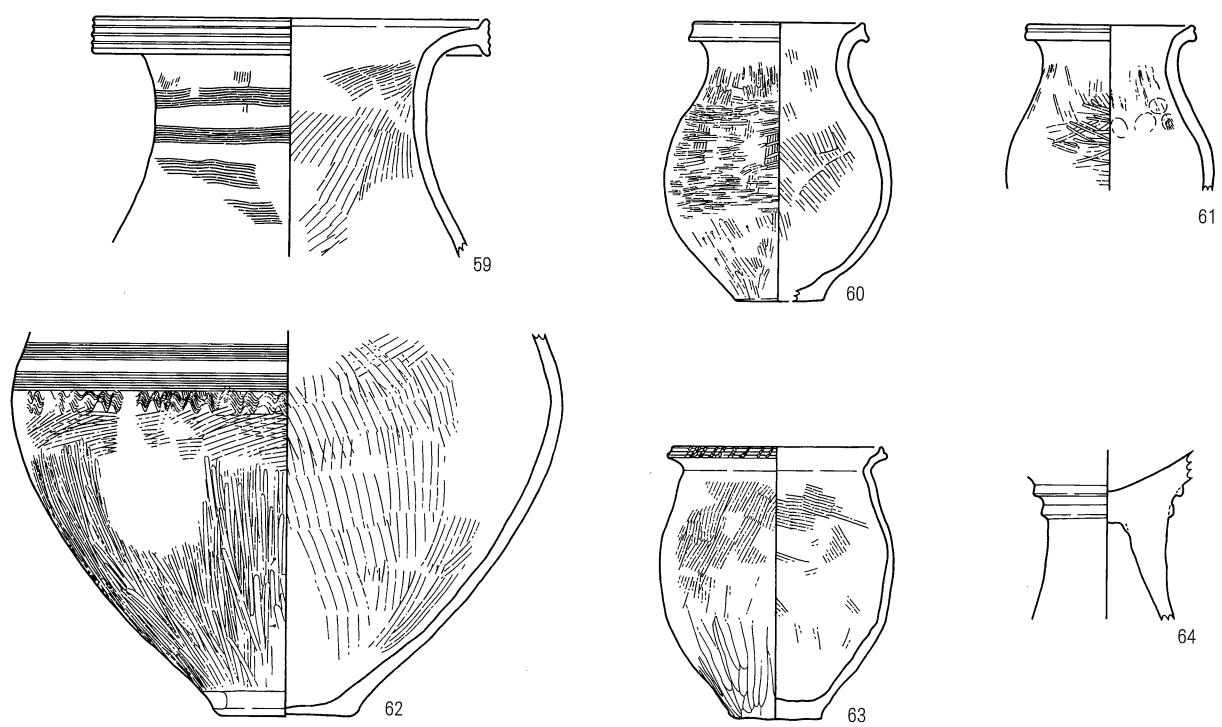


弥生時代の遺物②

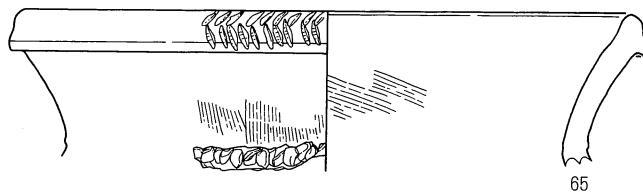
図版16



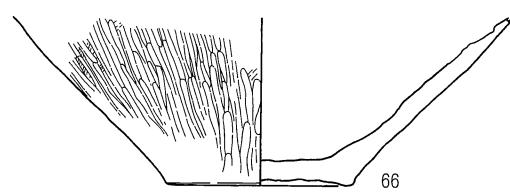
SD054



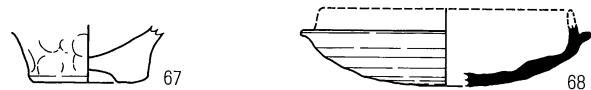
SK024



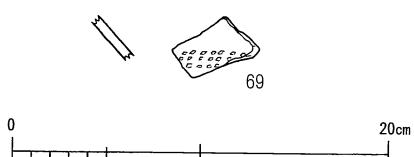
SK052



SK022

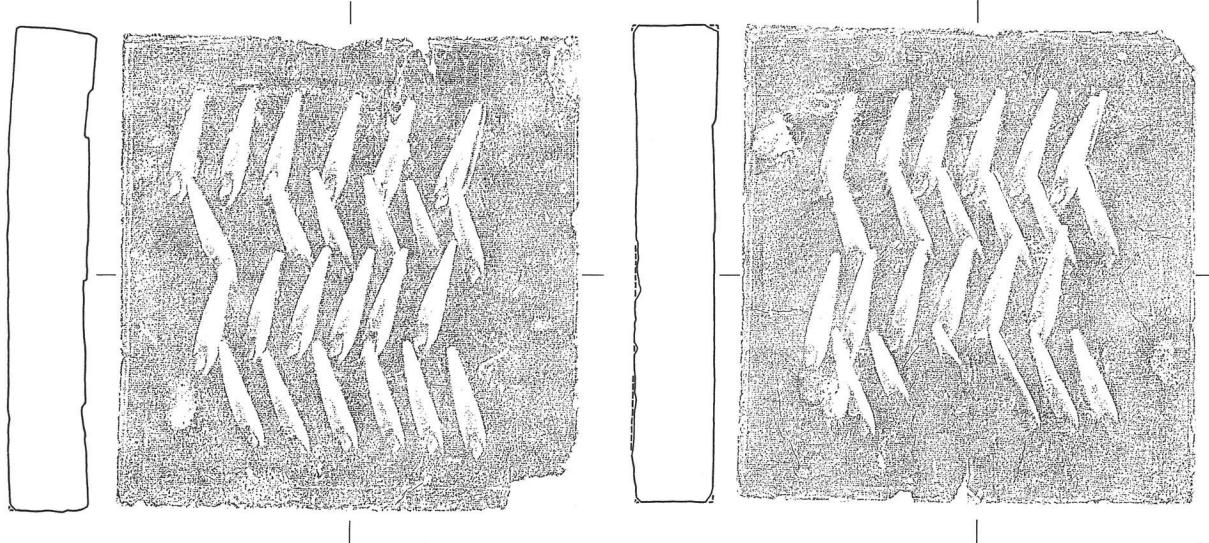


P018



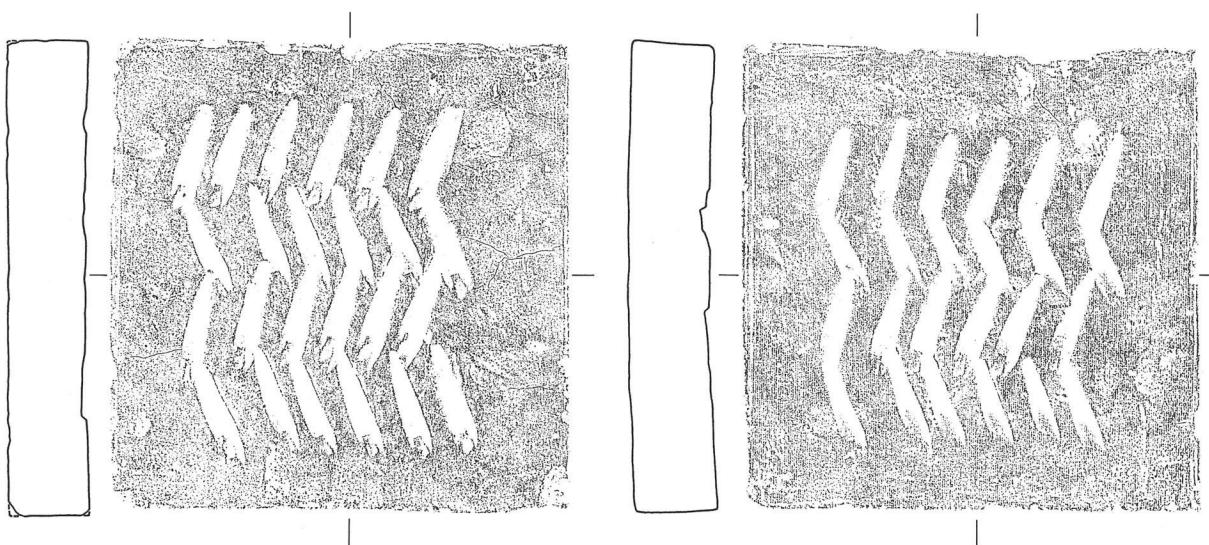
弥生時代の遺物③

SE024



70

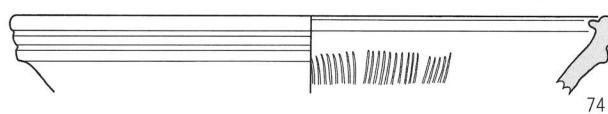
71



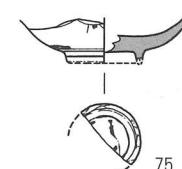
72

73

SK012



74

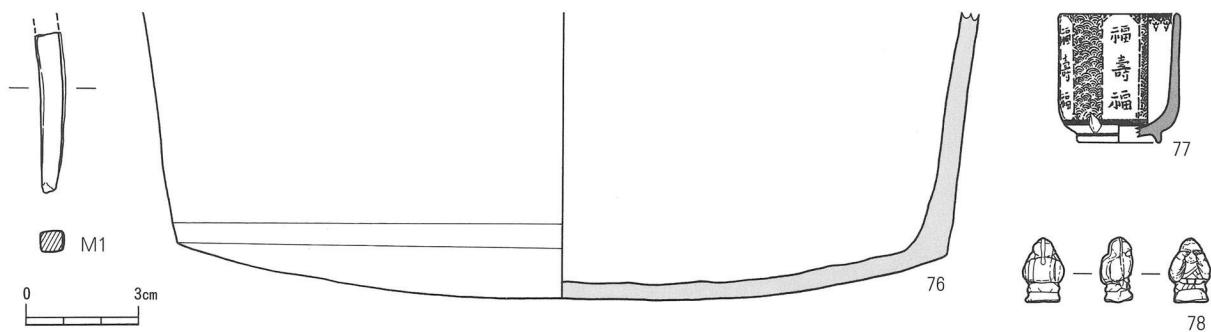


75

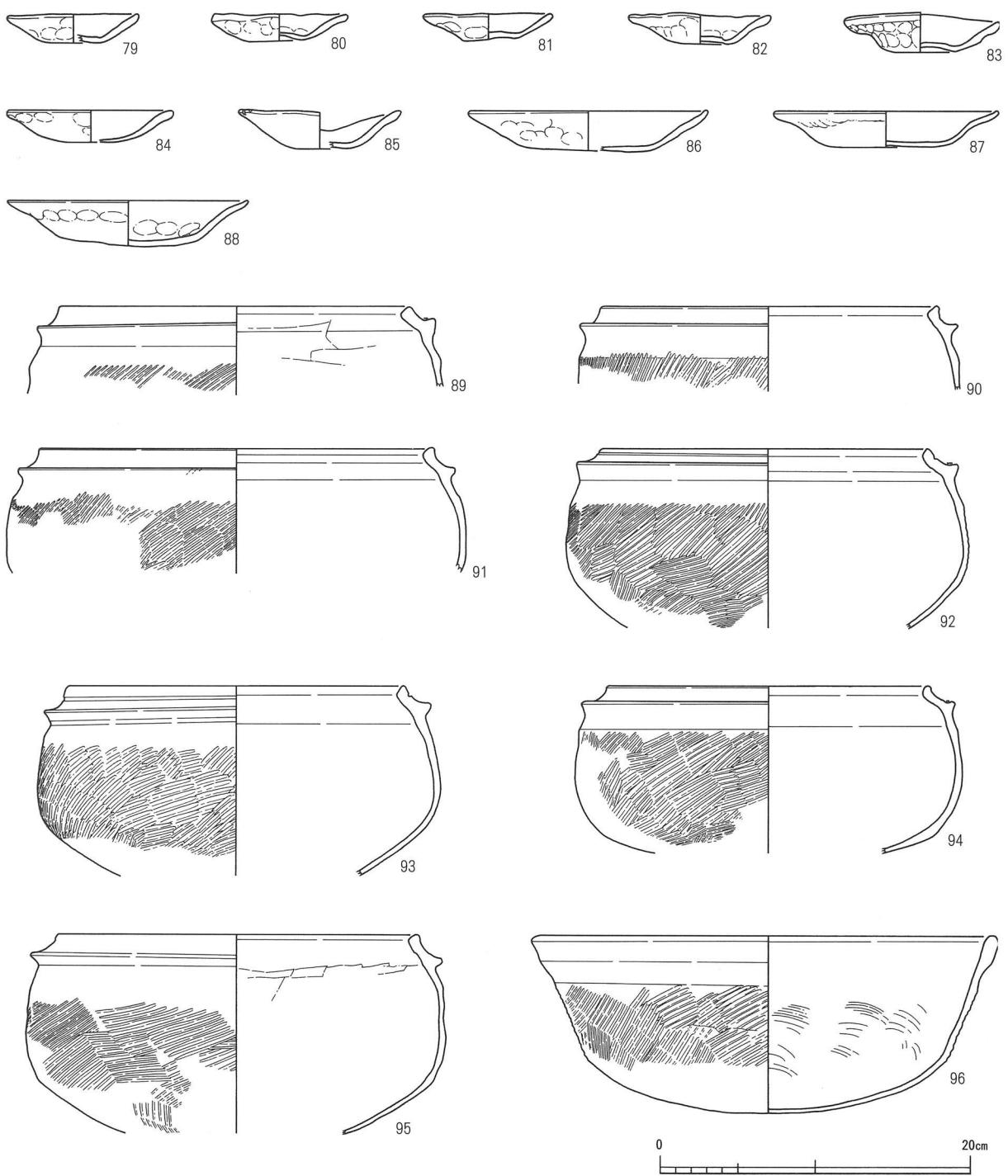


室町時代・江戸時代以降の遺物①

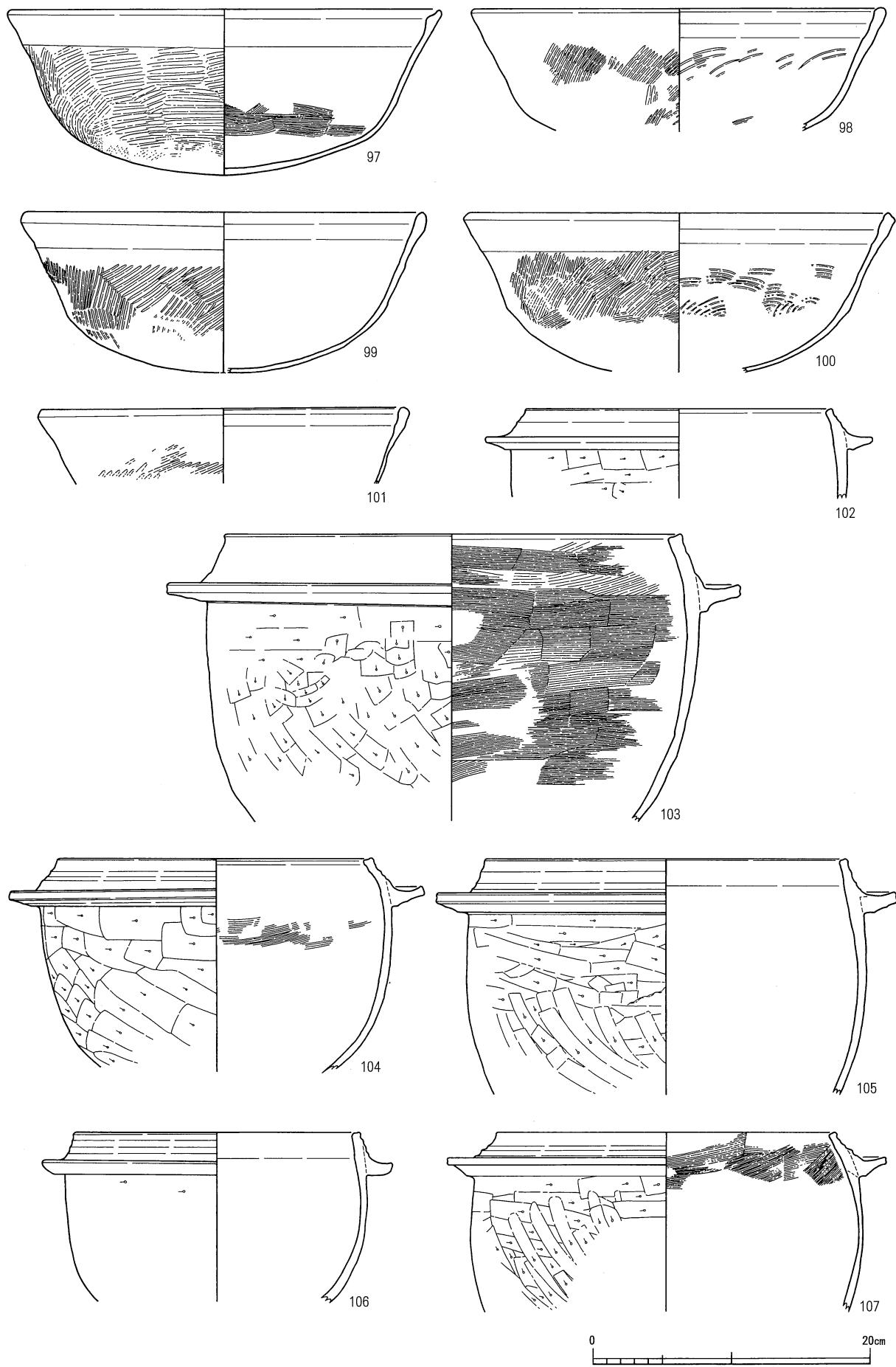
SK020



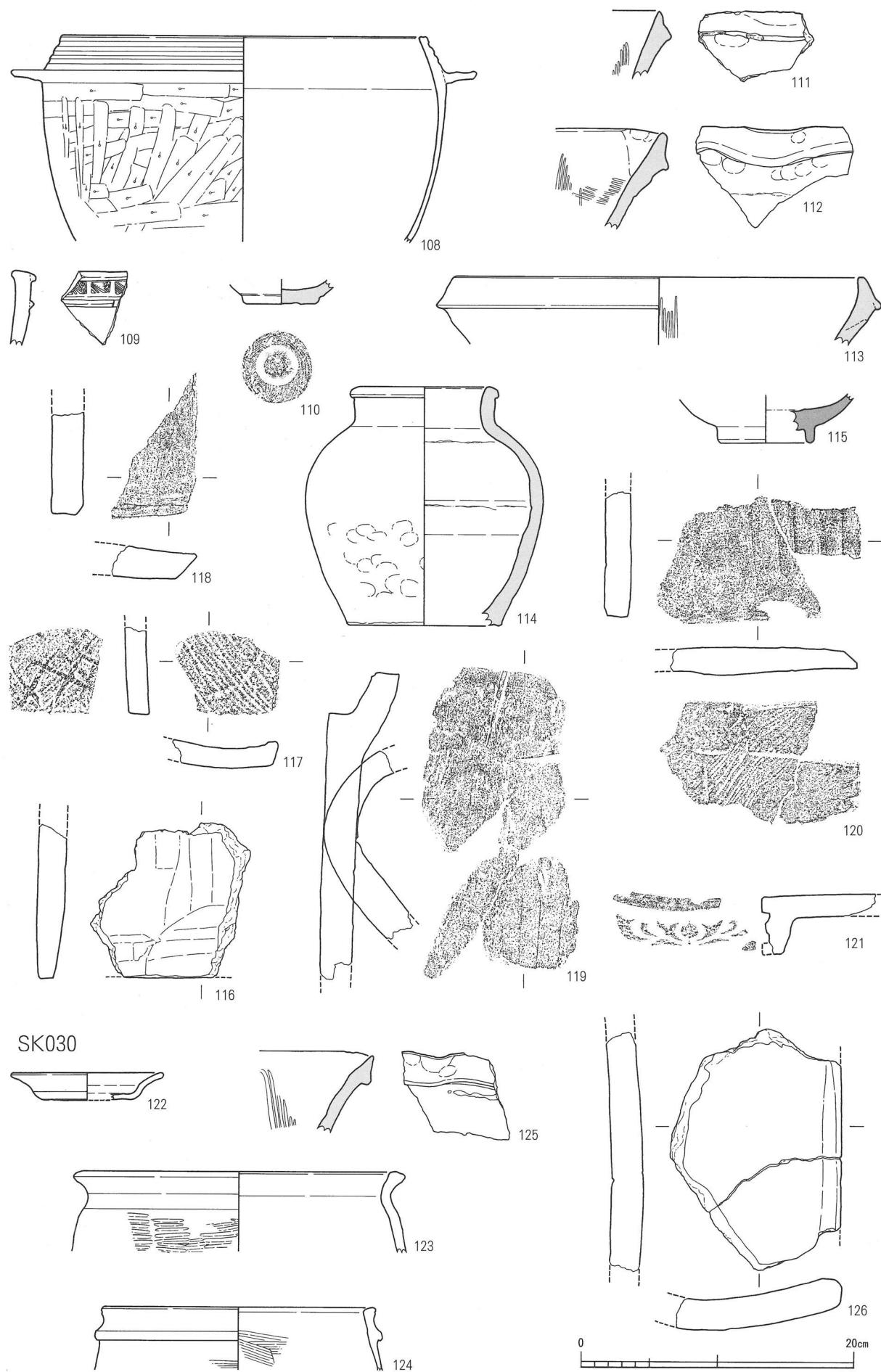
SE022



室町時代・江戸時代以降の遺物②

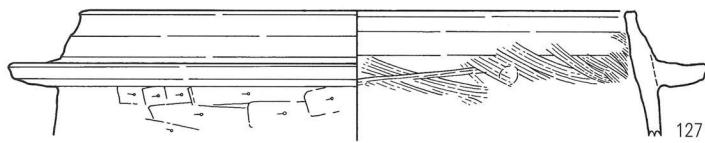


室町時代・江戸時代以降の遺物③

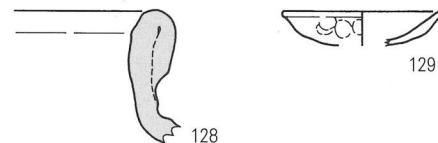


室町時代・江戸時代以降の遺物④

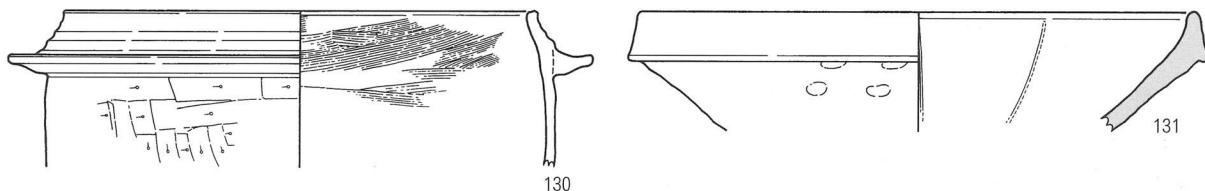
SK034



SK053



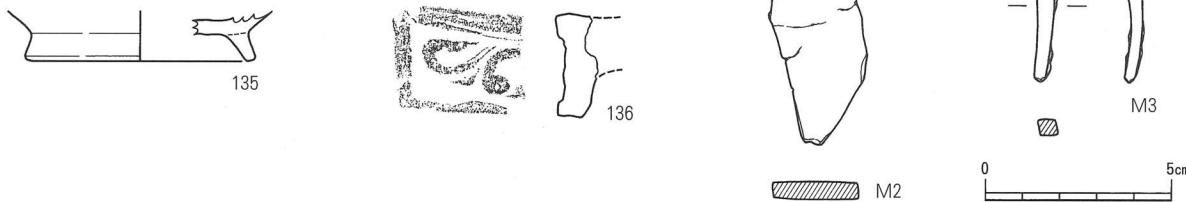
SE022



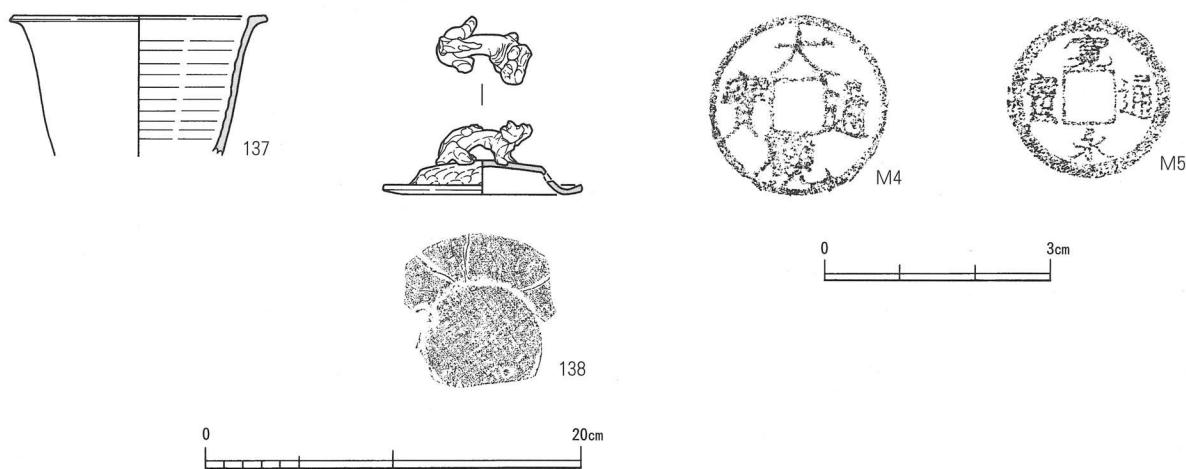
SE052

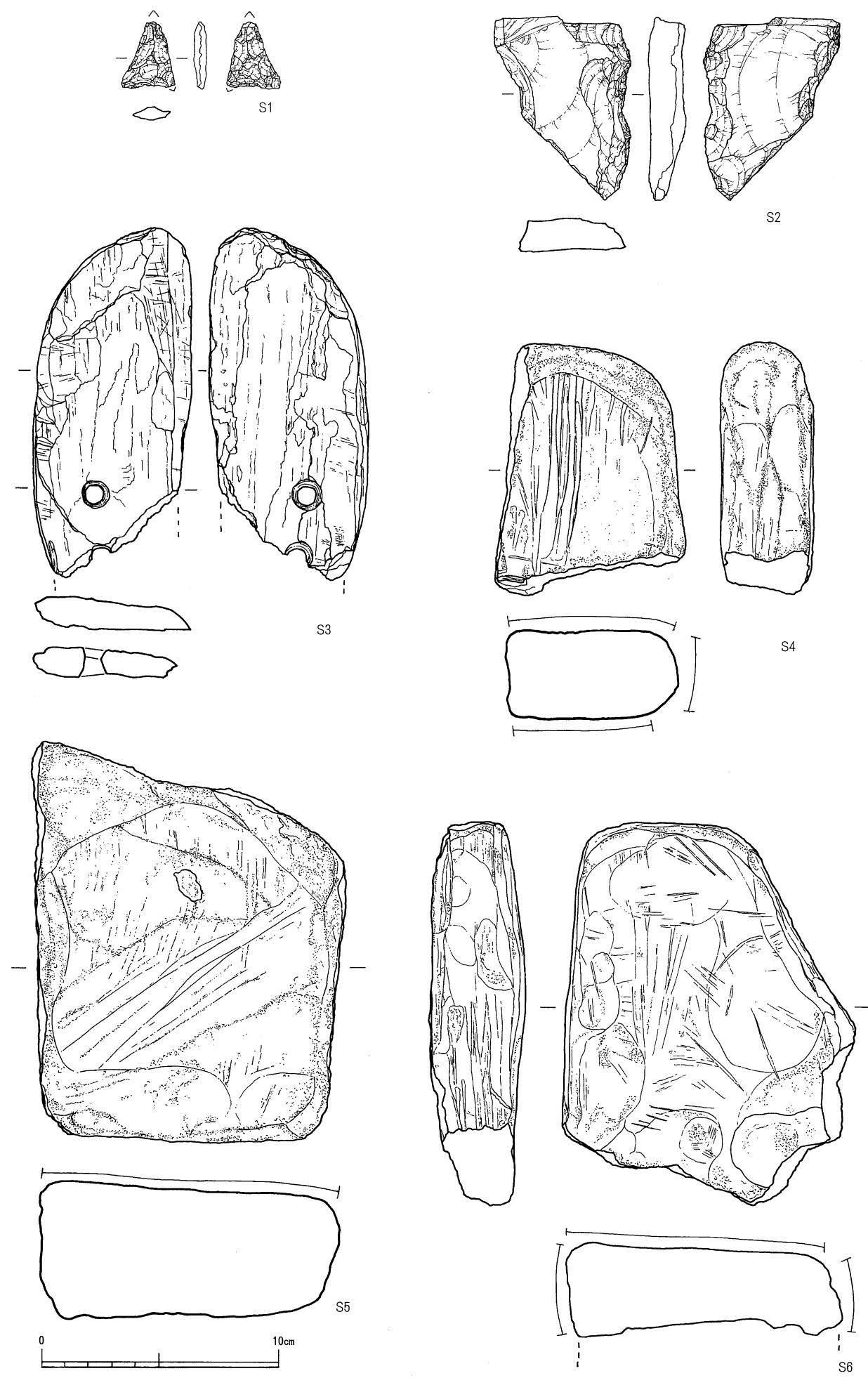


包含層

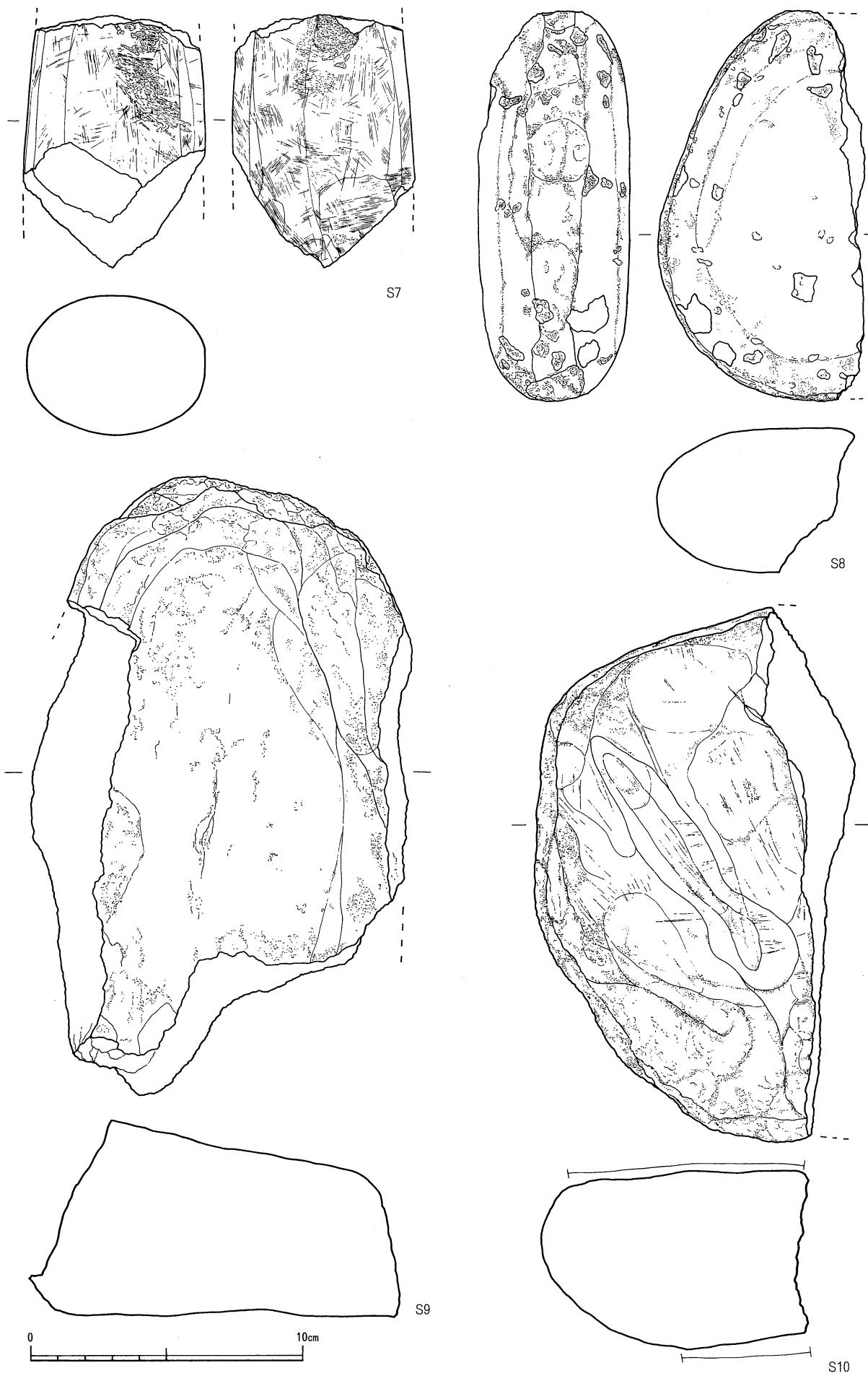


攪乱

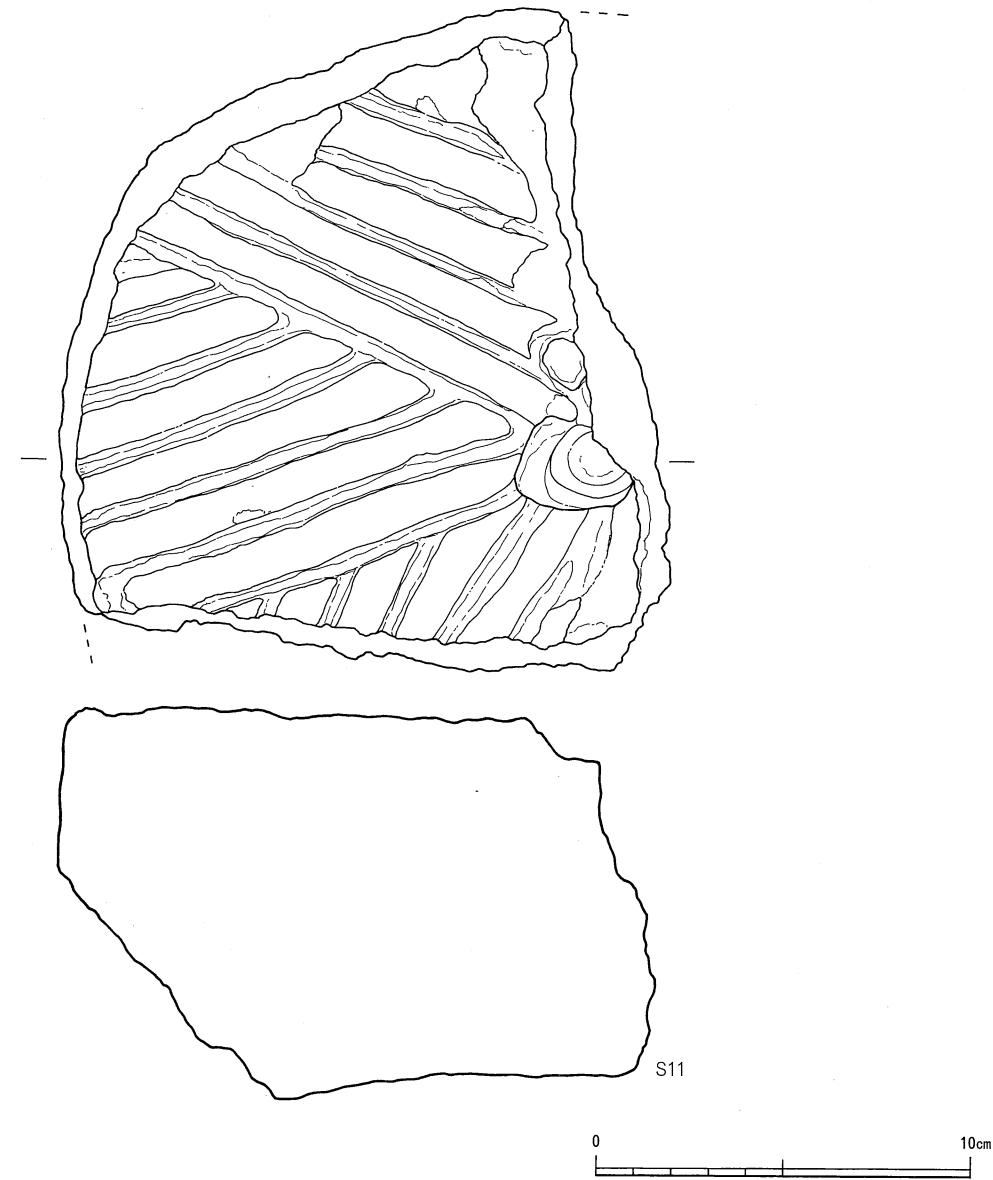




弥生時代の遺物（石器）①



弥生時代の遺物（石器）②



室町時代・江戸時代以降の遺物（石器）①

写 真 図 版

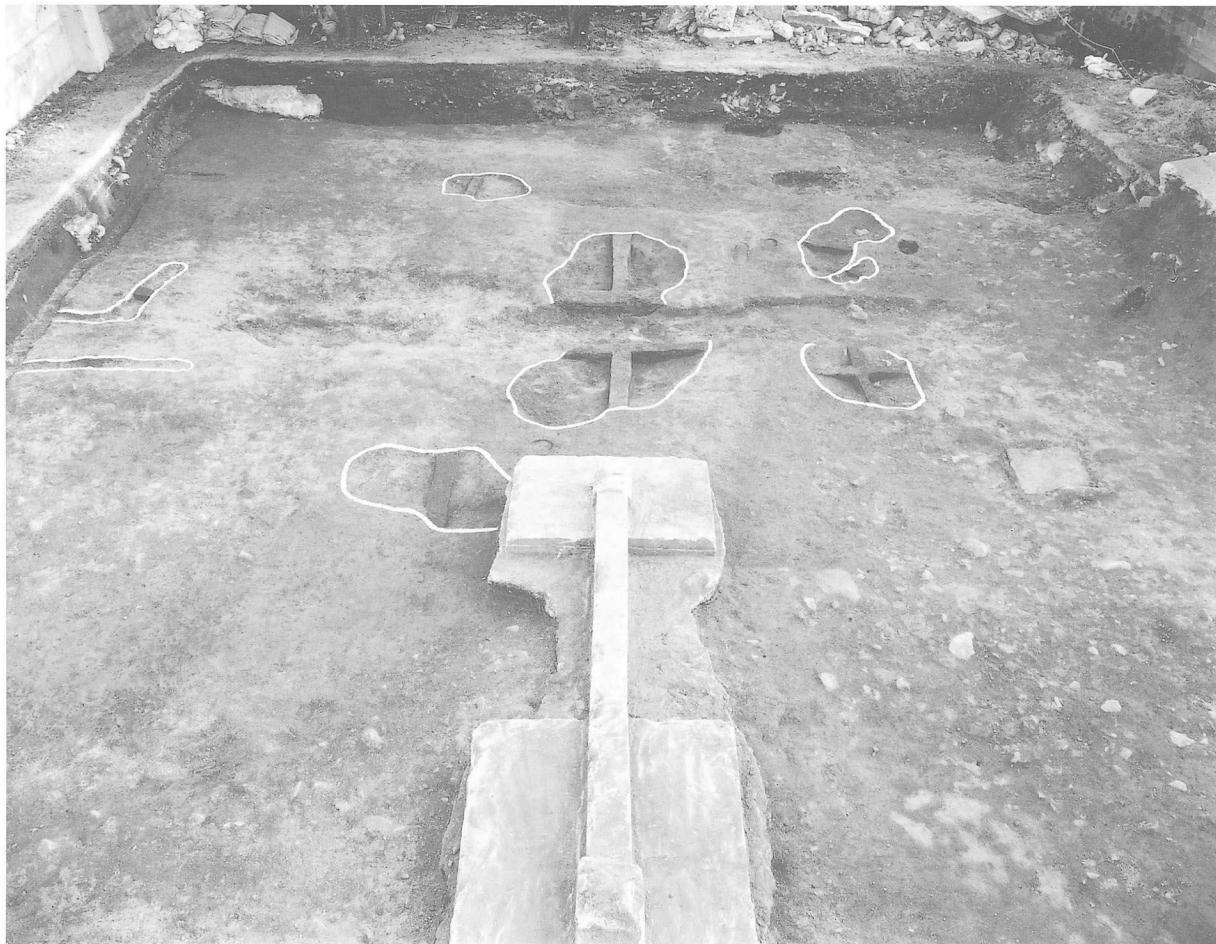


楠・荒田町遺跡遠景（西から）



楠・荒田町遺跡（西から）

写真図版 2



1区 全景（北から）



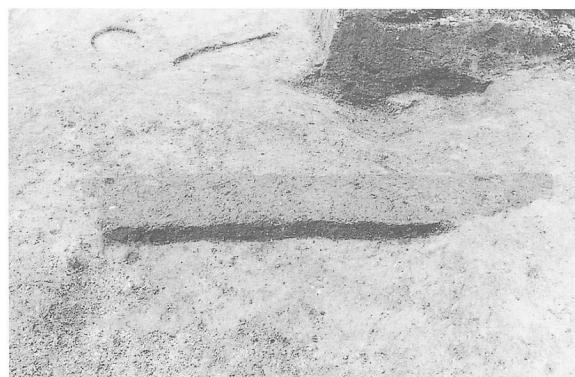
1区 土坑(SK002) 断面（東から）



1区 土坑(SK005) 断面（西から）



1区 土坑(SK006) 断面（南から）



1区 土坑(SK007) 断面（北から）



2区 全景（空中写真）



2区 北壁（南西から）



2区 東壁（西から）

写真図版 4



2区 弥生時代遺構全景（南から）



2区 弥生時代遺構全景（東から）



2区 弥生時代遺構 溝(SD052・SD054)
全景（南西から）



2区 弥生時代遺構 溝(SD052) 断面（北東から）



2区 弥生時代遺構 溝(SD052)（北東から）



2区 弥生時代遺構 溝(SD052)（南西から）

写真図版 6



2区 弥生時代遺構 溝(SD052) 土器群2（北西から）



2区 弥生時代遺構 溝(SD052) 土器群2（南西から）



2区 弥生時代遺構 溝(SD052)土器群 1



2区 弥生時代遺構 溝(SD052)土器群 2 (東から)



2区 弥生時代遺構 溝(SD052)土器群 3 (北西から)



2区 弥生時代遺構 溝(SD052)土器群 3 (東から)



2区 弥生時代遺構 溝(SD052)土器群 3 (南西から)

写真図版8



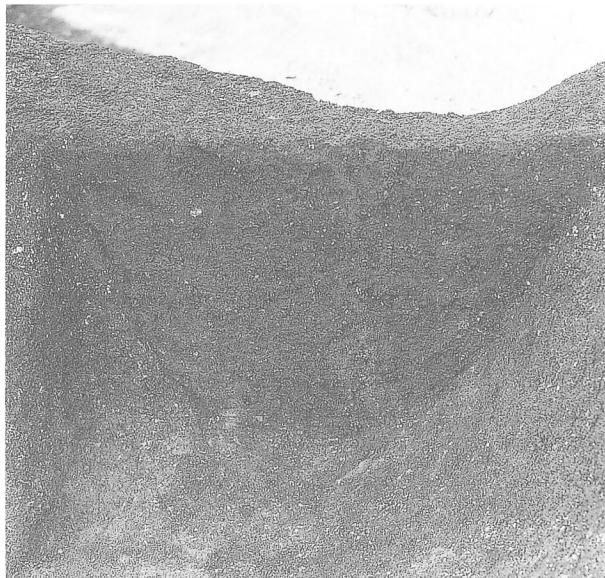
2区 弥生時代遺構 溝(SD052)断面2（東から）



2区 弥生時代遺構 溝(SD058)断面（南から）



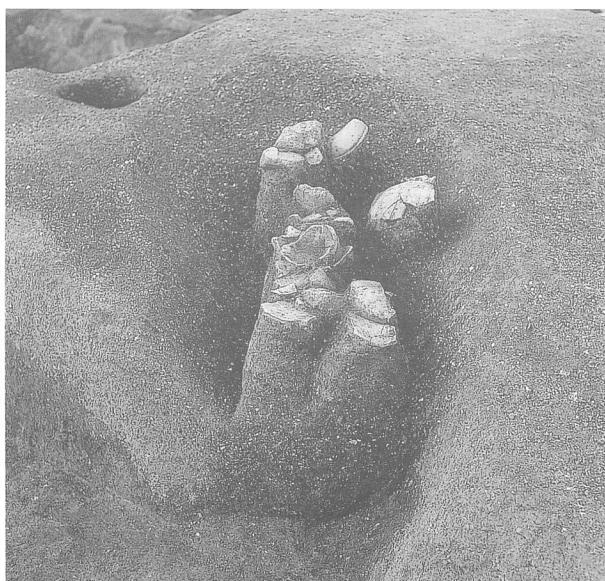
2区 弥生時代遺構 溝(SD054)（南から）



2区 弥生時代遺構 溝(SD054)断面（南から）



2区 弥生時代遺構 溝(SD054)（北東から）



2区 弥生時代遺構 溝(SD054)（南東から）



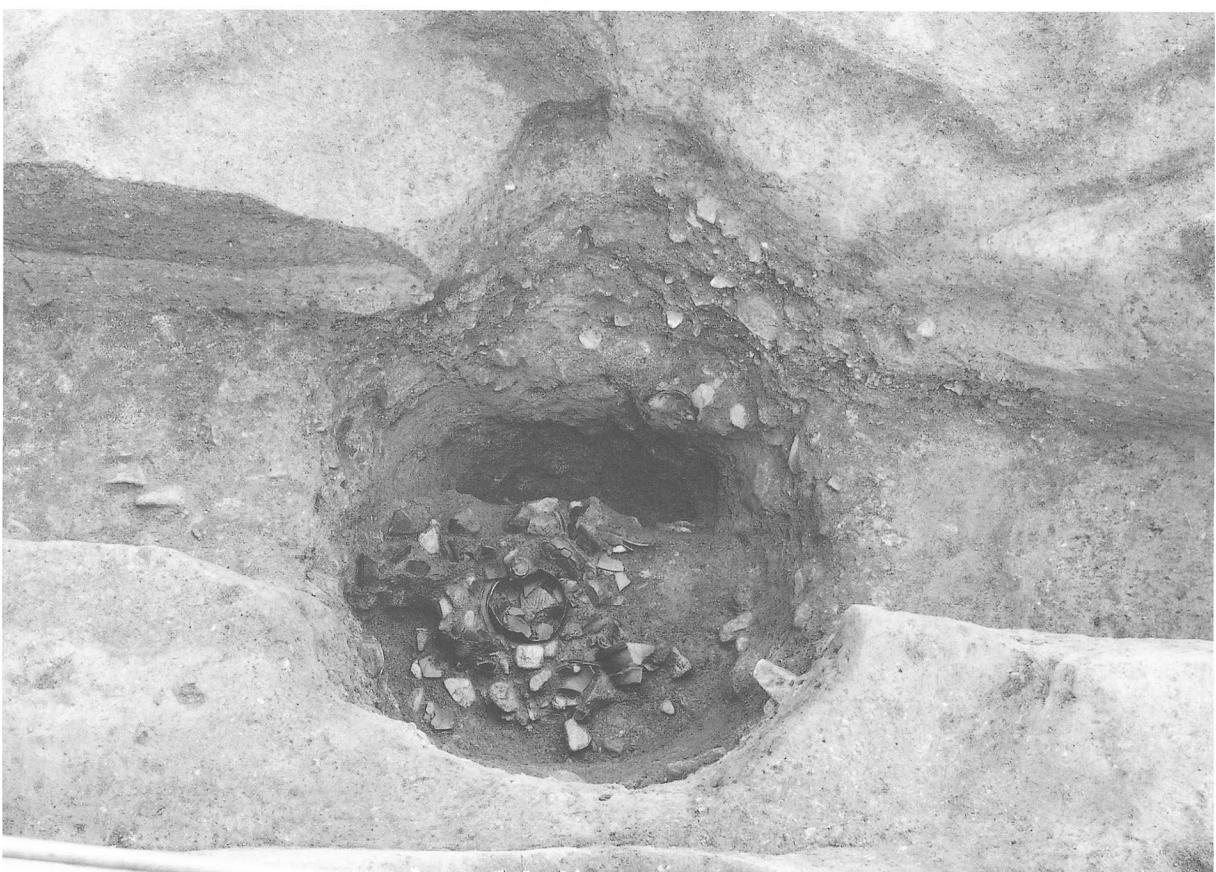
2区 室町時代・江戸時代以降遺構全景（南から）



2区 室町時代・江戸時代以降遺構全景（東から）



2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022)断面（北から）



2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022)中層遺物出土状況（北から）



2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022)中層遺物出土状況1（東から）



2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022)
中層遺物出土状況2（南から）



2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022)
中層遺物出土状況2部分（南から）



2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022)
中層遺物出土状況2部分（南から）



2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022)
中層遺物出土状況2部分（南から）

写真図版12



2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022)中層遺物出土状況3（南から）



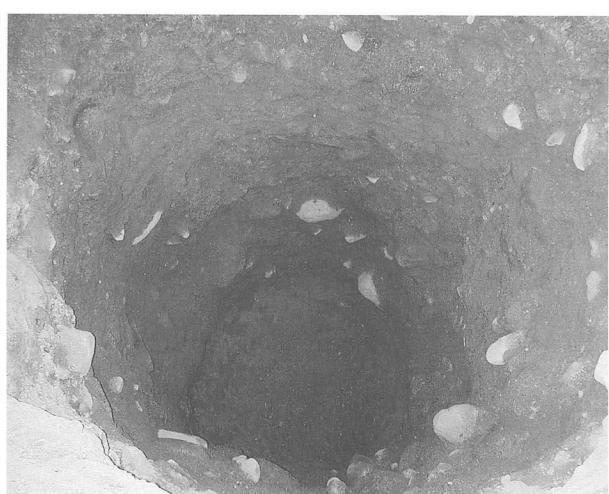
2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022)
中層遺物出土状況3（南から）



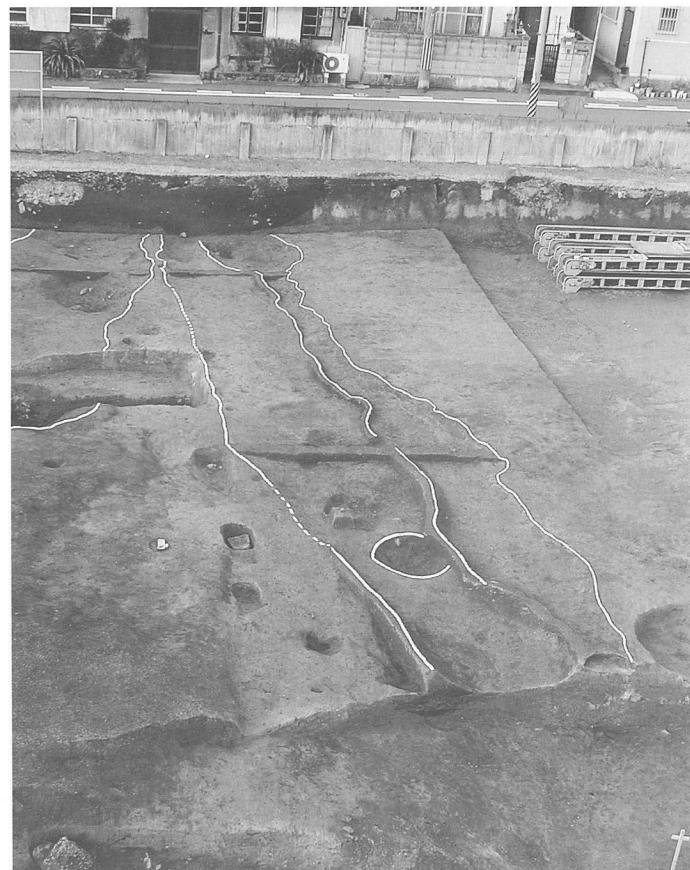
2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022)
中層遺物出土状況3部分（南から）



2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022)
下層遺物出土状況



2区 室町時代・江戸時代以降遺構 井戸(SE022)
完掘



2区 室町時代・江戸時代以降遺構 溝(SD030・SD031)（南から）



2区 室町時代・江戸時代以降遺構 溝(SD030・SD031)断面（南西から）

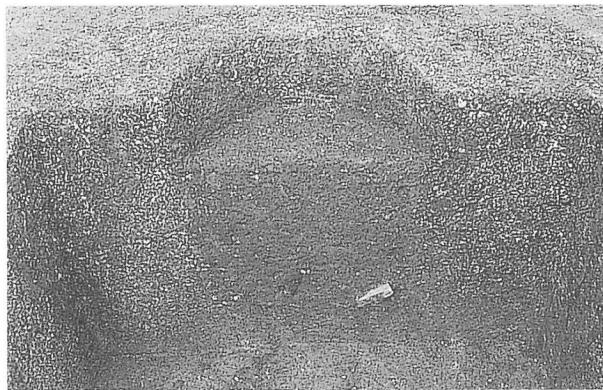
写真図版14



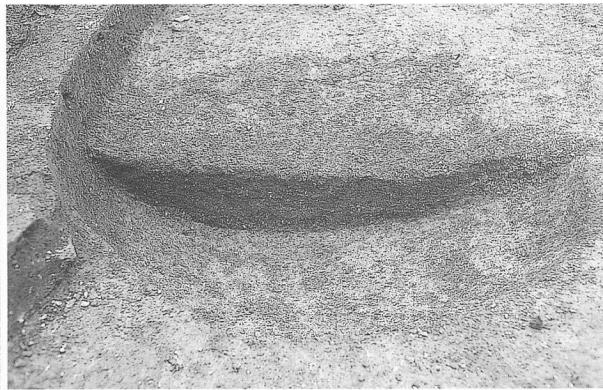
2区 室町時代・江戸時代以降遺構 土坑(SK012)（北から）



2区 室町時代・江戸時代以降遺構 土坑(SK012) 断面（東から）



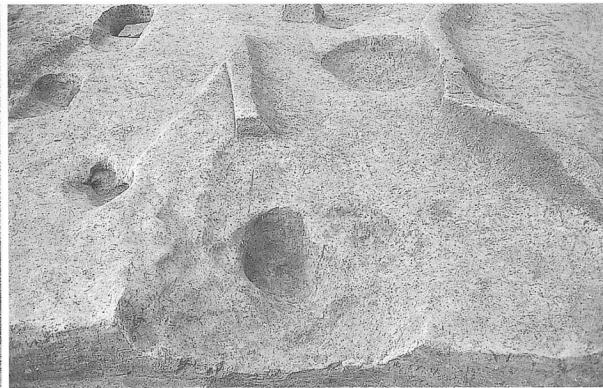
2区 室町時代・江戸時代以降遺構
柱穴(P027) 断面（南から）



2区 室町時代・江戸時代以降遺構
土坑(SK032) 断面（北から）



2区 室町時代・江戸時代以降遺構
土坑(SK059) 断面（南から）



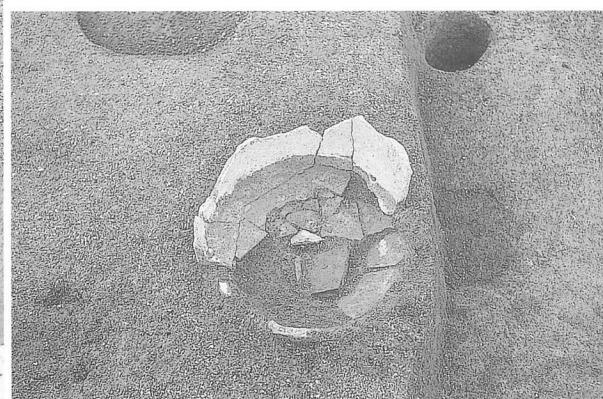
2区 室町時代・江戸時代以降遺構
土坑(SK059) 完堀（南から）



2区 室町時代・江戸時代以降遺構
井戸(SE024) 断面（北西から）

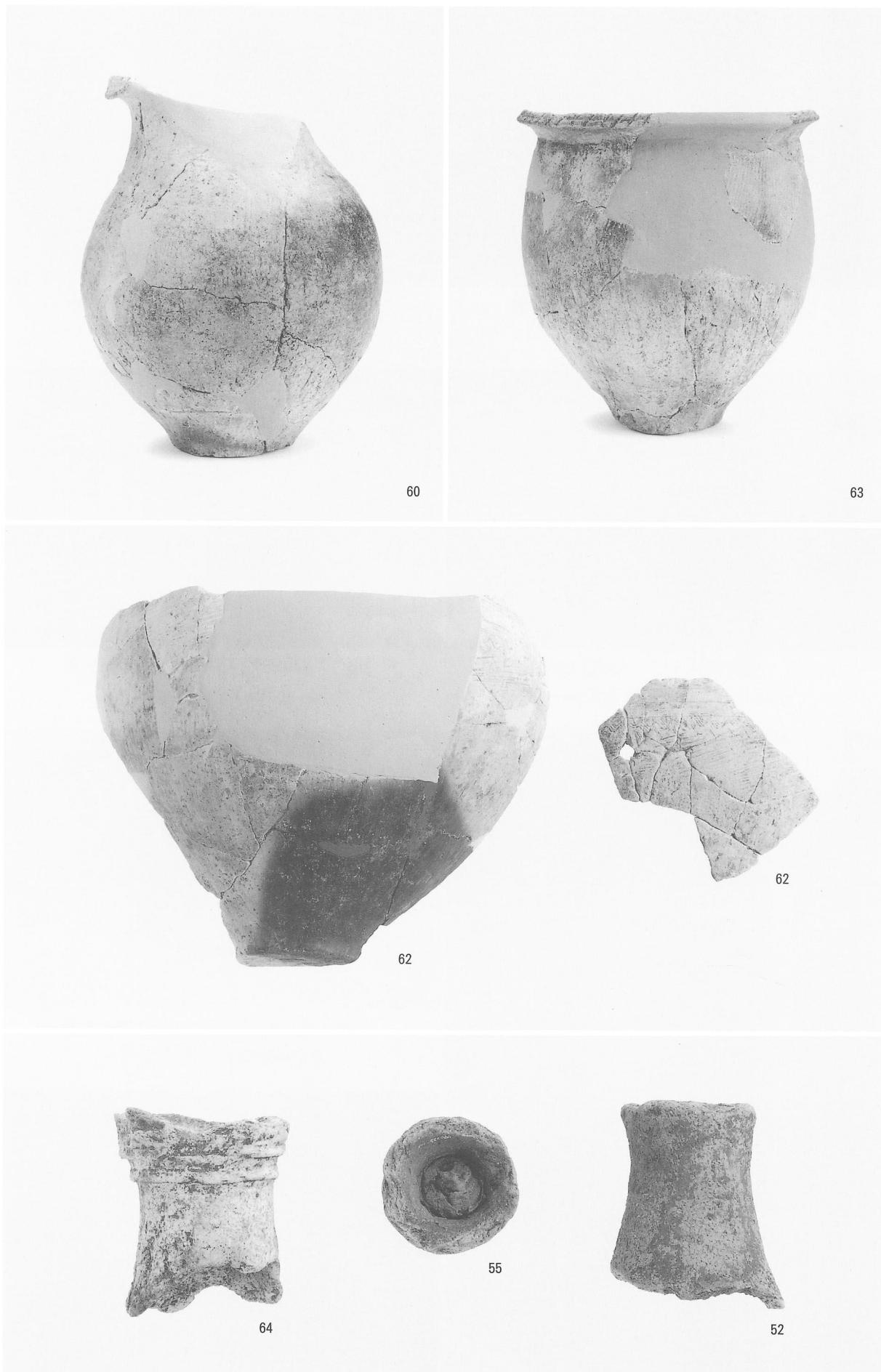


2区 室町時代・江戸時代以降遺構
井戸(SE024)（北西から）

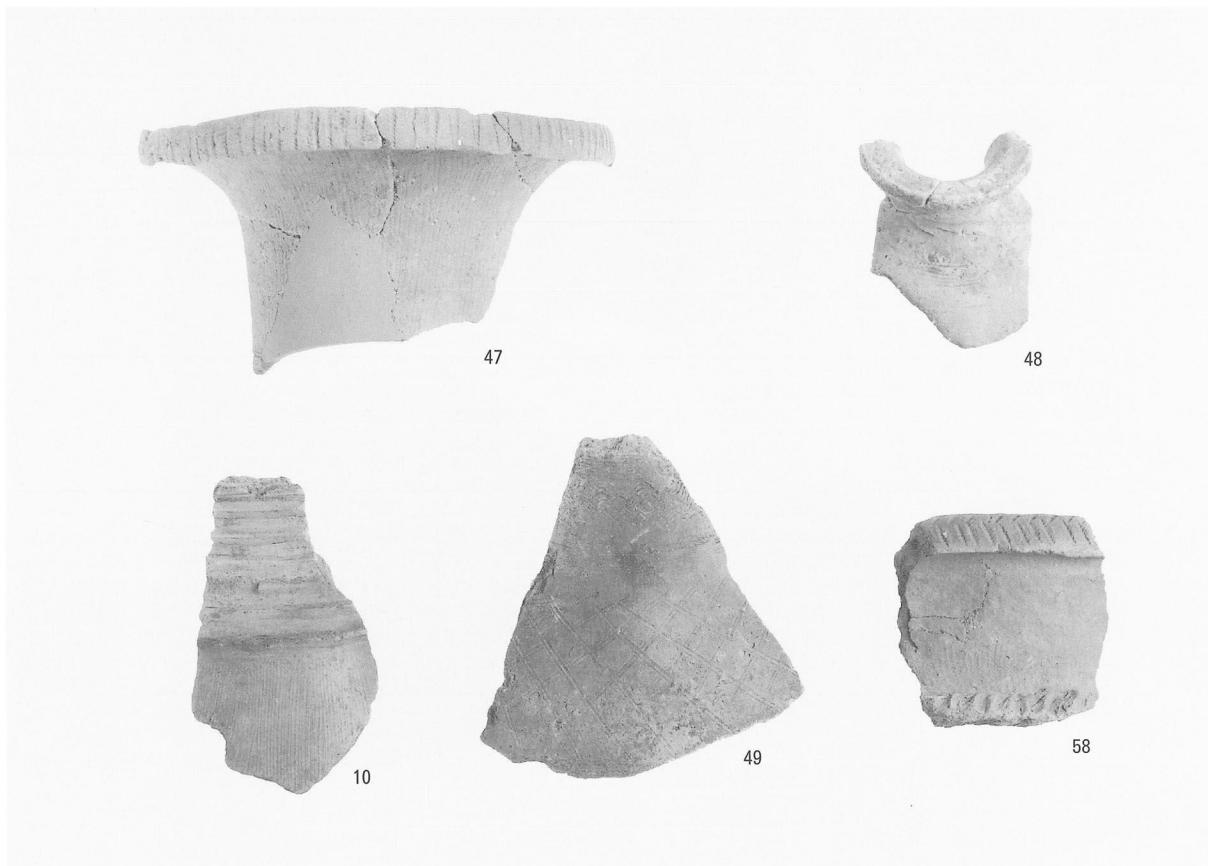


2区 室町時代・江戸時代以降遺構
土坑(SK020)（東から）

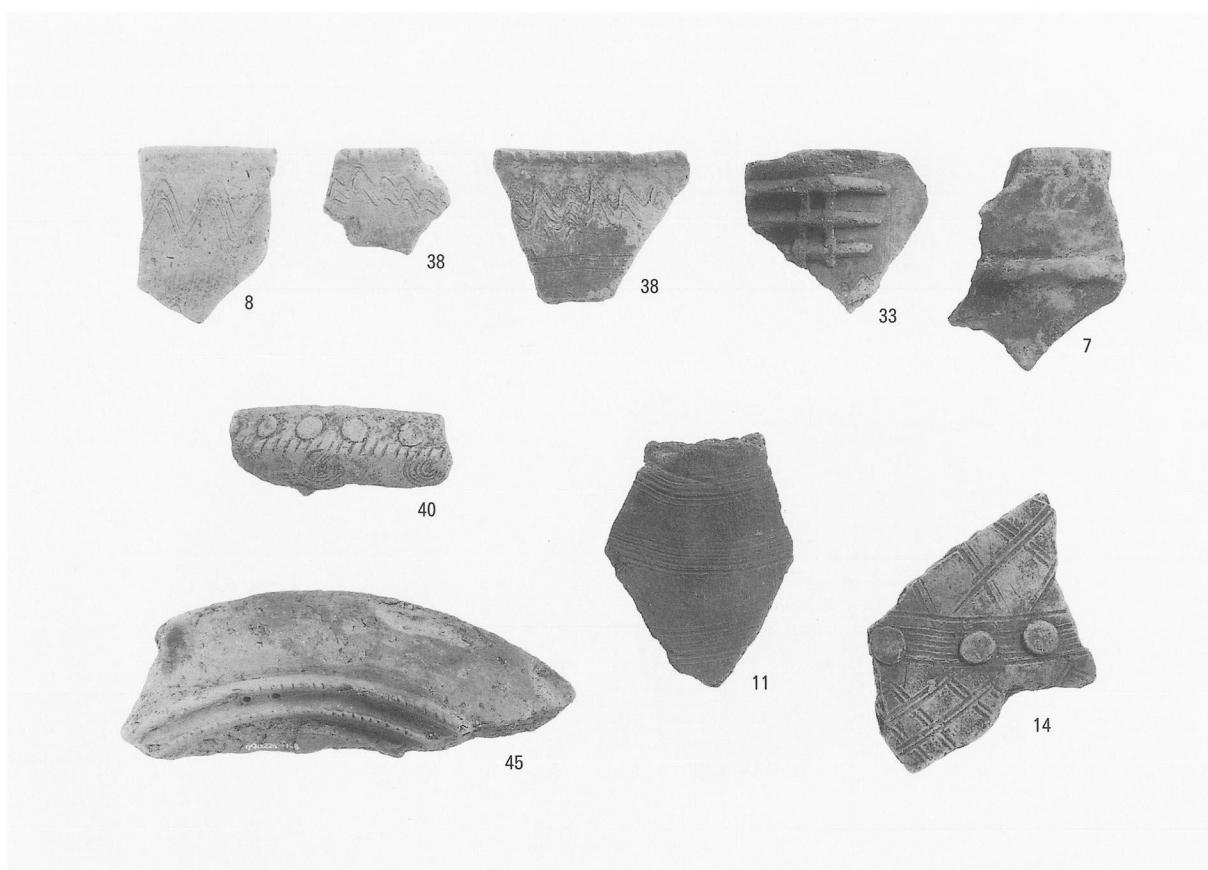
写真図版16



弥生時代の遺物①



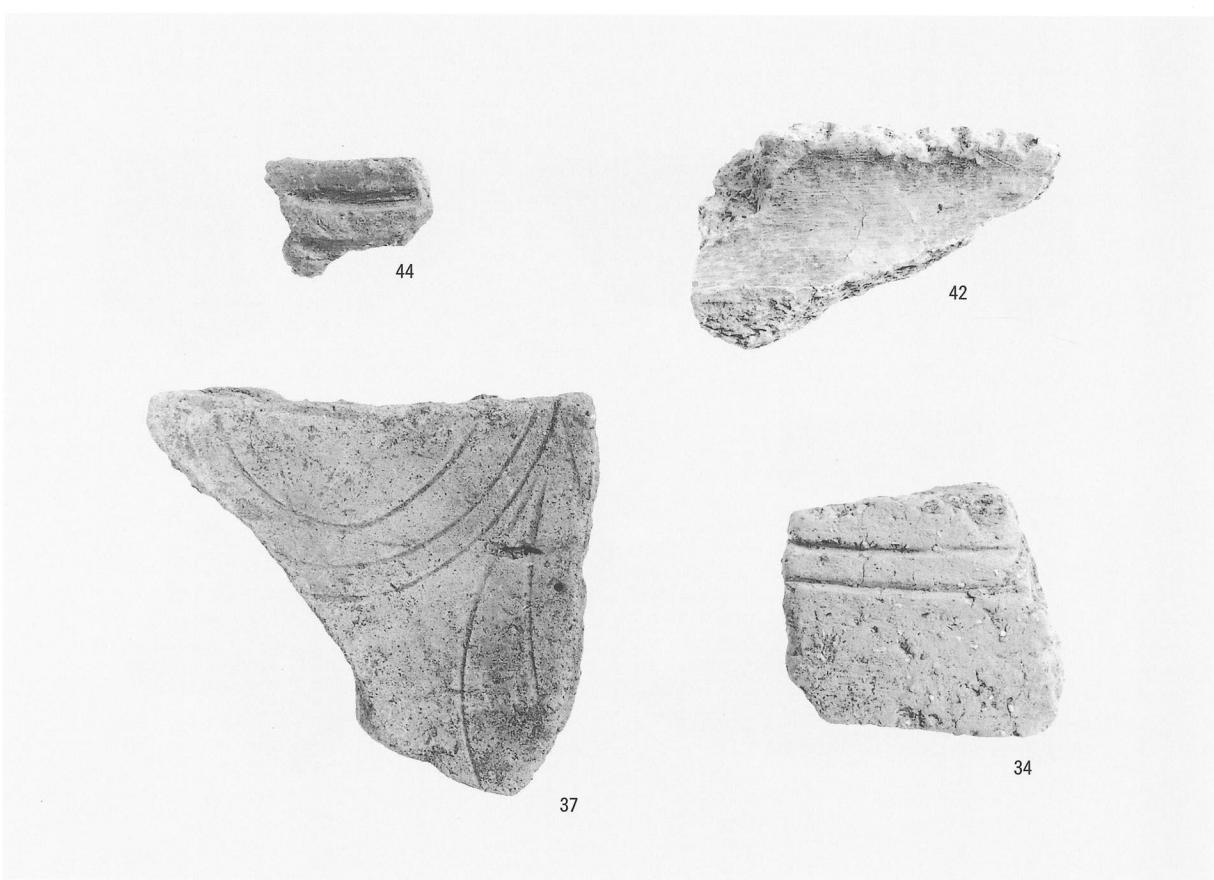
弥生時代の遺物②



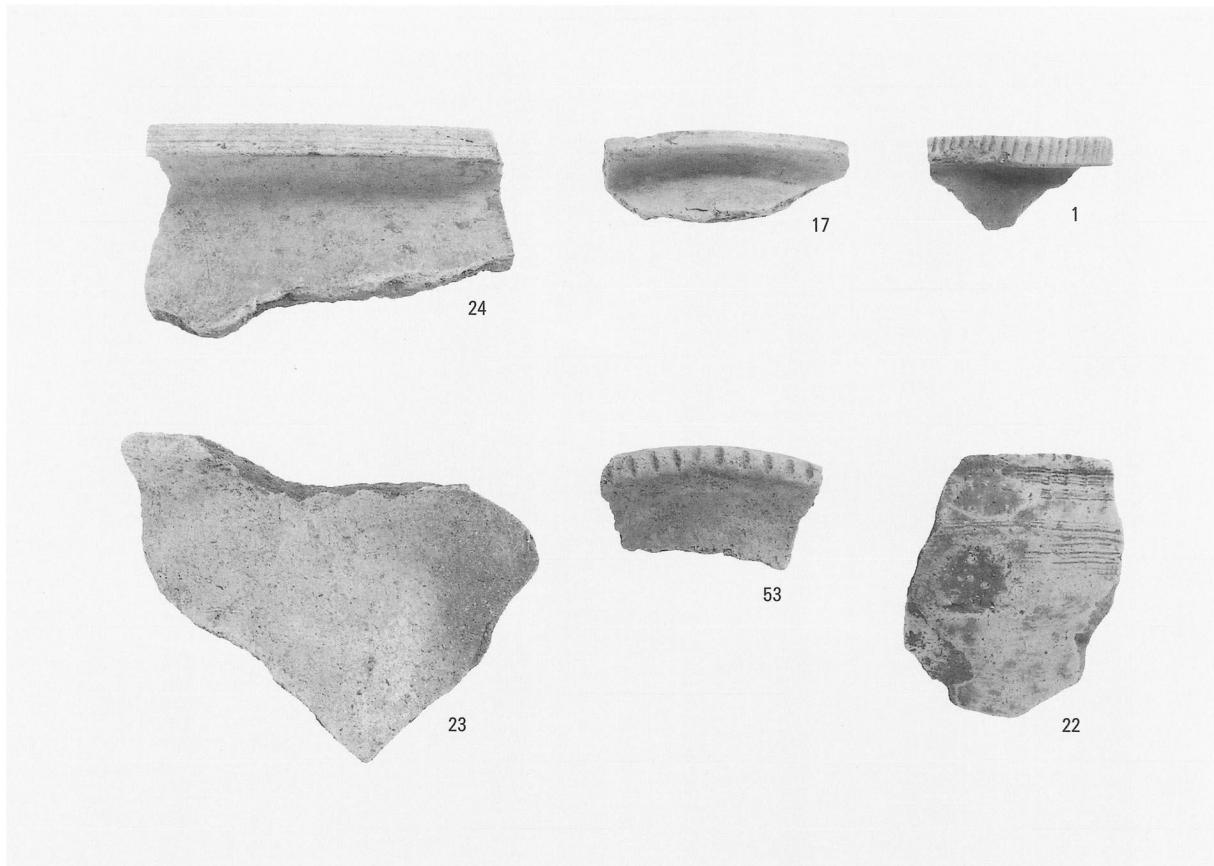
弥生時代の遺物③



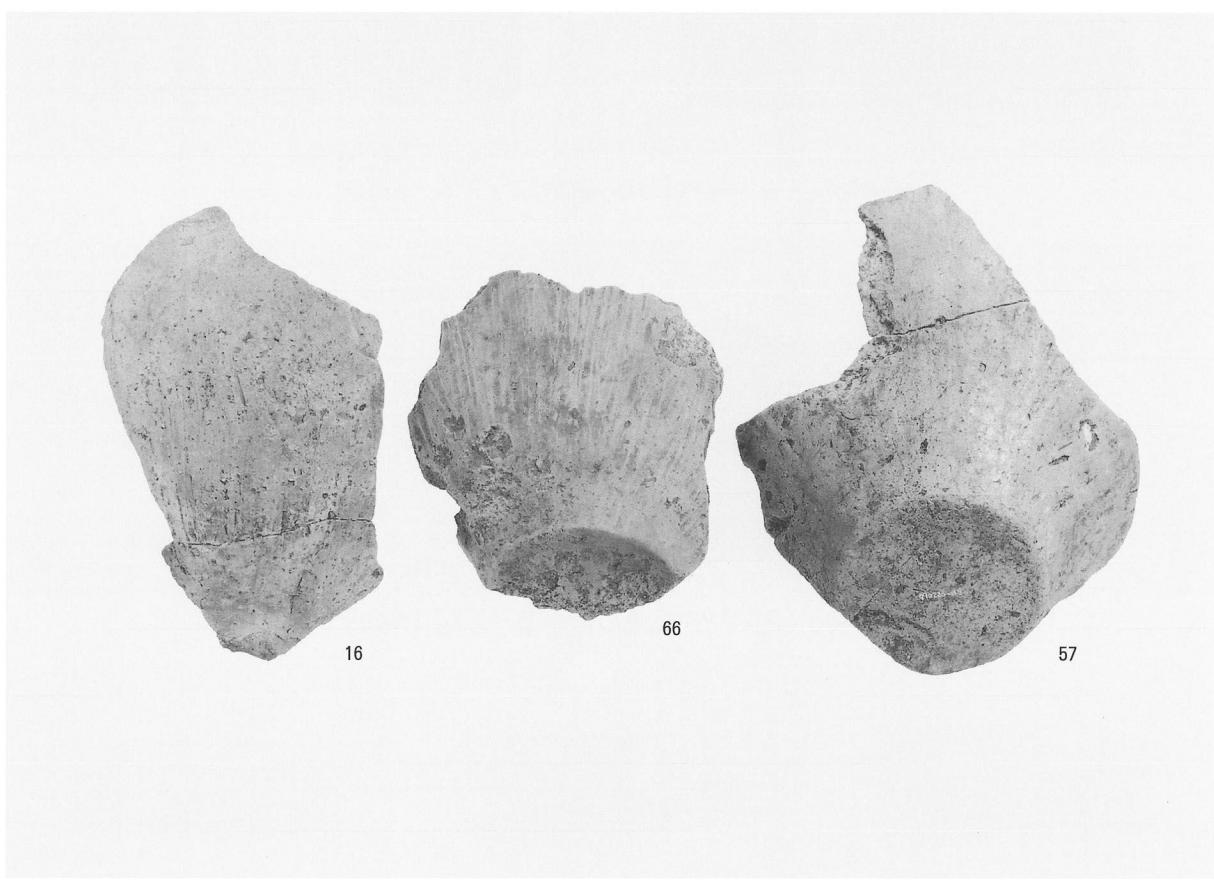
弥生時代の遺物④



弥生時代の遺物⑤

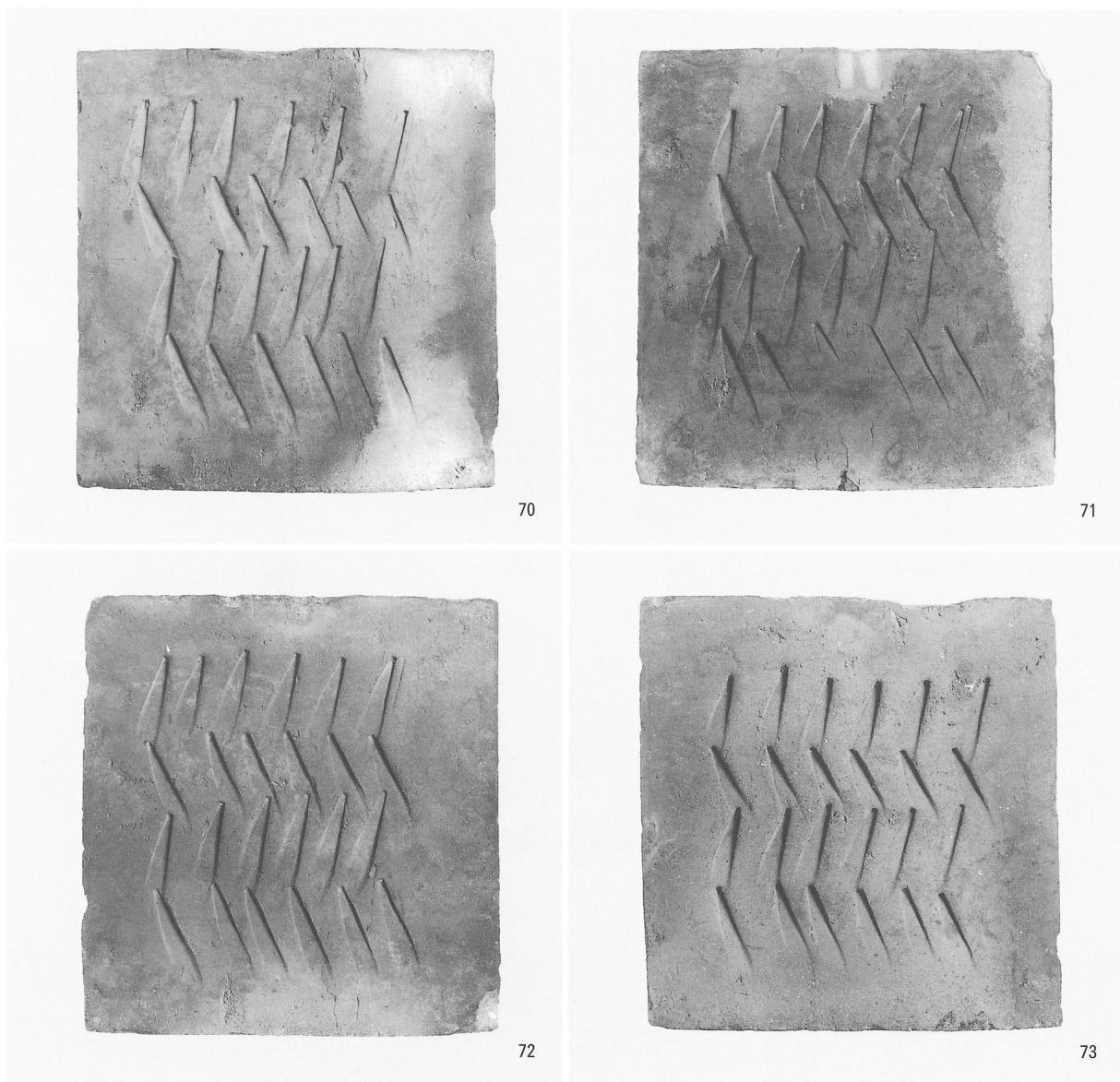


弥生時代の遺物⑥



弥生時代の遺物⑦

写真図版20



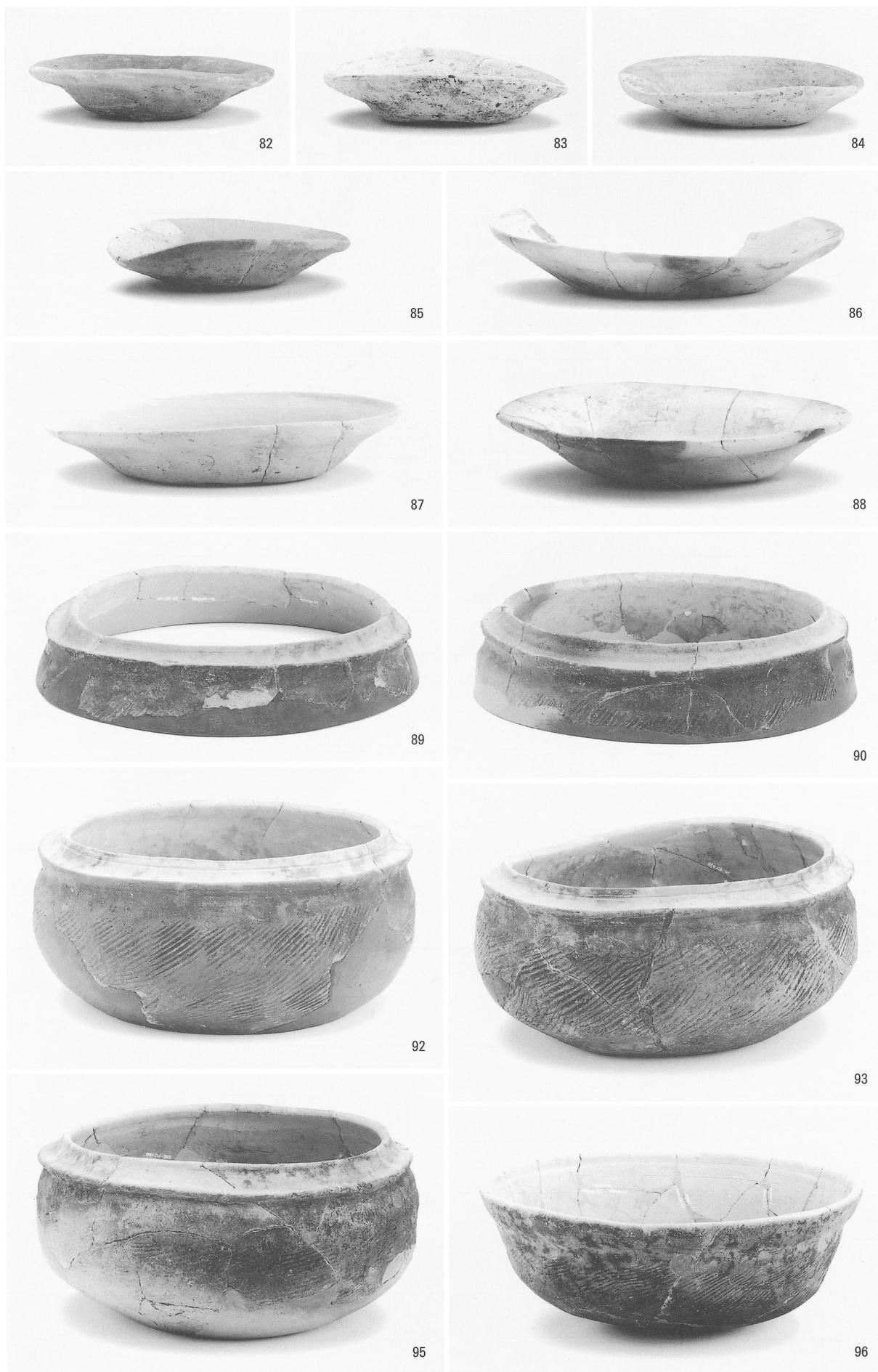
室町時代・江戸時代以降の遺物①（2区 SE024）



室町時代・江戸時代以降の遺物②（2区 SK020）



室町時代・江戸時代以降の遺物③（2区 SK022）



室町時代・江戸時代以降の遺物④（2区 SK022）



室町時代・江戸時代以降の遺物⑤（2区 SK022）



2区 SK020



2区 SD022



133



135



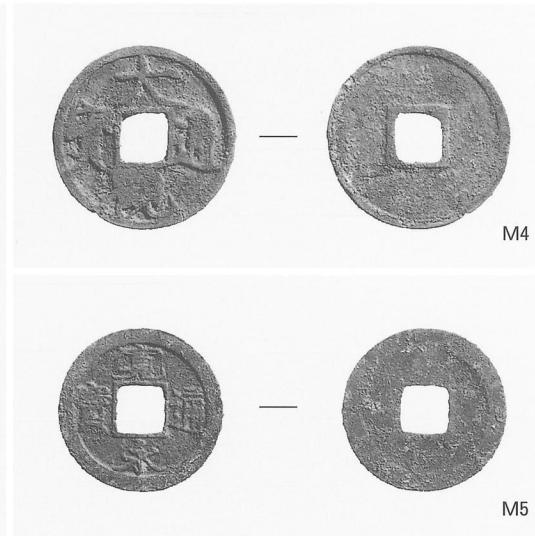
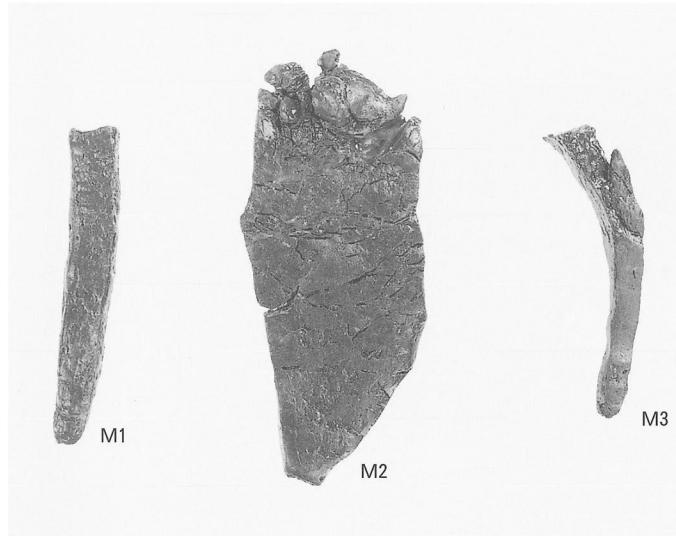
2区 SD052



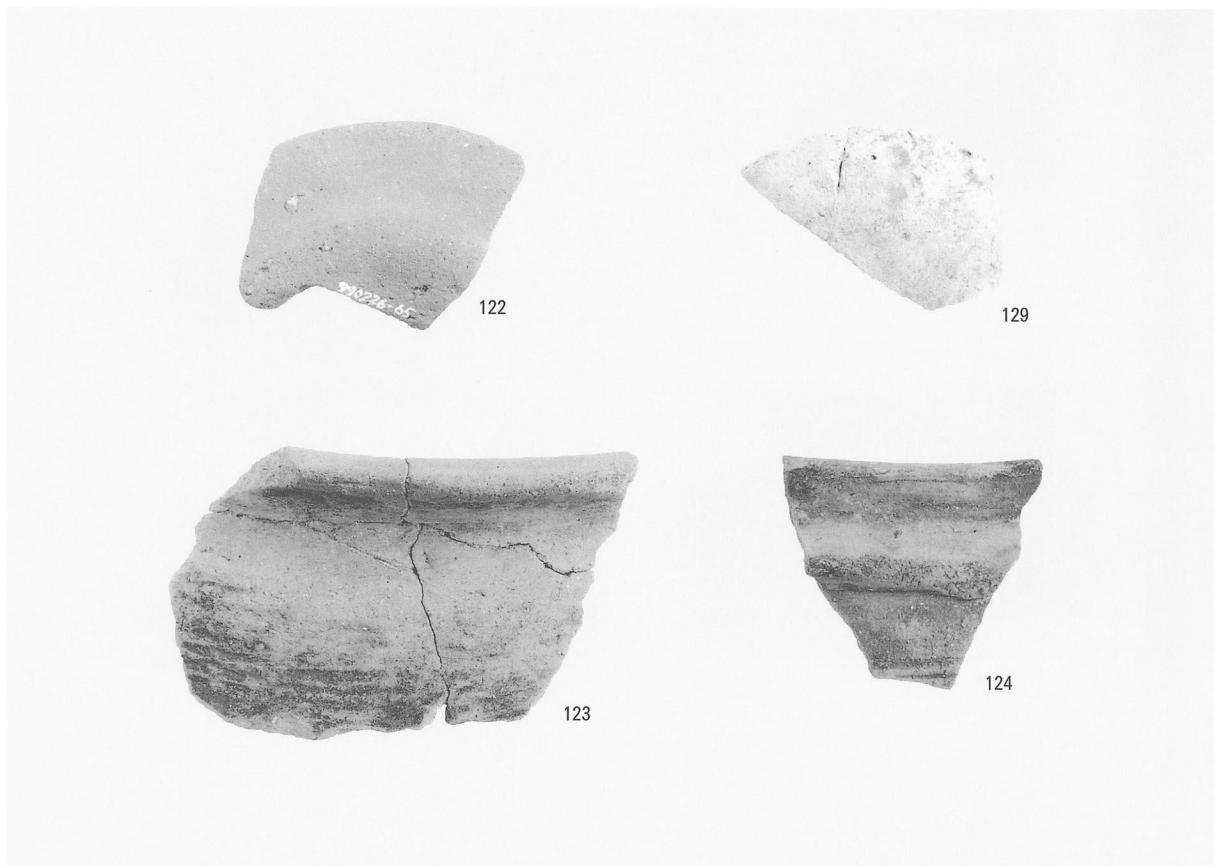
136



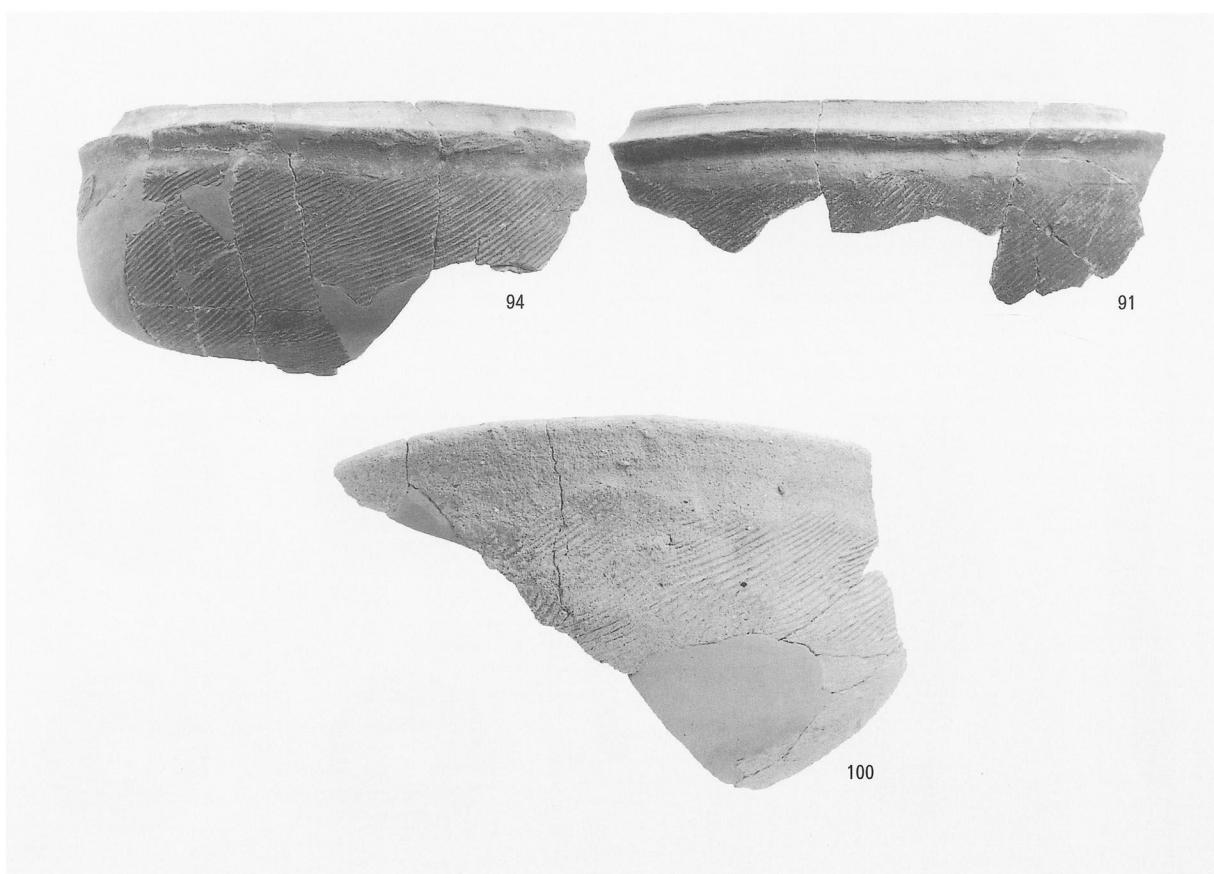
138



室町時代・江戸時代以降の遺物⑥



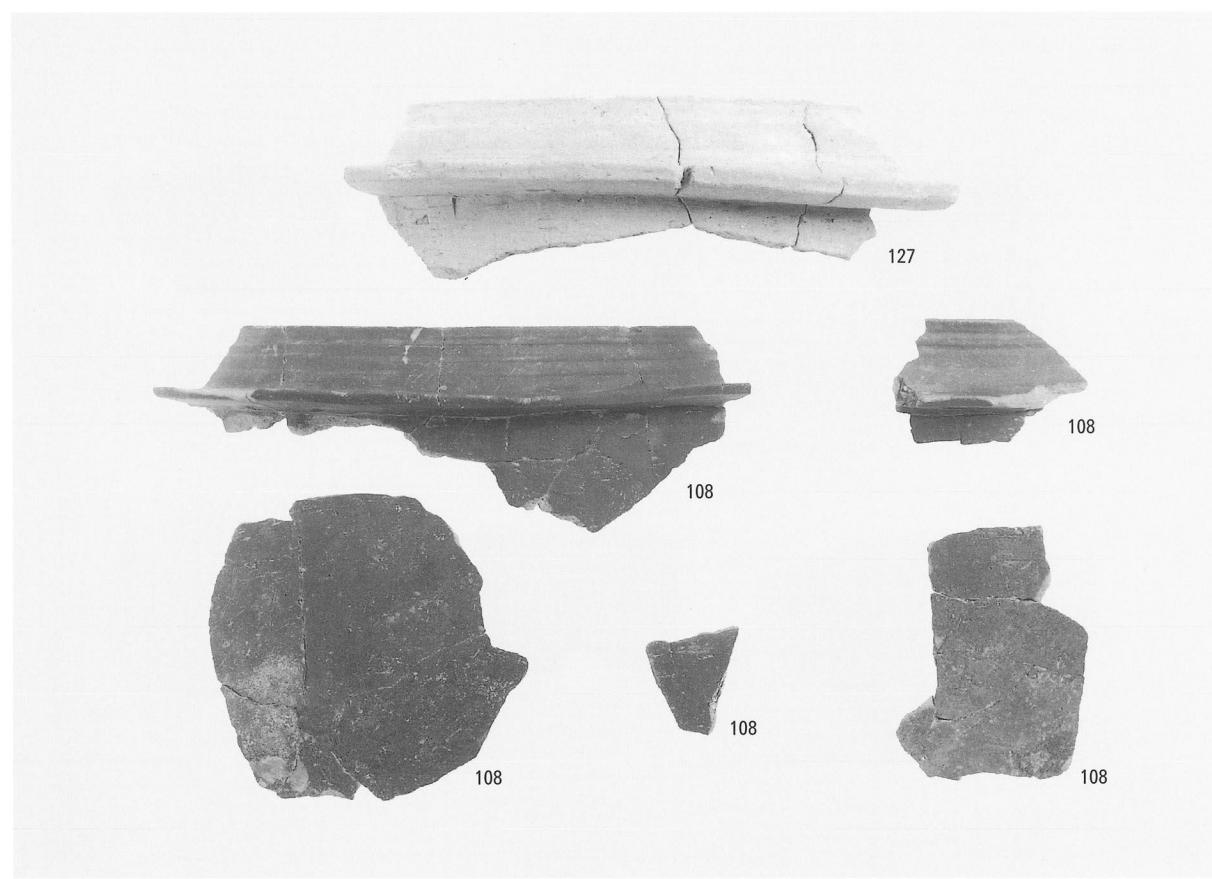
室町時代・江戸時代以降の遺物⑦（土師器皿・土製煮炊具）



室町時代・江戸時代以降の遺物⑧（土製煮炊具）

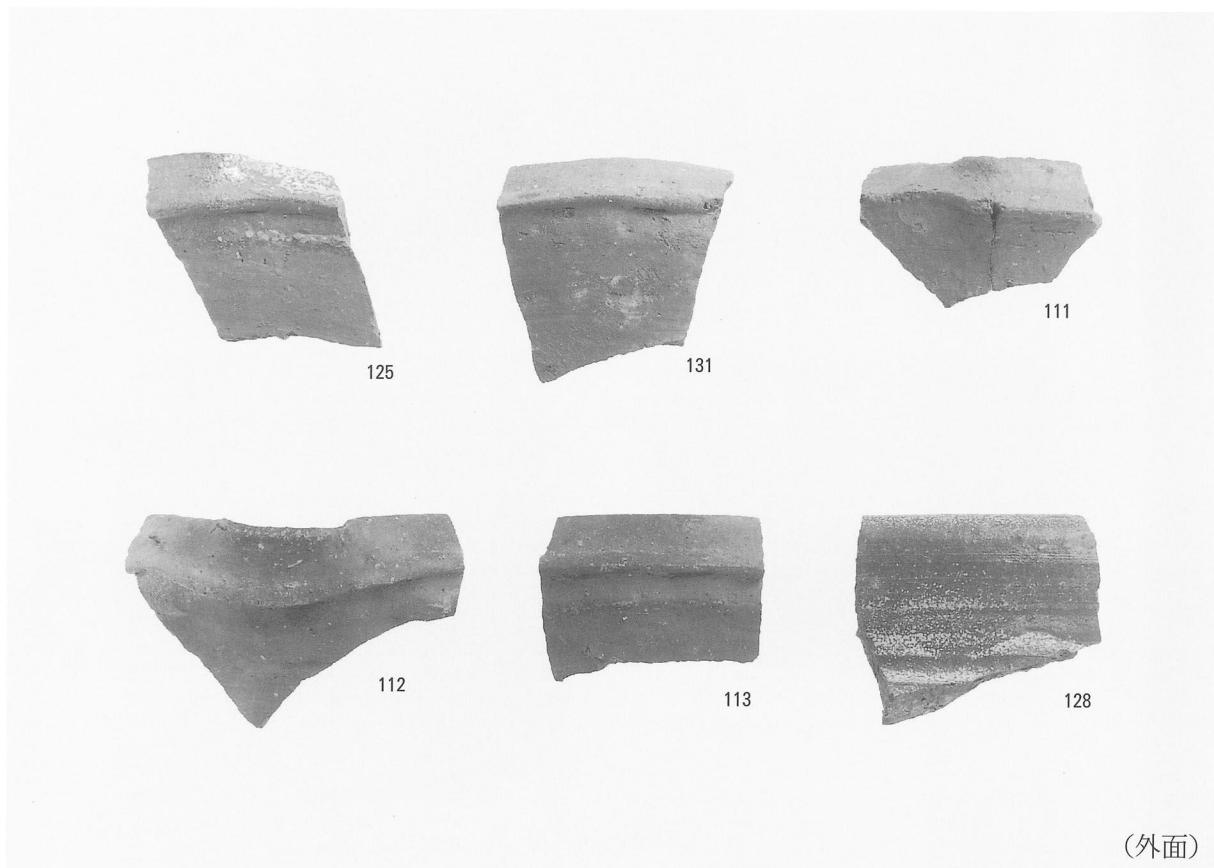


室町時代・江戸時代以降の遺物⑨（土製煮炊具）



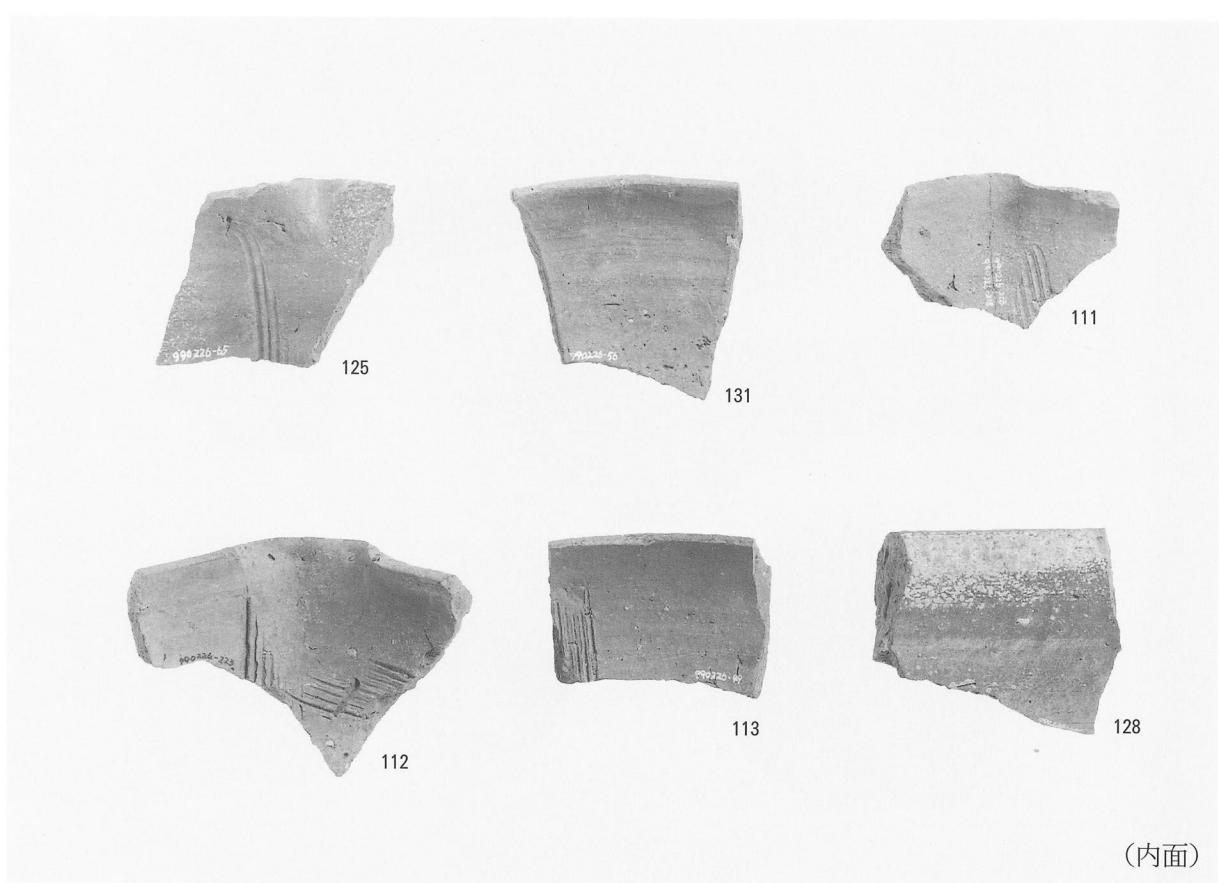
室町時代・江戸時代以降の遺物⑩（土製煮炊具）

写真図版26



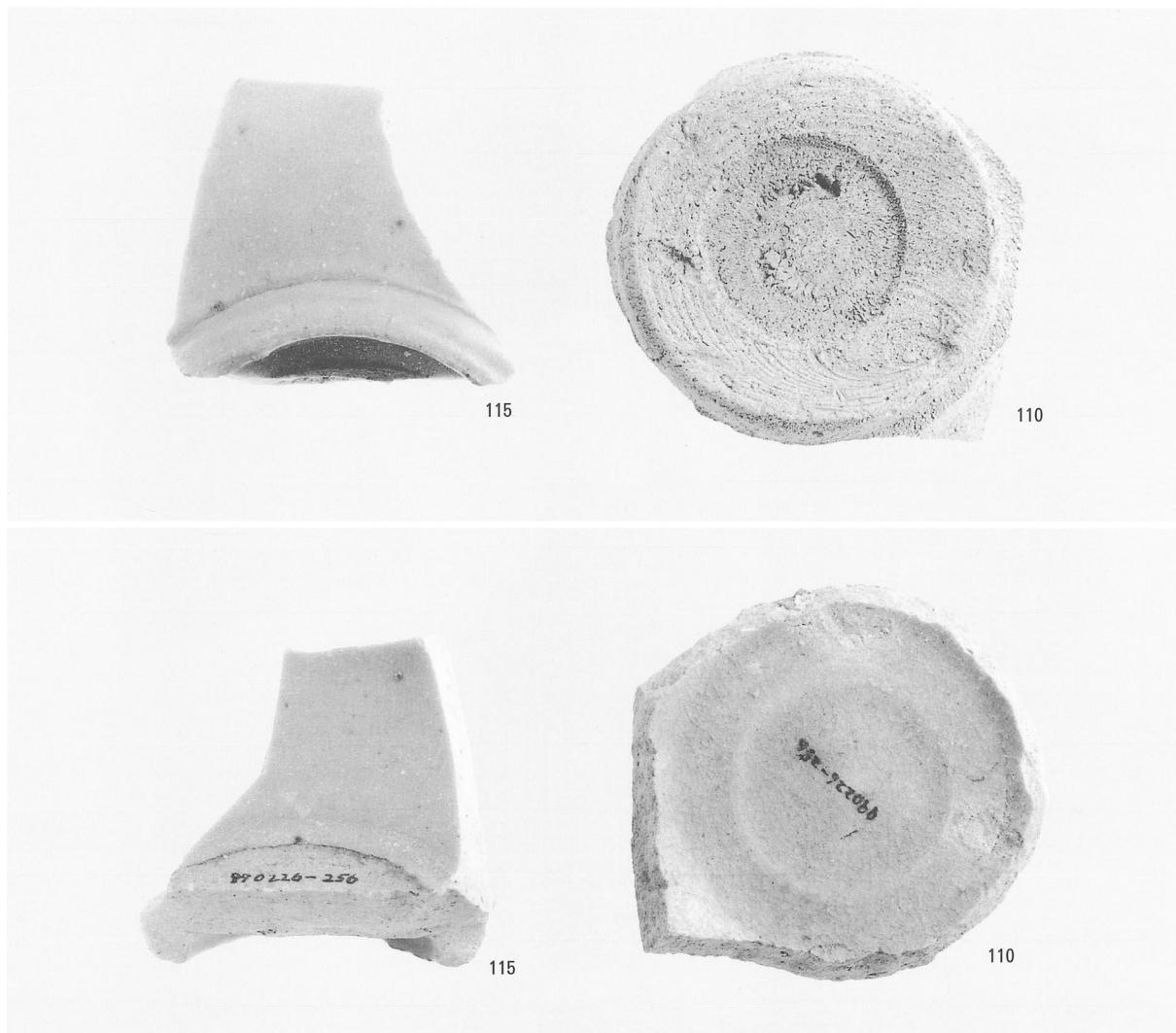
(外面)

室町時代・江戸時代以降の遺物⑪（備前焼擂鉢・甕）

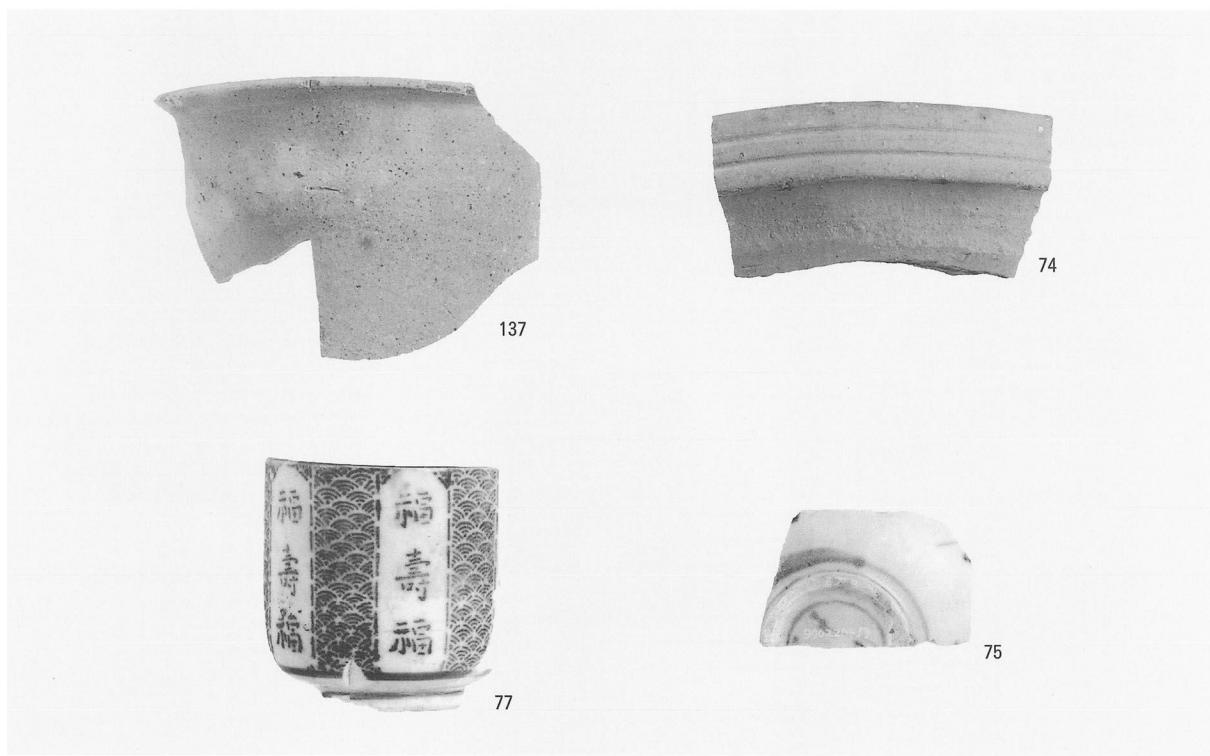


(内面)

室町時代・江戸時代以降の遺物⑫（備前焼擂鉢・甕）

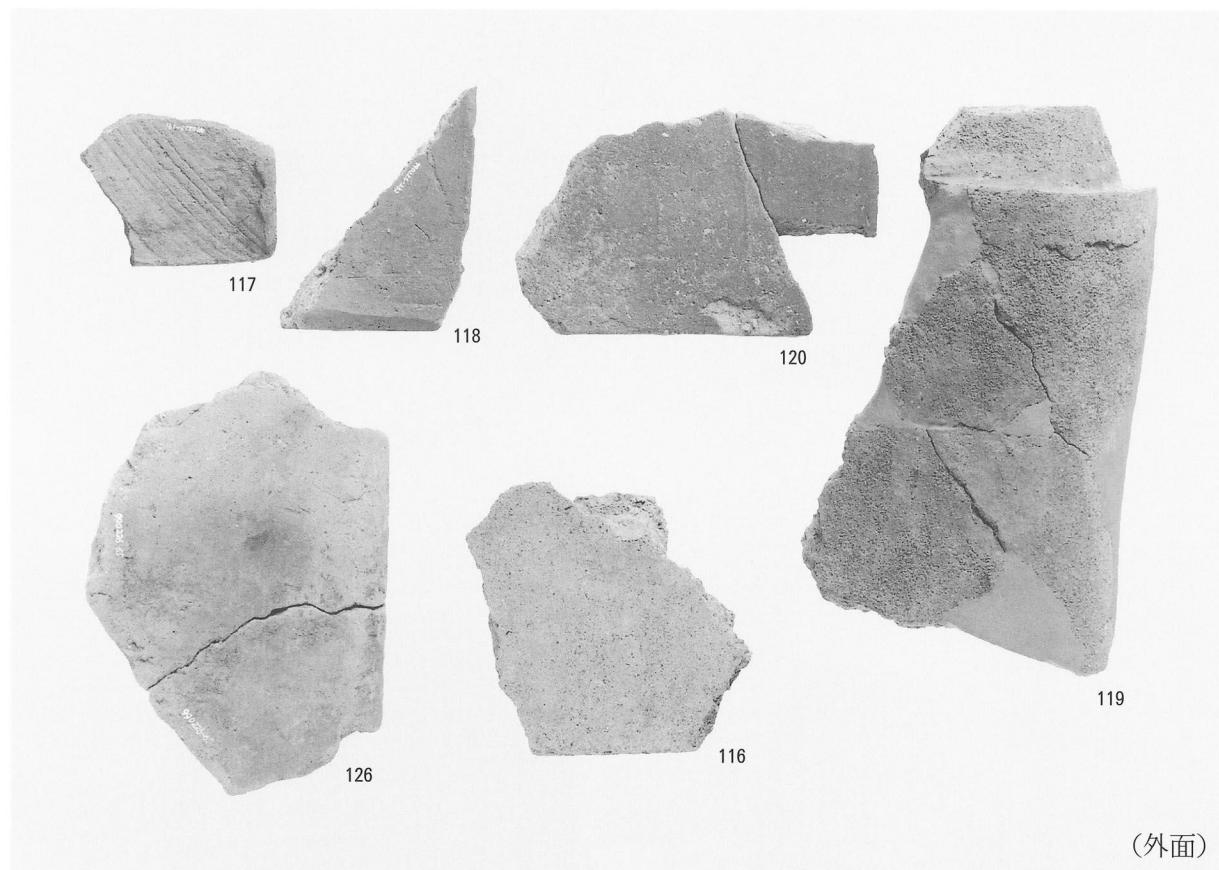


室町時代・江戸時代以降の遺物⑬（青磁碗・灰釉碗）



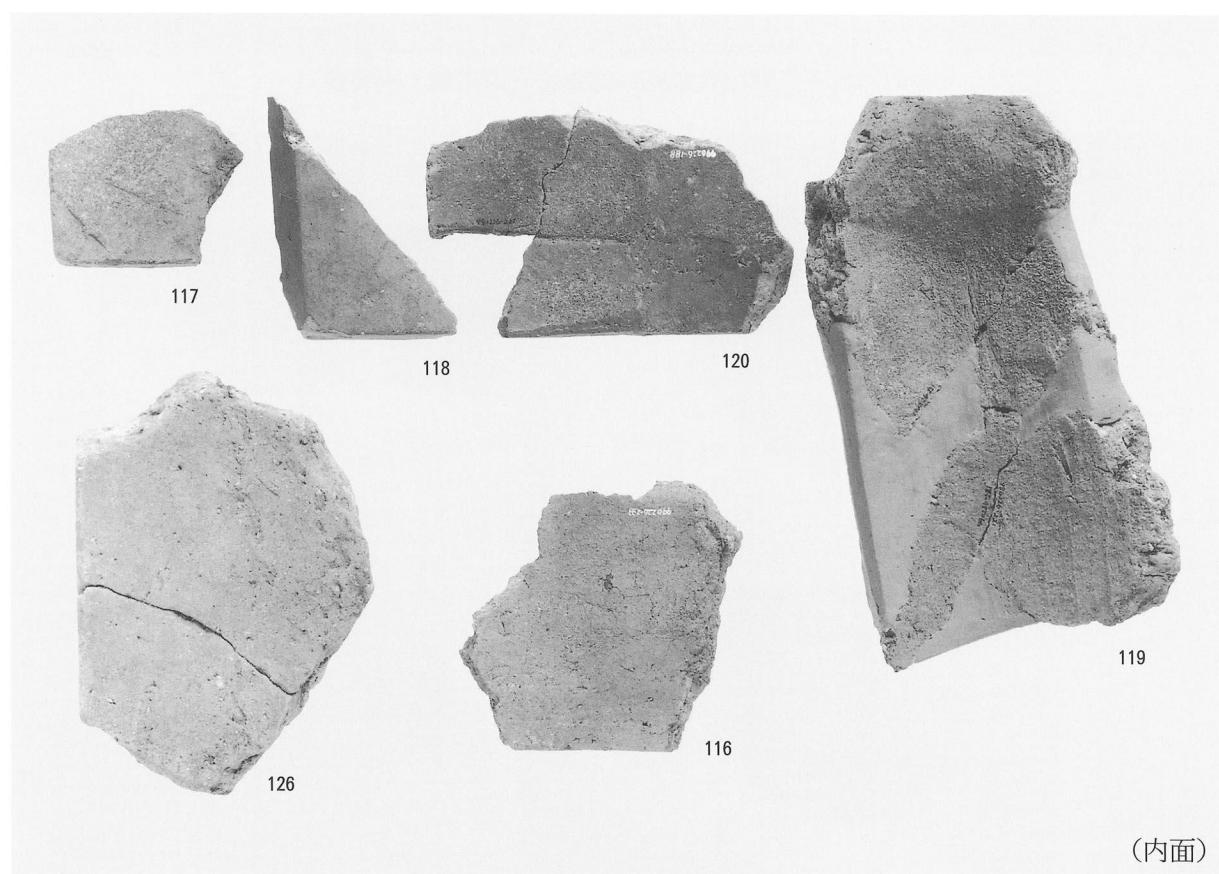
室町時代・江戸時代以降の遺物⑭（近世陶磁器）

写真図版28



室町時代・江戸時代以降の遺物⑮（瓦）

(外面)



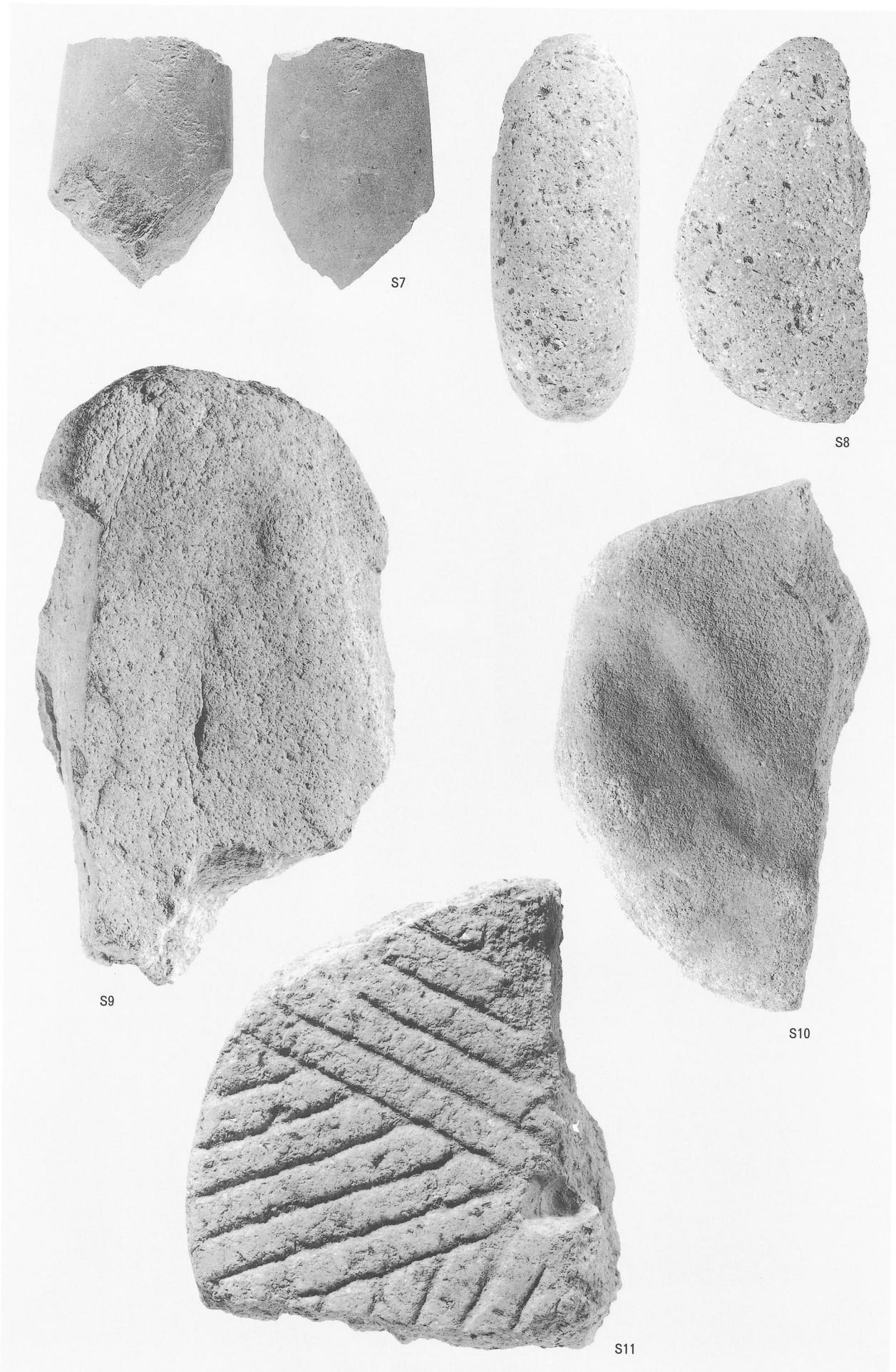
室町時代・江戸時代以降の遺物⑯（瓦）

(内面)



弥生時代の遺物（石器）

写真図版30



弥生時代・室町時代・江戸時代以降の遺物（石器）

兵庫県文化財調査報告 第338冊

兵庫県神戸市兵庫区

楠・荒田町遺跡(Ⅲ)

財団法人兵庫県健康財団新施設建設に伴う発掘調査報告書

平成20年3月21日 発行

編 集 兵庫県立考古博物館

〒675-0142 加古群播磨町大中500

TEL 079-437-5589

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央下山手通5丁目10-1

印 刷 株式会社ソーエイ

〒673-0898 明石市樽屋町6-6
